

379
12

8 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{18m} 1 2 3 4 5

始



379-12



國譯禪宗叢書

第九卷

大正
9. 10. 18
內交

國譯禪宗叢書第九卷凡例

一、本叢書第九卷に所收の書は、義雲和尚語錄(二卷)、普濟禪師語錄(三卷)、月坡禪師語錄(二卷)、一休和尚狂雲集(二卷)の四部九卷なり。此の四部の書中、義雲禪師語錄、普濟禪師語錄、月坡禪師語錄は、共に曹洞派下の名著にして、狂雲集は一休和尚の名と共に臨濟門下にて、其の書名、人口に膾炙せり。今次國譯に際しては、義雲禪師語錄は正徳五年の刊本に據り、普濟禪師語錄は元祿八年の刻本に基づき、月坡禪師語錄は天和二年の印行本に從ひたり。而して狂雲集は寛永十九年の刊行本に基き、之れに近代出版に係る活字本を參考して、一々文字の異同を正せり。希はくば誤少からんか。

一、本叢書第八卷并に本卷に收むる所の曹洞宗に屬する書の國

國譯禪宗叢書第九卷 凡例
 譯は悉く前曹洞宗大學教頭山田孝道老師の手を假りて、其の業を卒へたり。茲に録して謝意を表す。

大正九年九月

編者誌す

國譯禪宗叢書 第九卷

目次

國譯義雲和尚語錄解題	一——二
國譯義雲和尚語錄	一——三六
義雲和尚語錄原文	一——五六
國譯普濟禪師語錄解題	一——二
國譯普濟禪師語錄	一——二〇
普濟禪師語錄原文	一——七二

國譯月坡禪師語錄解題 一——二

國譯月坡禪師語錄 一——八三

月坡禪師語錄原文 一——三七

國譯狂雲集解題 一——三

國譯狂雲集 一——二二

狂雲集原文 一——六五

國譯義雲和尚語錄

解題

義雲禪師は日本曹洞の鼻祖永平道元和尚四世の法孫、寶慶寂圓の法嗣なり。草薺にして洛の教院に薙髮せしも、故あつて中頃衣を改め、寂圓に越の寶慶に謁して弟子となる。隨侍親炙殆んど二十年、永仁三年世壽四十三歳にして入室得法す。正安元年菊月、圓の入寂するや、遺囑に依りて師席を董し、一住十有六歳。正和三年更に義演の遷化に遇ひ、同年請せられて永平寺に主たり、守塔又十有餘星霜なり。師や、知見聰明倫を絶し、道價内外に高し。二會の門庭、緇素踵を接し、常に千指に満たざることなかりきといふ。

本録、上卷は正安元年越前寶慶寺の開堂より正和三年永平寺入院の上堂語、小參語、法語、偈頌、贊等を收め、下卷は其の拾遺にして、延文二年義雲和尚の法嗣曇希が校勘刊行せし義雲禪師寶慶永平二會の語録中、泄れて未だ載せざるものを集めて一卷となせしものなり。即ち山道白、義雲和尚語録を再刊するの次、當時寶慶の住持龍堂和尚、室内を搜索して其の遺篇を拾ひ輯めて一卷となし、自序及び面山瑞方の跋を附して正徳五年刊行せしものなり。其の收むる所は上堂語、小參語、贊、偈銘、

正法眼藏品目の頌、並びに編者自ら撰する所の禪師の略傳等より成る。而して其の寶慶に於けるものは、侍者圓宗空寂の編に係り、永平に於けるものは、弟子曇希の集むる所なり。



泰定改元、歲甲子に在るの春

靈隱山獨孤叟淳明題す

早歲冠を掛け、萬緣俱に棄つ。澗飲木食、氷懷蕤志。三天に趣向し、十地に步驟す。道群生を蔭ひ、徳品類に周し。赤手にして洞上の孤宗を起し、談咲にも君臣を五位に措く。若し願力に乗じて再來するに非ずんば、又安ぞ。迥然として獨異なることを得ん。

永平住山雲和尚の壽像、其の徒宗可贊を請

①冠を掛く。後漢書列傳に曰く「蓬萌字は千慶、北海都富の人、長安に之いて學し、春秋經に通ず。時に王莽其の子字を殺す。萌、友人に謂つて曰く、三綱絶ゆ、去らざれば禍將に人に及べんとすと、即ち冠を解きて東都の城門に掛け家族を將めて海に泛んで遼東に客たり。」

②澗飲木食。川の水を飲みて咽をうるほし、木の實を喰ひて飢を養ふをいふ。

③氷懷蕤志。氷懷は胸中更に煩惱の熱氣なきをいひ、蕤志は蕤(さばた)の苦きを喰ふが如き志を以て修行するをいふ。書言故事六に「清苦の名あるを氷藥の聲と云ふ」とあり。

④三天。一には世間天、一切刹土の諸大國王は人中に處すと雖も、天福を受くるが故にいふ。二には生天、一切衆生は其の善因に依りて或は欲界の天に生じ、或は色界の天に生じ、或は無色界の天に生ずるが故にいふ。三には淨天、聲聞、緣覺は諸の煩惱を斷じて

大神通を得、清淨無染なるが故にいふ。蓋し按ずるに義は住、行、向の三賢を含む、今は下の十地に對して三天といふものならん。

⑤步驟。驥は馬の疾く歩むをいふ。

⑥群生。衆生といふに同じ、上は天上より下地獄に至る十界の異生悉くを指す。

⑦品類。三界二十五有の品類のこと、一切萬物といふも同じ。

⑧迥然。超然と同じ、寥遠の貌。祈るために掲ぐる像の意。

⑨贊。贊は稱美なり、讚に作る、其の三體あり、雜贊、哀贊、史贊是れなり、但し今は雜贊にして意、褒美を専らにするなり。

⑩泰定改元歲甲子。元晋宗の曆號、本朝後醍醐帝の正中元年、西曆一三二四年に當る。

⑪靈隱山。杭州にあり、獨孤淳明禪師は徑山虎巖伏の法嗣、楊岐下十二世の孫。

國譯義雲和尚語錄序

或が云く、「拈華微笑、眞宗を默露し、面壁立雪、玄旨を密證す。言語道斷心行處滅、只だ後の來る者の本分を守らす、樺屑を鼓動して禪と説き道と説く、所以に眞宗玄旨殆ど地を拂はんとす。亦怨ならずや」と。予云く、「實に所説の如し、然も未だ槩して言ふ可からず。夫れ佛祖の宗旨は専ら妙悟に在つて、必ずしも語黙に拘らず。苟も妙悟の田地に到るに及んで、語や默や同じく性源に歸して、始めより兩般無し。昔者、黃面老子、一大藏教を演出して、天上人間、龍宮海中、處として流通せずと云ふこと無く、而も末杪頭に於て自ら告示し

①義雲。略傳は卷末にあり。
②和尙。梵語に烏婆陀耶といひ、和闍、和闍、和上等に作る、親教師、力生等と譯す、阿闍梨と共に授戒の師たる者の名なりしが、中古以來單に高僧の尊稱に用ふ。
③語錄。祖師の語を集めたるものをいふ、錄は記なり、但し是れは禪林のみに限るに非ず、宋朝以後には儒者にも何某語錄と稱するもの多し。
④序。文の一體、序は緒に通ず、即ち「はしむき」のこと。
⑤拈華微笑。拈華瞬目、破顯微笑の略、世尊一日靈鷲山に在つて、百萬の大家に說法せらる、時、梵王、金髮羅華を獻

す、世尊百萬衆前に此の華を拈じて瞬目し給ふに、大衆其の意を會せず、時に摩訶迦葉座中に在つて破顯微笑す、世尊「吾れに正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付す」と宣せらる。
⑥面壁立雪。傳燈達磨章に云く、「嵩山の少林寺に寓止して坐す、終日默然たり、人之を測ることなし、之を壁觀婆羅門といふ」と。五燈會元卷一、達磨章に云く、「其の年十二月九日夜、天大いに雪を雨らす、光(神光慧可)堅立して動かす明に及んで積雪膝を過ぐ云云」と。
⑦樺屑。樺は木の名、皮は弓に

て云く、「我れ四十餘年未だ曾て一字を説かず」と。又我が永平高祖云く、「言語道斷とは一切の言語を謂ふ、心行處滅とは一切の心行を謂ふ」と。佛佛祖の親言親口、譬へば蜜を食つて中邊皆甜きが如し。誰か一味上に安に濃淡を分たん。」義雲禪師は、寂圓の嫡子、^①知見一時に高く、道聲千古に轟く。初め寶慶の法席を補して、

貼るべし、今樺屑といふは猶ほ樺屑といふが如し。
②黃面老子。釋尊を指すなり、蓋し如來は金色身の故にいふなり。
③末杪頭。杪は「ははり」と訓す頭は助字、最後の意なり。
④我四十餘年未會説一字。楞伽經三、大般若經四百二十五等に出づ、佛、大慧に告げ玉ふ語なり。
⑤正法眼藏安居の卷に出づ。
⑥譬へば云々。四十二章經第三十八章に云く、「佛の言はく、佛道を學する者は、佛の言説する所、皆應に信順すべし、譬へば蜜を食ふに中邊皆甜きが如し、吾が經も亦爾り」と。
⑦寂圓。越前龍福山寶慶寺の開山、支那の人、天童淨和尙に依つて削染、時に智琛と名づく、乃ち和尙の族姪なり、高祖曾て天童に在りし時友とし

て好し、祖歸東の日、師亦從はんと欲す、祖云く、「和尙老いたり、且く湯藥に事へ」と、紹定元年淨和尙示寂、師因つて商舶に乗じて來り、祖に深草に謁す、其の後與聖に永平に須臾も離れず、祖示寂の後、井和尙に隨ひ、後山を寶慶寺に開き、正安元年坐逝す、壽一百有餘歲なり。
⑧知見。智論二十六に曰く、「人に從つて讀誦し、分別善量あるが如き、之を知と名け、自身得證する、是を見と名く」と。
⑨棠陰。棠は「りんご」のこと、棠陰は、こりんごの木の下といふことにて、寺の意なり。
⑩中興。中否にして再び興る之を中興といふ、今は中興祖の意。東漸略清規に云く、「道行崇重、功山門に被る者、之を準開山といひ、或は中興祖と號す。」

⑪老宗匠。老は尊稱、宗匠は宗師の意、俗間に於て和歌、俳諧、茶道等の師を「そうしやう」といふは、其の奥意を禪門に托したるに依りて、轉じて之を用ふるに至りたるならん。
⑫二會。寶慶及び永平の二會なり、會は集會の義。
⑬山僧。自己の講稱、都市を離れたる靜閑なる山中に庵を結べる僧の意。
⑭梓行。板木に刻し發行すること、蓋し梓は「あづき」の木、板木に用ふる材なり。
⑮諺々。淺短の貌。
⑯目耕。目にて耕すといふことにて、讀むの意なり、宋史に云く、「王韶家貧し、卷を執つて輟まず、家人其の田を耕さざるを謂る、韶云く、我れ常に目耕すと。」
⑰是れ獨り楞伽を云ふや。上の

妙に先師の脈を續ぎ、後に永平の業陰に坐して、能く高祖の道を興す。當時四方推して洞上の中興と稱す、謂つ可し、傑然たる老宗匠と。二會の語録幸に未だ磨滅せず、我が門の光輝豈に怡悦せざらんや。寶慶今の住山龍堂和尚、遠く一本を寄せて、山僧が序して以て梓行せんことを乞ふ、盛意譚々ならず。我れ得て辭せず、卷を開いて目耕し、覺えず編を終ふ。句句黙露の眞宗を發し、文文密證の玄旨を吐く。古人云く、「佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す」と。是れ獨り楞伽を云ふや。漫に秃筆を染めて之が序を爲ると云ふ。

佛語心云々の文は楞伽經の所說なり、今正山新く云ひて、本録も亦然る所以を明すなり。
①秃筆。穂先のきれし筆、轉じて自作文章の謙辭。
②正徳乙未。正徳は中御門帝中の曆號、乙未は同五年、西紀一七一五年に當る。
③正山。名は道白、月舟宗胡の

法嗣、夙に宗門の衰頽を憂ひて之を再興せんとす。初め諸方の大刹より請ぜらるゝも、總て應ぜざりき、延寶八年加州大乘寺に請ぜられ、先師の後席の故を以て喜んで住す、去りて後山城の覺峰に遷り、源光菴を營む、蓋し本序文は覺峰在菴中の筆に成る、元祿十二年、興聖の梅峰と共に江

戸に出て、一師印證の復古を計り、大いに法系の紊亂せるを改めんとす、前後四十年にして其の志を成す。正徳四年八月十九日寂す、壽八十。然れば本序文は示寂の翌年の筆となる、これ何かの誤りならん、未考。
④艸堂。茅屋といふに同じ、謙退の辭。

維れ時 正徳乙未の季夏祥旦

正山老衲欽んで洛北鷹峯の艸堂に序す

國譯義雲和尚語錄

住越州薦福山寶慶禪寺語錄

師、正安元年己亥十一月二十一日に於て當山に就いて開堂、拈香、祝聖罷つて、上堂、云く、「百川大海に向つて到る、到れば異名なし。一心萬境に隨つて轉ず、轉じて後本位に住す。鏡を將て像を鑄れば、鑑照することを得ず。像を將て鏡を鑄れば、光明自ら新なり。主は閫外に出でずして、遍身の手を招いて往來を接し、賓は途中に受用して、通身の眼を活し、今古を鑑す。且く道へ、

國譯義雲和尚語錄

侍者 圓宗 空寂 編

①薦福山寶慶禪寺。越前の國大野郡上庄村にあり、弘長辛酉の年、藤原下野守智圓沙彌開基す、開山は寂圓禪師なり。
②侍者。師長の左右に常侍して其の命に順ひ、給侍輔佐する役の名。これに五種あり、五侍者といふ。
③正安元年。正安は後伏見帝の曆號、同元年は西紀一二九九年に當る。
④開堂。法堂を開き講經演法することをいふ。必ずしも新に入

院せる住持に限りていふには非ざれど、現今にては新住入院開堂を特稱するに至れり。
⑤拈香。拈は「つまむ」と訓ず、香をつまみて焼くこと、換香に同じ。
⑥祝聖。聖は聖主の略にて、天子のことをいふ。祝は祝禱の義にて、天子の聖壽無疆を祝禱することなり。
⑦上堂。堂は法堂の義にして、演法のために住持が法堂に上るをいふ。

① 大衆賓主相對するが如きんば、什麼の手眼をか具せん。還つて會すや。② 觀面呈し難し。向の上の機、家風萬古、人の爲に施す。③ 上堂、廓爾として靈なり、本光自ら照す。④ 寂然として應ず、大用現前す。⑤ 木馬風に嘶いて今時の歩を運ばず、泥牛海を出て空劫の春を耕破す。諸人相委悉すや。⑥ 玉人手を招く處、復妙廻途に在り。⑦ 半夏上堂、身は浮雲に似たり、心は清風の如し。⑧ 眼に無影樹を看、耳に沒絃琴を聴く。⑨ 半夏已に過ぐ、過來底の身今什麼の處に在る。⑩ 兄弟但だ見聞に墮し去るが如きは、則ち第二義門に向つて模様を作す。⑪ 作麼生か是れ第一義諦。良久して云く、「翡翠踏躡す荷葉の雨、鷺鷥衝破す竹林の煙。」

- ① 主は主人、或は師家の意に用ふることあり。
- ② 關外は關(しきん)外、即ち家門外の意。
- ③ 遍身は全身のこと。
- ④ 賓は客人、或は學人を指すことあり。
- ⑤ 遍身は全身と同じ。
- ⑥ 大衆の大は多の義、多衆の人と云ふこと。叢林にて四方より集り來れる雲水の衲僧を總稱して、大衆と云ふを常とす。
- ⑦ 觀面は面前と云ふが如し。
- ⑧ 向上は向下の對、又は絶對平等の境地。
- ⑨ 機は機用のことにて、宗乘の意なり。
- ⑩ 家風は一に宗風とも云ひ、一宗を手標する風儀を云ふ。
- ⑪ 廓爾は無塵礙の貌、徧性の義。
- ⑫ 本光は本來の光明と云ふと、自己具有の靈性を指す。
- ⑬ 寂然は寂靜の貌。
- ⑭ 大用は大なるはたらき、即ち機用のこと。
- ⑮ 木馬は泥牛と同意にして、思慮分別を離れたる無心無作の意なり。
- ⑯ 泥牛は泥にて造りたる牛なり、沒蹤跡斷消息の意。
- ⑰ 空劫は四劫の一、壞劫の二十小劫終りて、世界全く空に歸し、更に次の成劫に至る間を云ふ、此の間また二十小劫あり。
- ⑱ 玉人は玉の如く皎潔なる人を云ふ。
- ⑲ 復妙云々は本來の妙處のことにて退歩返照の意。
- ⑳ 半夏は結制九旬安居の半、即ち入寺禁足の日より四十五日目の日を稱するなり。
- ㉑ 無影樹は無形の樹なり、聲色外の形容。
- ㉒ 沒絃琴は絃のない琴なり、雨竹風松は自然の火音樂なり。

上堂、世尊、密語あり、迦葉覆藏せず。死中に活あり、空に礙へられず。活中に死あり、物に礙へられず。有是れ有にあらす、無是れ無にあらす。芭蕉和尚道ふ、「爾に挂杖子あらば、我れ爾に挂杖子を與へん。爾に挂杖子無くんば、我れ爾が挂杖子を奪はん」と。畢竟作麼生。① 心地諸種を含む、② 普雨悉く皆生ず。③ 既に華情を悟り已れば、④ 菩提の果自ら成る。

中秋上堂、⑤ 乾坤の眼を開いて更に眼に當るの境なく、⑥ 水天の光を放つて終に物に應ずるの照を作す。⑦ 船子絲綸を垂れて、⑧ 直下に釣り得て船に載せて歸る。⑨ 雲巖掃帚を擎げて、⑩ 驀頭に拈起して空に對して拂ふ。拂子を豎起して云く、「而今將ち來つて雲上座が手裡に在り、

- ① 聽取することなり。
- ② 兄弟は法門の兄弟にて、共に本師を同じうするを云ふ。又一會の僧を雲兒水弟と云ふ。
- ③ 形式的の動作をいふ。
- ④ 作麼生は支那の俗語にして、生は助辭、作麼は「何」と同じく、如何、如何に、如何にせん等の意に用ひらる。
- ⑤ 第一義諦は第二義門に對する語なり、第二義門は客觀的事實を稱し、第一義門は主觀的理想を云ふ。
- ⑥ 翡翠は鳥の名、和名はせび。
- ⑦ 鷺鷥は鳥の名、和名はさぎ。
- ⑧ 密語とは世尊秘密附屬の語のこと。
- ⑨ 迦葉は印度相承の第一世なり。摩訶陀國の人、姓は婆羅門、名は迦葉波(Kasyapa)、飲光と譯す、初めは婆羅門に出家せしも、多子塔前に於て世尊に遇ひ、遂に佛弟子となり、終身十二頭陀を行じ、十大弟子中、頭陀第一と稱せらる。
- ⑩ 芭蕉和尚は支那鄂州芭蕉山慧清禪師なり、仰山の孫にして、南塔の光涌に嗣せり。
- ⑪ 挂杖は僧の携ふる杖のことなり、禪僧之が携ふる所以は、行脚の時危に乘じ、險を渉るに力を扶くるが爲なり。昔佛の之を許されたる由縁に二あり、一には老瘦無力の者、二には病身の者。
- ⑫ 心地とは、心は一切萬法を現出すること恰も大地の草木百穀を生ずるが如くなるが故に喩へて云ふなり、禪宗にては各自の本心を指す。
- ⑬ 普雨は雨のこと。
- ⑭ 華情は花の心。
- ⑮ 菩提は梵語、智、道、覺等と譯す、佛の正覺智のことなり。
- ⑯ 乾坤の眼。盡十方界是れ沙門の一隻眼と云ふ語なり。意相

還つて是れ什麼物をか拂ふ。大衆委悉せんと要すや。本来無一物、何の處にか塵埃を拂はん。

開爐上堂、舉す、永平初祖云く、「火爐今日大いに口を開き、諸經次第の文を廣説す。

寒灰と鐵漢とを鍊り得て、心々片々目前に般なり」と。師云く、「深く冷灰を撥いて小火を看る、驀頭に開示して、眞文を轉す。炭を點じ柴を添ふ意なきに似たり。陝府の鐵牛鍊り得て般なり。」

上堂、朝打三千、佛祖證せず。暮打八百、狸奴悉く知る。順行や、達磨西來九年、面壁し、逆行や、庭前の柏樹枝葉堆を成す。一念萬年、鏡を以て像を鑄るが如し。萬年一念、像を以て鏡を鑄るに似たり。甚と爲てか照す。」

恁麼なるや。大衆還つて會すや。良久して云く、「丙丁童子來求火、天上の斗星廓として空を照す。」

佛涅槃上堂、常寂にして照あり、無功中に位を辨じ、顯赫として靈なり、自位中に功を立す。綿密々の處、回互傍參す。明歷々の時、孤圓絶跡す。諸禪德、但だ釋迦老子、今日の夜半に至つて、般涅槃に入るが如きんば、還つて、出沒應變底の通理ありや。良久して云く、「唯一堅密身、一切塵中に現す。」

上堂、虚空包容して、萬像潰散なし、大地突出して一心覆藏せず。一隻の眼睛盡十方界に明歷々、無量の寶刹、一微塵裏に露堂々。本地の風光曾て欠少せず。情識計較の及ぶ

同じ。船子云々とば、圓悟擊節の上、船子の頰に、千尺の絲綸直下に垂る、一波纒かに動けば萬波隨ふ、夜靜かに水寒うして魚食まず、滿船空しく月明を載せて歸る。」

直下は當下に同じく、其の儀、或は直にの意なり。雲巖掃地の公案なり。作務も一色の辨道にして第二頭に涉らざることを示す。

驀頭は驀直、驀地等と同じく直にの意なり。本来無一物云々とば萬法の眞相は妄想分別の外にして、執着すべき一物もなきを云ふ。故に拂ふべき煩惱の塵埃をも認むべからずと云ふ。

開爐は陰曆十月一日(陽曆十一月一日)に至れば、僧堂其の他各寮舎に爐を開きて煖を取る、是を開爐と云ふ。此の

日住持人、大衆を率ゐて佛前に於て開爐の式を擧ぐ、之を開爐の上堂と云ふ。

舉は擧示なり、人に示すこと。永平初祖は道元禪師承陽大師のこと。寒灰と鐵漢とは情識分別を滅盡したる學者と、其の心の堅固なること鐵の如き學人となす云ふ。

眞文は世尊金口所説の法文を指す。又は眞實無相の法文をも云ふ。陝府の鐵牛とは、大明一統志に河南府の鐵牛は陝州城外黃河の中に在り、頭は河南に在つて尾は河北にあり、世に傳ふ、萬鎚を以て河患を鎮むと。意は今日萬王の手をからず、直に爐中より此の熱鐵牛を得べしとの火爐語なり。

朝打暮打とは、朝に三千を打ち、夕に八百を打すと云ふこと。丙丁は五行の火なり、一句の意は火を以て火を求むると、即ち自己を以て自己を覓むるに喩ふ、他に向つて求むれば遠うして遠しの反對なり。

佛涅槃は釋尊の涅槃會なり、毎年二月十五日に行はる、三佛會(誕生、成道、涅槃)中の一。常寂は常住不變の眞理を指す。無功は功勳(修行の効果)あらはれたることの對、或は大功、功々等と云ふ。位は人々本具の主人公あることを信じて、之に向つて位を云ふ。顯赫は最もあきらかなる形容。自位とは自性本然の位のこと。

綿密々は目に見えの修養不斷の形容。

情識計較の及ぶ

所にあらず。所以に南嶽塼を磨し、東平鏡を破る。謂つべし無功の時功を立し、無位の處位を排すと。大衆是の如き手段を會せんと要すや。良久して云く、「三級浪高うして魚龍と化す、癡人猶ほ辱む夜塘の水。」

佛生日上堂、塵に處して曾て塵に染まらず、水を以て如何が水を洗はん。一性本然として來去を絶す。萬徳圓成して諸縁に合ふ。所以に降神誕生の身を現し、灌沐清淨の體を示す。七步周行、歩々方に迷はず。天上天下巍々として獨り尊と稱す。諸禪徳作麼生か是れ我が佛降生灌沐底の道理。良久して云く、「摩耶漆桶忽然として脱し、難陀鼻頭葛地に穿つ。」

解夏上堂、一もまた不住、箇箇圓成、異

- ① 回互傍參とは甲乙彼此互に交參滲入すること。
- ② 明歷々とは分明なること、自己の境界の不曾藏なるに云ふ。
- ③ 孤圓絶跡は秋月の長空にありて絶對孤過なるが如き意なり。
- ④ 諸禪徳とは會下の諸禪人を云ふ。
- ⑤ 夜半とは釋尊の入滅が夜半なりし故にいふ。
- ⑥ 般涅槃は梵音パリニルヲナ(Parinirvana)、滅度、圓寂等と譯す、涅槃に同じ。
- ⑦ 出沒塵髮は自由自在なる機用のこと。
- ⑧ 唯一堅密身とは世尊の常住金剛不壞の身のこと。
- ⑨ 一切塵中は日光中喫茶喫飯左之右之萬般といふこと。
- ⑩ 一隻眼は活眼のこと、雙眼は何人も具する所なり、更に左

- 右に偏せざる一眼を云ふ。
- ⑪ 無量の寶刹とは無數の大伽藍と云ふこと。
- ⑫ 一微塵とは天眼にあらざれば見ること能はざる程の微細なる塵のこと。
- ⑬ 露堂々は明歷々と同意。
- ⑭ 本地の風光とは各自本具の心性のこと。又本来の面目、本分の田地なども云ふ。
- ⑮ 情識計較は凡夫の妄分別のこと。
- ⑯ 南嶽塼を磨すは、南嶽塚讓と馬祖道一との問答なり。
- ⑰ 東平は仰山寂禪師のこと、馮山の法嗣東平に住したるが故にいふ。
- ⑱ 無位は眞箇解脫の人のこと。
- ⑲ 三級云々以下は龍門の故事なり。魚が龍に化して去りたるを知らずして、癡人は夜中潛に魚を捜索すと云ふ意。
- ⑳ 佛生日は四月八日に佛世尊降

もまた無間、法々無礙。把定すれば則ち凡聖人畜同居して一掌を成すが如く、放行すれば則ち東西南北位を分つて五指を豎つに似たり。兄弟、孟夏窟籠を構へ、初秋布袋を開く。中間九句作麼生か履踐せん。還つて奇特の事ありや。良久して云く、「坐臥經行我が事にあらず、清風明月自ら相宜し。」

上堂、塼を磨して鏡

- ① 誕の日なり。
- ② 塵は塵界のことにて、娑婆世界を指す。
- ③ 水は元清淨なるが故に、水を以て此を洗ふこと能はざるを云ふ。
- ④ 本然とは本來、又は天然と同じ。
- ⑤ 萬徳とは如來の三十二相、八十種好等の福徳相のこと。
- ⑥ 諸縁とは善惡是非等吾人の相對の諸の前後なり。
- ⑦ 降神とは佛誕生の時、諸天龍神の出現を云ふ。
- ⑧ 灌沐とは如來の清淨身に香湯淨水等をそそぐこと。
- ⑨ 七步云々とは佛誕生の時、前後左右七脚づゝ玉足を運び給ひしを云ふ。
- ⑩ 方とは四方即ち前後左右を指す。
- ⑪ 天上云々とは、佛誕生の時、右手を以て天を指し、左手を以て地を指し、天上天下唯我

- 獨尊の語を宣し給へり。是れ即ち天地間に於て最尊最勝者たるの意を示されたるものなるを云ふ。
- ⑫ 摩耶は一に摩訶摩耶と云ふ、梵音マヤ(Maya)、極妙、大智母、天后等と譯す、淨飯王の后にして世尊の母、佛出生の後七日にして歿せり。
- ⑬ 漆桶とはうるしをけのこと、今は凡胎に喩ふ。
- ⑭ 難陀は梵音ナンダ(Nanda)、跋難陀、梵音ウパナンダ(Upa-ananda)と兄弟にして八大龍王の中なり、世尊降生の時、天甘露を雨らして供養せり。佛法の守護神なり。
- ⑮ 解夏は一或は「げち」とも云ふ、夏安居の制を解くことなり。時は七月十五日の早天に於て此の式行はる。
- ⑯ 箇々圓成とは、蠢動含靈本來解脫の意。

- ⑰ 法々無礙とは、森羅の萬象獨露現成なるが故に。
- ⑱ 把定は取つて動かざるの義。
- ⑲ 放行は收束することなく、自由任すること。
- ⑳ 兄弟は一會の衆侶を指す。
- ㉑ 窟籠とは束縛の意、一夏の安居禁足を指す。
- ㉒ 履踐は修行上の所得のこと。
- ㉓ 塵界は全界と同じ。
- ㉔ 蒲團は坐禪の時用ふる敷物にして、其の形圓なり、中に蒲又はパンヤを入れて作るが故に此の名あり、我が國に於て夜具障具等を蒲團と稱するは其の義を失せり。
- ㉕ 記得、學示と同意なり。
- ㉖ 嚴陽は趙州の法嗣。
- ㉗ 趙州は支那山東省曹州鄆城の人、姓は祁、幼にして本州臨通院に剃髮し、南泉普願に參じて契悟す、黃檗、寶壽、鹽官、夾山等を歴訪し、後趙州觀音

と作せば、魔則ち作佛す。鏡を以て像を鑄れば、光何の處にか歸せん。① 盡界を拈じ來つて蒲團上に坐し、蒲團を放下して盡虚空に掛く。記得す。嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何。」州云く、「放下着。」尊者曰く、「一物既に不將來、箇の甚麼をか放下せん。」州云く、「甚麼ならば即ち擔取し去れ」と。師曰く、「這箇の道理を委悉せんと要すや。佛子此地に住すれば、則ち是れ佛の受用、經行若しくは坐臥、常に其の中に在り。」

上堂、山に登らば須らく其の頂に到るべし、到らざれば宇宙の寛きことを知らず。海に入らば須らく其の底に徹すべし、徹せざれば滄溟の深きことを測らず。諸兄弟、法に入つては須らく其の通塞を辨すべし、辨せざれば脱

院に住し、大いに北方に南頓の禪風を鼓吹せり。乾寧四年十一月寂、壽百二十、眞際大師と諡す。

① 一物云々とは空無一色の消息を云ふ、乃ち父母未生以前、一機未發已前に承當して我執法執を去り、虛無空寂の境に至ること。(從容錄第五十七則の公案なり)。

② 放下着。放下は手より物を放ち捨ること、一物も執することなきを云ふ。着は助辭。

③ 擔取は荷ふこと、放下の反對なり。

④ 山に登らば……滄溟の深きを測らず。大慧正法眼藏一に大珠和尚の語として擧げたり。永平廣錄四の上堂等にも此の語あり。

⑤ 宇宙。上下四方を宇といひ、古往今來を宙といふ。

⑥ 滄溟。滄海に同じ、青海原のこと、溟は海の遠く蒼にしてくらき貌の義。

⑦ 通塞。消息と同じ。

⑧ 脱落。「もわける」といふこと、吾が身心此の儘にして我慢我見悉く無くなれる貌。

⑨ 洞山。洞山悟本大師のこと、雲巖曇晟の法嗣、此の因縁傳燈十五及び會元十三に見ゆ。

⑩ 闍梨。阿闍梨の略、梵語、阿遮利耶、阿祇利に作る、軌範師又は正行と譯す。元來は弟子、僧俗の學解行爲を糾正指導して、其の師範たるべき大徳の稱なれども、禪門にては僧の代名詞として、現今俗稱の尊公、貴公の意に用ふ。此の場合に決して阿闍梨とは云はず、單に闍梨といふと知るべし。

⑪ 西天。支那、日本より西方にある天竺國の意にて、印度のことをいふ。

落の道を得ず。記得す、洞山僧に問ふ、「什麼の處より來る。」僧云く、「遊山し來る。」山曰く、「還つて頂に到るや否や。」僧云く、「到る。」山曰く、「頂上還つて人ありや否や。」僧云く、「人なし。」山曰く、「甚麼ならば即ち闍梨頂に到らず。」僧云く、「若し頂に到らずんば争か人なきことを知らん。」山曰く、「闍梨何ぞ且く住せざる。」僧云く、「某甲住することを辭せず、西天に人の肯はざるあらんと。」師曰く、「這箇の道理委悉せんと要すや。一片の白雲谷口に横はり、幾多の歸鳥か盡く巢に迷ふ。」

上堂、永平初祖云く、「吾が佛、諸の弟子に謂つて曰く、「吾れに、四念處あり、所謂身は是れ不淨と觀じ、受は是れ苦と觀じ、心は是れ無常と觀じ、法は是れ無我と觀す」と。永平も亦四念處あり。身は是れ皮袋と觀じ、受は是れ鉢孟と觀じ、心は是れ牆壁瓦礫と觀じ、法は是れ張公酒を喫すれば、李翁醉ふと觀す」と。師曰く、「釋迦老子に同じからず、永平、師翁に同じからず、山僧も亦四念處あり。且く道へ、大衆作麼生か是れ身念處。盡十方世界眞實人體、作麼生か是れ受念處。大海元衆流を辭せず、作麼生か是れ心念處。山河大地日月星辰、作麼生か是れ法念處。説似

① 一片の白雲……盡く巢に迷ふ。類聚卷一に、洛浦安禪師の語として出づ。僧問ふ、「百千諸佛に供養するは一無心道人に供養するに如かずと、未審し百千の諸佛何の過か有る、無心の道人何の徳か有る。」師云く、「一片の白雲谷口に横はり、幾多の歸鳥盡く巢に迷ふ。」

② 歸鳥。壻に歸る鳥をいふ。

③ 弟子。門人、門弟、徒弟に同じ、學は師の後にあるが故に弟といひ、解は師に依りて生ずるが故に子といふ、即ち教を受くるもの、稱。

④ 四念處。四念住又は四意止ともいふ。三十七品菩提分法の一、心念を一點に集注し、之に依りて雜念の起るを防ぎ、眞理を得るに勉むる方法をいふ、心、受、身、法是れなり。身念處とは身體の不淨を觀す

一物即不中、諸の心數に渉らず、向上の一句又作廢生。良久して曰く、「一念無念、念々不住、參。」

上堂、一毫衆穴を穿ち、大地遮欄なし。

古今本向背なし、縦奪更に休歇せず。或時は

佛土に遊び、或時は魔宮に入り、或時は平坦

路上を過ぎ、或時は荆棘林中に臥す。且く

道へ、現前の大衆、而今卓立する處、是れ平坦

路なりや、是れ荆棘林なりや、試みに道へ看ん

若し會得せば、汝に一隻の行脚眼を許さん。

若し然らずんば、寒暑ありて君が壽を促め、

鬼神ありて君が福を妬まん。

上堂、山を隔て、煙を見て、是れ火なるこ

とを知り、壙を隔て、角を見て、是れ牛なるこ

とを知る。春は自ら百花明々、誰か疑はん本來

るをいひ、受念處とは領受の好惡の事は悉く苦なりと觀するをいひ、心念處とは心の生滅無常を觀するをいひ、法念處とは一切諸法皆無我なりと觀するをいふ。

鉢盂。單に鉢とも盂ともいふ、應量器のこと。比丘世の檀施を受くるに資身の用具なり。

張公酒を喫すれば李翁醉ふ。此の語雲門廣錄室中語要部等に見ゆ、張も李も支那に於ける姓なり、張公酒を飲めば、熊公醉ふといふ程の語。

師翁。師の師を稱していふ。義雲の師は寂圓、その師は道元禪師なれば、今永平師翁とは道元禪師を指すなり。

盡十方世界眞實人體。此れ玄沙の語、會元八慧珠寂章禪師章に出づ。

大海元衆流を辭せず。戰國策に云く、「太山は土壤を讓らず、故に能く其の大を成す、河海は細流を擇ばず、故に能く其の深きに就く、王者は衆庶を御せず、故に能く其の徳を現かにす」とあり。

山河大地日月星辰。鴻仰の語、會元第九に出づ、正法眼藏身心學道の卷等にも之を引けり。

説似一物云々。五燈會元の公案なり。南嶽、曹谿に六祖に參す、祖問ふ、甚麼の處より來る、曰く、「嵩山より來る。」祖曰く、「其物、甚麼來、師、無語、遂に八載を経て忽然として省あり、乃ち祖に白して曰く、「某甲箇の會處あり、祖曰く、「作廢生、師曰く、「説似一物即不中、祖曰く、「選つて修證を假るや否や、師曰く、「修證は無きにあ

らす、染汚は即ち得ず。」
①心數。心所法をいふ、慮知念覺といふも同じ。
②一毫衆穴……本向背なし。圓悟錄一に類似の語句あり。
③遮欄。欄は「てすり」のこと、輪廓即ち「か、ひ」の意なり。
④佛土。佛の住み玉ふ國土の義。
⑤荆棘林。いばら、からたちの類の叢生せる林の意、煩惱妄想の邪見に喩ふるを常とす、人觸るれば忽ち傷く。
⑥一隻の行脚眼。一隻は「片方」の義、雙眼は何人も具する所、更に左右に偏せざるの意にて一隻眼は一種の卓見卓識のこと。行脚とは本師の膝下を離れ、善友良師を尋れて諸國を遊行し、山川を跋渉するをいふ、即ち修行のことなり。今一隻の行脚眼とは活修行眼といふ程の意なり。

もの、即ち認識の根本の意なり。
②森羅。森羅萬象の略、天地の間に森羅羅列なる一切の現象をいふ。
③境。六識認識の對境をいふ。
④體悉。體得悉知の意、即ち自己の身心に徹して明了に領悟すること。
⑤萬古碧潭云々。同案察十支談轉位結句なり。
⑥撈摝は水中に没入して物を取ることなり。
⑦閉壚。閉壚に對す、僧堂其の他諸寮内の火爐に蓋をして閉鎖すること。閉壚は陰曆二月初日、今は三月一日に之を行ふ。
⑧世界の濶きが如く古鏡の量に同じ。これ雪峰の語因縁なり、會元七玄沙章に出づ。眼藏古鏡卷に之を引けり、「雪峰云く、世界濶きこと一尺、古鏡

心、秋は自ら清風、
颯須らく、祖師道なることを悟るべし。虚空是れ根、森羅是れ境、根と境と猶は鏡上の痕の如し。明鏡元瑕なし、畢竟作廢生か體悉せん。良久して曰く、「萬古碧潭空界の月、再三撈摝して始めて應に知るべし。」
①閉壚上堂、有時は口を開いて炎熱を吐き有時は頂を覆ふて寒灰を鬪る。世界の濶きを

①染汚は即ち得ず。
②心數。心所法をいふ、慮知念覺といふも同じ。
③一毫衆穴……本向背なし。圓悟錄一に類似の語句あり。
④遮欄。欄は「てすり」のこと、輪廓即ち「か、ひ」の意なり。
⑤佛土。佛の住み玉ふ國土の義。
⑥荆棘林。いばら、からたちの類の叢生せる林の意、煩惱妄想の邪見に喩ふるを常とす、人觸るれば忽ち傷く。
⑦一隻の行脚眼。一隻は「片方」の義、雙眼は何人も具する所、更に左右に偏せざるの意にて一隻眼は一種の卓見卓識のこと。行脚とは本師の膝下を離れ、善友良師を尋れて諸國を遊行し、山川を跋渉するをいふ、即ち修行のことなり。今一隻の行脚眼とは活修行眼といふ程の意なり。

①寒暑有りて以下の二句。黃龍慧南の語。
②鬼神。二義あり、一は人の死したるをいひ、二は極めて自在力を有するものをいふ。後者に又二あり、一は善鬼神にして善法を護持し、國土を守護する梵天帝釋龍王等、二は惡鬼神にして夜叉、羅刹等の如き惡行を恣にして人畜を害する者をいふ、今はその惡鬼神なり。
③山を隔て……牛なることを知る。涅槃經第十七相貌見を釋するに此の語あり、蓋し影を見て形を知り、小分に依りて全分を知るをいふなり。
④風々。風の聲なり。
⑤祖師道。又單に祖道ともいひ、祖師の教をいふ。佛道といふも同じ。
⑥根。六識の所依となりて六識を起し、對境を認識せしむる

①大海元衆流を辭せず。戰國策に云く、「太山は土壤を讓らず、故に能く其の大を成す、河海は細流を擇ばず、故に能く其の深きに就く、王者は衆庶を御せず、故に能く其の徳を現かにす」とあり。
②山河大地日月星辰。鴻仰の語、會元第九に出づ、正法眼藏身心學道の卷等にも之を引けり。
③説似一物云々。五燈會元の公案なり。南嶽、曹谿に六祖に參す、祖問ふ、甚麼の處より來る、曰く、「嵩山より來る。」祖曰く、「其物、甚麼來、師、無語、遂に八載を経て忽然として省あり、乃ち祖に白して曰く、「某甲箇の會處あり、祖曰く、「作廢生、師曰く、「説似一物即不中、祖曰く、「選つて修證を假るや否や、師曰く、「修證は無きにあ

が如く、古鏡の量に同じ。且く道へ、大衆而今
什麼の圖をか現成す。良久して曰く、「夜半靴
を穿ち去り、天明に帽を戴いて歸る。」

上堂、^①橋木の質、死灰の心。^②眼睛露靈、
鼻孔業垂。^③把定すれば萬象象なく、^④放行す
れば全手手なし。^⑤動靜の二相了然として生ぜ
ず。既に恁麼に無生なることを得たり。甚と

爲てか諸人而今上堂、立地、箇の什麼の法をか
聽き、箇の什麼の心をか證契す。還つて委悉せ
んと要すや。良久して曰く、「動容古路に揚り、
^⑥悄然の機に墮せず。」

佛涅槃上堂、向上二千餘、白、花萎み風悲し
む。直下一念萬年、雲慘み水咽ぶ。不傳の一
路、千聖も奈何ともせず。付屬有在諸人、便宜
を得たり。所以に道ふ、若し滅度と道はば、

潤きこと一尺、世界潤きこと
一丈、古鏡潤きこと一丈、時
に玄沙火爐を指して云く、火
爐潤きこと多少ぞ、峰云く、
古鏡の潤きが如し、玄沙云
く、老和尚の脚根、未だ地に
點ぜざる在り。」

①夜半以下の二句。永平錄四に
出づる上堂語なり。
②橋木は生意なきをいひ、死灰
は心起らざるをいふ。莊子齊
物論に云く、形は固に橋木の
如くならしむべし、心は固に
死灰の如くならしむべし。
③眼睛露靈、眼睛は「目の玉」の
こと、露靈は字彙に「迅雷な
り」とあり。
④把定。把住に同じ、放行に對
し取つて動かざるの義、俗に
「取りきめる」といふこと。
⑤放行。把住に對す、「はなち
やる」の義。
⑥動靜の二相了然として生ぜ

ず。楞嚴六の語、云く、「初め
聞中に於て、流を入へして所
を亡す、所入既に寂にして動
靜の二相了然として生ぜず。」
⑦無生。世間生滅の相を離れた
るをいふ。
⑧立地。露地の上に立つて聽法
するをいふ。
⑨動容以下の二句。香嚴閑禪師
擊竹悟道頌中の二句なり、云
く、「一擊所知を忘す、更に修
持を假らず、動容古路を揚ぐ、
悄然の機に墮せず云々。」會元
九師の傳に出で、眼藏溪聲山
色の卷に引用せり。

⑩悄然。靜かなる貌。
⑪白は西天の曆時にして一年を
一白と稱す。
⑫便宜。便利の義にて自由の
意。
⑬所以に道ふ。類聚の遷化門に
云く、「世尊涅槃會上に於て手
を以て胸を摩で衆に告げて云

弟子眷屬にあらず、非滅度と謂はゞ、弟子眷屬
にあらず。大衆釋迦老子と相見せんと要す

や。拂子を豎て、云く、「相見了や。畢竟作麼
生。」良久して云く、「迦葉曾て雙足を禮す。」

結夏上堂、^①九句の繩墨長短にあらず、
曲直縱橫功業新なり。木馬泥牛混雜する處、
風に嘶き月に吼えて力耕親し。諸禪德、^②塵竭

の掩室、^③少林の面壁、什麼の意旨かある。良
久して云く、「一粒荒田にあり、耘らざるに苗
自ら秀づ。」

上堂、^④諸聖の慕ふべきなく、己靈の重んず
べきなし。虚空即ち是れ色、大地卻つて塵に非
ず。薰風林岳に生じ、梅雨簷頭に滴るが如きは、
卻つて色塵と爲さんや、卻つて虚空と爲さんや。

古人云く、「雨何れより來り、風何の色をか作

く、汝等善く我が紫磨金色の
身を觀ぜよ、瞻仰取足して後
悔せしむること勿れ、若し我
れ滅度すと謂はゞ吾が弟子に
非ず、若し我れ滅度せずと謂
はゞ、亦吾が弟子に非ずと、時
に百萬億の衆悉く皆契悟す。」

①相見。對面すること。
②迦葉曾つて雙足を禮す。菩薩
處胎經に云く、「佛涅槃の日、
迦葉最後に至る、佛雙足を示
す云々」と。此の因縁、後分
涅槃經卷下に詳かなり。

③結夏。又結制ともいふ、夏期
九旬を一夏といふ、一夏安居
の制を結ぶをいふ、普通四月
十五日より七月十五日に至
る。
④九句の繩墨。九旬は九十日、
繩墨は制規、規約のこと。永平
廣錄八結夏小參に云く、「慈航
和尚云く、九十の尅期明日よ
り始む、繩墨外邊を以て行く

こと莫れ」と。
⑤塵竭の掩室とは、塵竭は往古
中印度の國名なり。諸佛要集
經に云く、「四部の弟子各佛處
に詣り、法を聞かんと欲すと
雖も、專精なること能はず、
五濁を追覓し、以て事業を爲
す、佛阿難に告げたまはく、
我れ因沙舊窟に入りて宴坐す
ること、三月なるべし、若し
人爾所に來到せば、汝當に是
の如く説くべし、教法は過ふ
こと難し、了義も亦難し、人
身得難し、經道は希有なり、
如來、世の興りて劫數なるに
出づと。」乃ち室を掩ふて三月
出でず、意は眞實の法は口舌
言語を以て説示すべからざる
ことを云ふ。

⑥少林の面壁。五燈會元一に云
く、「達磨、嵩山少林寺に寓止
し、面壁して坐す、終日默然、
人之を測る無し、之を壁觀婆

す」と。大衆、試みに斷じ看ん。若し道ふことを得ずんば、^①拄杖子代つて一轉語せん。卓一下して云く、「^②色空而今什麼の處にかある。」新舊^③維那に謝する上堂、^④鉗鎚掌握の中に轉じて、有を摧き無を摧き、佛祖擧唱の處に來つて、模を作し様を作す。朝打三千、進前して功を成し、暮打八百、退後して位に就く。然も恁麼なりと雖も、新舊絶待^⑤前後際斷、甚と爲てか箇の通路あらん。良久して云く、「^⑥偏正曾て本位を離れず、無生那ぞ因縁を語るに涉らん。」

上堂、^⑦松は自ら直く、棘は自ら曲れり。日暖かにして霜を銷し、月冷かにして露を結ぶ。^⑧一靈常住の性、什麼の處に於てか見得せん。^⑨是法平等、無有高下、是れ心一齊。何の曲直

- ① 羅門といふ。
- ② 一粒。傳燈十六樂音の章に云く、「僧問ふ、如何なるか是れ本來の事、師曰く、「一粒」と、其の意知るべし。
- ③ 語聖以下の二句。傳燈青原傳中に石頭希遷の語として見ゆ。己靈は自己の性靈の義、常一主宰の一物を自己身中に求むること。
- ④ 古人云く。事苑三に、「劉禹端公、雨を雲居山に求めて感應あり、遂に雲居僧に問ふて云く、「雨何より來る、居云く、「端公の問處より來る云々。」又「西禪の東平、官員と坐するの次、西禪云く、「風何の色をか作すや、官無語云々。」」雪寶此の話を頌して云く、「風作の色をかなし、雨何れより來ると。」祖英集の上に見ゆ。
- ⑤ 拄杖子。子は助辭、僧の持つ杖のこと。
- ⑥ 一轉語。進退維谷まりたる處に至つて、自由に身を轉廻するの一語、又は一語にて他をして轉迷開悟せしむる語句をいふ。
- ⑦ 色空。色とは質礙の義にして總て有形的物質をいふ、空は空無の義にして、何物も存在せざる處、即ち實體なく自性なきをいふ。
- ⑧ 維那。維は綱維の義にて、僧衆を統ぶるをいひ、那は梵語羯磨陀那の略にして知事、授事と譯す、僧衆の雜事を司り及び之を指授する義にて、梵漢兼擧の名なり。日本禪林にては六知事の一にて、重大なる役なり、擧唱、回向等も掌る。
- ⑨ 鉗鎚。鉗は金を挾むもの、鎚は金鎚のこと。嚴治屋にて嚴を鍛へるには、鐵を火に燒き、金挾みにて之を挾み、金

かあらん。諸禪德、^⑩者箇の道理を委悉せんと要すや。良久して云く、「^⑪深山大小石頭滑かなり、^⑫綠水白雲流不流。」

上堂、心は覺知にあらず、^⑬蕩々乎として大虚の如し。法は見聞を離る、^⑭巍々乎として偷匹なし。高うして窮むべからず、深うして到り難し。然も恁麼なりと雖も、把れば則ち掌握の中を出でず、放てば則ち塵刹の外に逼し。大衆者箇の道理を體悉せんと要すや。良久して云く、「^⑮無影樹下の合同船、^⑯瑠璃殿上に知識なし。」

冬至上堂、^⑰浮虚境上、^⑱暑運推し移り、^㉑枯木岩前、^㉒龍吟忽ち起る。陽曲初めて報じ、^㉓蟄類密かに動く。然も是の如くなりと雖も、實際の理地、一塵を受けず。^㉔建化門頭、^㉕模を作

- ⑩ 臺の上に載せ、金鎚を以て打つて鍛ふるなり。今は師家が、學人を鍛鍊する手段に喩ふ。
- ⑪ 前後際斷。前後際斷の念を斷絶すること、一切對待の念を裁斷するをいふ。
- ⑫ 偏正以下の二句。安智錄中に往々之れ有り、蓋し古語也。偏とは偏頗の意にて起滅變幻極りなき差別の現象界をいひ、正は平等の義にて平等一如の本體界をいふ。
- ⑬ 松は直く棘は曲れり。以下の四句は天真妙契の現成公案を明すなり。棘は「いばら」なり。首楞嚴第五に云く、「現前種々の松は直く棘は曲れり、鶴の白き鳥の玄きも皆元由な了す。」
- ⑭ 一靈常住の性。丹霞散珠の吟の句、靈妙なる佛性を指す。
- ⑮ 是法平等、無有高下。此れ金剛經の文なり。
- ⑯ 者箇。者は此の義、道箇と同じく、「この」の意なり。
- ⑰ 深山大小石。會元は歸宗道詮禪師草の語因縁、僧問ふ、九峰石中選つて佛法有りや也た無なや、師云く、有り、曰く、如何なるか是れ九峰山中の佛法、師曰く、石頭大底は大、小底は小。
- ⑱ 蕩々乎。廣遠の貌。
- ⑲ 巍々乎。高大の貌。
- ⑳ 塵刹。塵は微塵、刹は國土の義、極めて微細なる國土の意、又多般の國土の義。正法眼藏看經の卷に「若田若里の流布あり、塵刹の演出あり、虚空の開講あり」と。
- ㉑ 無影樹下以下の二句。南陽慧忠國師の法嗣耽源山應真禪師の頌中の句、云く、「湘の南潭の北、中に黄金有つて一國に充つ、無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識無し。」

し様を作す。畢竟如何が體取せん。良久して云く、「死中に活と得たり。」

雪に因つて上堂、千差の岐路を踏断して、方に直下に承當することを得たり。他を瞞ずること一點も得ず、自己の家郷に遊踐す。恁麼の時に當つて、法々位を離れず、歩々方に迷はず。彼此同じく、槃迦羅眼を開き、自他等しく知見香を具す。既に恁麼の田地に到ることを得て、還つて同見同般底の證據ありや也た否や。良久して云く、「謂ふことなかれ、吾が家寶貝なしと。満床盡く撒す雪の珍珠。」

佛成道上堂、擧す、古徳云く、「瞿曇眼睛を打失する時、雪裡の梅花只だ一枝、而今到る處荆棘と成る。卻つて笑ふ春風、繚亂として吹く」と。師云く、「梅樹歳寒うして自ら時

冬至。二十四氣の一、陽曆十二月廿二日頃。

浮虚境。日月運行の地をいふ、宏智録四至上堂の語。

曇運。曇は日影のこと。會元九、滄山上堂の語。

枯木龍吟。龍吟は枯木に風の吹いて鳴る聲のこと、死中活を得るに喩ふ。傳燈十一香嚴智閑の語。

建化門とは化門を建立することなり、乃ち衆生教化の門を開き、一切衆生を救済化導すること云ふ。

直下。當下に同じ、直ちにの意。

承當。自ら會得領悟するをいふ。

槃迦羅眼。梵語、斫迦羅或は斫羯羅に作る、金剛又は堅固と譯す、意知るべし。

吾家寶貝なし。石頭草庵歌の語、云く、「吾れ草庵を結んで

寶貝なし、飯了從容として睡快を圖る。」

満床盡く撒す雪の珍珠。此の語古尊宿語録に見ゆ。楊岐會禪師上堂に云く、「楊岐乍住寸屋壁疎、満床盡く撒す雪の珍珠。」

佛成道。佛成道會の略、三佛會の一、臘月八日なり。釋尊菩提樹下に坐し、諸魔を降服して廓然大悟、一切智を得、無上道を成じ玉ふをいふ。

古徳。天童如淨禪師を指す、師願八上堂に以下四句の語あり、高祖亦眼藏梅華眼睛兩卷に此の語を引き玉ふ。

瞿曇。梵語又喬答摩といふ、地最勝と譯す、大地上即ち地球上にあつて最勝なるの意、釋尊の稱。

繚亂。まつぱりみだる、こと。

陽春の曲。文選の中に見ゆ。

あり、芳心儉に綻ぶ舊年の枝。春に先つて漏泄す陽春の曲。黄面自ら鐵笛を横へて吹く。

歲旦上堂、擧す、宏智禪師云く、「歲朝坐禪、

萬事自然、心々絶待、佛々現前。清白十分江

上の雪、謝郎滿意釣魚の船。師云く、「年朝禪

を會す、衲子泰然、萬物慶あり、十方目前。

山上同じく看る梅と雪。江邊月を載す謝郎の船。」

新舊兩班に謝する上堂、尋常一面の古鏡

を用つて、胡漢現じ來つて曾て妨げず、賓主舊新

異轍なし。驀頭に相見して各承當す。

上堂、青皇令極つて、綠陰花尙ほ香し、赤

帝位新たにして、薰風氣火を含む。時節不言恁麼に代謝す。且く大衆に問ふ、空劫已前の

高向なる歌なりといふ。

黄面。釋尊の稱、釋尊は金色身なるが故にいふ。

宏智禪師。明州天童山に住す、字は正覺、宏智は諡號なり、鄂州丹霞の子淳に就いて法を受け、眞歇清了と並び稱せらる、宋の紹興二十七年寂す、壽六十七、語録六卷あり、就中頌古最も有名なり。

清白とは清廉潔白なること、後漢の楊震の故事より出づ。

曹洞宗は只管打坐して悟を求めず、佛を求めざる宗風なるが故に、清白家とも稱せり。

謝郎は玄沙の師備を指す。支那音原下の僧にして、姓は謝氏、少時釣魚を事とせる故事あり。

衲子。衲僧に同じ、衲は衲衣の義、子は者の義、即ち衲衣を着せる者の意にして、専ら禪僧のことをいふ。

兩班。班は列の義にして兩序に同じ、東序及び西序のこと、東序は知事、西序は頭首の坐位なり、今は兩班といひて直ちに兩班の人をいふなり。

古鏡。雪峰の語因縁、會元七玄江傳に云く、「雪峰上堂に云く、此の事を會せんと要せば、猶ほ古鏡の臺に當るが如し、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す云々。」

青皇、赤帝。青皇は青帝又は東帝といふ春を掌る神なり、赤帝は炎帝ともいふ、夏を掌る神なり。尙書註に云く、「天に五帝有り、謂く、青帝、赤帝、白帝、黃帝、黑帝なり、青帝は東方の帝、赤帝は南方の帝なり。」

代謝。文選註に云く、「來るを代と曰ひ、去るを謝といふ、夏盡きて秋來る、故に代と曰

公案子、恁麼に改轉すや也た無しや。⑤ 聲色邊に向つて眼を著くること莫れ。豈に見ざらんや、⑥ 風穴和尚因に念眞の二上座俱に方丈に詣る。穴、眞に問うて曰く、「如何なるか是れ世尊不説の説。」眞云く、「鶉鳩、樹頭に鳴く。」穴曰く、「汝許多の癡福を作して何の用ぞ。」乃ち念を顧みて曰く、「云何」と。念云く、「動容古路に揚る。悄然の機に墮せず」と。穴、眞に謂つて曰く、「渠が語を聞くや」と。師云く、「大乘、首山、風穴に契ふ底の意旨を會せんと要すや。」良久して云く、「鄜中隱形の術ありと雖も、争か似かん全身の帝郷に入らんには。」結夏上堂、我れ住すれば則ち汝も同じく住し、我れ行かば亦汝も共に行く。⑦ 諸佛の要機を打得して而して ⑧ 結制し、⑨ 祖師の心印を拈

ひ、秋來つて夏退く、故に謝と曰ふ。」

① 空劫已前。空劫は前に註するが如し、空劫已前とは朕兆以前、父母未生以前といふに同じ、天地の開くる以前の意。
② 公案子。子は助字、公案は中峰の山房夜話に云く、公案は乃ち公府の案牘に喩ふ、牘や法の所在にして王道の治亂實に焉に係る、夫れ公は乃ち聖賢の腹、其の轍を一にし天下其の途を同じうするの至理なり、案は乃ち聖賢、理たるの文を起す、凡そ天下を有する者は未だ嘗つて公府なくんばならず、公府有る者は未だ嘗て案牘なくんばならず、蓋し取つて以て法となし、天下の不正を断たんと欲すればなり。

て、他の四を攝す、一切萬境の意なり。
③ 風穴和尚。支那河南省汝州風穴寺延沼禪師、南院慧眞の法嗣。
④ 念眞二上座。念は汝州首山の省念禪師、眞は汝州廣慧の眞禪師、共に風穴の法嗣。上座は上席の義にして、沙門中の老宿の尊稱なれど、今は阿毘達磨集異門足論の法性の上座にして、出家して具足戒を受けたるもの、稱。
⑤ 方丈。方一丈の居室の意にて、寺院住持の居處をいふ。
⑥ 鶉は鳩なり、「いへば」となり。
⑦ 鄜中。城邑中なり。
⑧ 諸佛の要機。要機は要妙なる玄機の義にして、妙法といふ程の意なり。
⑨ 打得。打は助字、得るの意。
⑩ 結制。結夏に同じ、九旬安居

提して而して ⑪ 護生す。山高うして雲の倚ることを礙へす。父の如く子の如し。谷虚にして聲に應ずる響あり。弟たり兄たり。既に恁麼に和同することを得て、還つて什麼の ⑫ 行履かあらん。良久して云く、「瓊樹寸々の寶、梅檀片片馨し。」

上堂、⑬ 父母は我が親にあらず、諸佛は我が道にあらず。箇中の意を識らんと要せば、父少にして子老いたり。記得す、⑭ 南泉云く、「王老師 ⑮ 十八上に作活計を解す。」 趙州云く、「老僧十八上に破家散宅を解す」と。師云く、「父子二老の解處如何が辨取せん。南泉は臂長うして衫袖短し、鬼神に覩見せらる。趙州は身貧に心儉にして卓錫の處なし。薦福は然らず。十八上已前發心發足、十八上已後大悟放行。正

の制を結ぶこと。

① 祖師の心印。祖師の證得せられたる心印のこと。佛の證得せられたる佛心印に對す、但し此の二決して別なるに非ず、人心本來具有の妙心をいふ。心印とは、宗鏡錄に、「佛祖の法中は皆心を以て印となして、萬法を楷定す」といへり。

② 拈提。拈は「つまむ」、提は「ひつまぐ」と訓す。
③ 護生。安居禁足して昆蟲等を殺さざること。
④ 如父如子。洞山錄に云く、「青山は白雲の父、白雲は青山の兒、白雲終日青山に倚つて相知らず」とあり。
⑤ 行履。日用の行狀全體をいふ、行は躬行、履は履踐の意なり。
⑥ 瓊樹。瓊は美玉、梅檀は雲南瓜哇等の熱帯地方に産する香

木の名。披類十五珍寶門に云く、「大嶺禪師に問ふ、如何なるか是れ一切塵清淨、師云く、瓊枝を裁れば寸寸是れ寶、梅檀を拆けば片々皆香。」

⑦ 父母以下の二句。傳燈第一伏魔密多の偈に見えたり。
⑧ 父少子老。妙經五卷涌出品に出づる語。文句第九、眼藏轉法輪卷等に引用す。
⑨ 南泉。池陽南泉の普願禪師、馬祖道一の法嗣、次の語は正宗贊に出づ。
⑩ 王老師は南泉の俗姓王氏なりしを以て、常に自ら王老師と稱せり、後人南泉を呼ぶに王老師を以てすること此れより起る。
⑪ 十八上。根、境、識の十八界をいふ。
⑫ 趙州。支那直隸省趙州觀音院從諗禪師、南泉普願の法嗣、次の語宗門統要第六に出づ。

當十八上 一切智々を解す。且く問ふ、大衆、古人の解處と薦福の悟處と、是れ同か是れ別か、試みに斷じ看ん。拂子を拈弄して云く、「如今薦福が手裡に一箭あり、諸人の十八上に向つて發せんと欲す。還つて的當を要すや。」拂子を豎起し、又擲下して云く、「虎を射て未だ了らざるに、便ち石を射る。」

上堂、萬機休罷、千聖不携、一言に相契ふ古今一揆。暗中に眼を著け、明裡に身を藏す。位を借つて功を明す、體、用處にあり。功を借つて位を明す、用、體處にあり。所以に道ふ、君、臣位に臨むに猶ほ、凝然を帶ぶ、子、父に就く時尙ほ孝養を存す。玉關未だ透らざれば、正に一色に迷ふ。寶印全く提げて、那の文彩をか露さん」と。還つて委悉せんと要すや。傍

①鬼神に觀見せらる。觀見は窺ひ見ること。傳燈八南泉傳に云く、「師明日遊を莊舎に取らんと擬す、其の夜土地神先づ莊主に報す、莊主乃ち預め爲に備ふ、師到り、莊主に問ふ、争てか老僧が来るを知つて排辨すること此の如くなる、莊主云く、昨夜土地報じて道く、和尚今日來ると、師云く、王老師修行力なく、鬼神に觀見せらる。」

②萬機休罷千聖不携。萬機は心の作用なり、休も罷も「やむ」なり、一切の思慮を悉く休止すること、聖は佛祖のこと、千聖とは三世歴代の佛祖をいふ、佛の一字も心田の汚れ、更に心に留めざるを不携といふ。傳燈十一、「香嚴禪師に問ふ、諸聖を慕はず、己靈を重んぜざる時如何、師云く、萬機休罷、千聖不携。」永平廣錄中にもあり。

觀の者は晒ひ、當局の者は迷ふ。

上堂、衆流大海に投じて、鹹淡味同じく、四夷一朝に歸して、君臣道合す。所以に四種主賓を分ち、五位偏正を列す。然も是の如くなりと雖も、正を立すれば則ち正の外に偏無し。五位俱に正中來、偏を立すれば則ち偏の外に正無し、萬物各偏中至。道ふことを見すや、我れ人に逢ふては則便ち出でず、出づれば則便ち人の爲にせん。我れ人に逢ふては則便ち出でん、出でては則便ち人の爲にせずと。良久して云く、「偏正曾て本位を離れず、無生那ぞ因縁を語るに涉らん。」

③正中來。無想無念の境に到達したる所に於て、更に一切諸法の作用を顯現するをいふ、丹霞禪師は之を枯木に華開くが如しといへり。

④白雲は山を……家と爲す。宏智録一に出づ、「生々代々輪迴

見すや、從佛口生、從法化生と。既に恁麼なることを得たり、甚となしてか道ふ、返本還源事轉た差ふ。本來住することなければ家と名けず、畢竟如何。十二時中、不依倚一物。

上堂、感應道交、山呼び谷響く。因果絶待、果熟し花開く。菩提本樹なし、明鏡亦臺にあらず。毎常に異類を行す、又且つ好し輪廻するに。見すや、古徳の道く、「煩惱海中雨露と爲り、無明山上雲雷と作る」と。此に於て薦得せば、鏝湯爐炭も吹いて滅せしめ、劍樹刀山も喝して摧けしむ。

上堂、春來、薔薇の花を弄し、冬至銀椀の雪に吟す。古徳云く、「心は萬境に随つて轉ず、轉處實に能く幽なり。流に随つて性を認得すれば、喜も無く亦愛もなし」と。山に入りて

の跡、窮り無し、寂々惺々眞照の機味まさず、雲は山に倚つて是れ父、箇の中功功に就く、月は水に在つて家と爲す、直下住に所住なし。」

① 返本以下の二句は、十支談破還鄉曲の頌なり。
② 十二時中、不依倚一物。黃檗の語、會元三、南泉傳に云く、「師、黃檗に問ふ、定慧等學明見佛性」と此の理如何、檗曰く、十二時中、不依倚一物。」
③ 感應道交。兩者の心互に通じて相融合するをいふ、衆生の感と佛の應と融合するが如し。
④ 因果絶待。善因必ず善果を生じ、惡因必ず惡果を生ずるをいふ、無明の感に依つて先世に於て善惡一切の業行を造作し、此の因に依つて現世の果

報を招引するが如し。
⑤ 菩提以下の二句は、六祖慧能の偈。
⑥ 異類を行す。異類とは己と類を異にする義にて、今は六趣を指す、發願利生の大乘の菩薩が、成佛得脱の後、涅槃の本城に安住せず、生死の迷界に却來して六道に轉廻し、機に應じ感に趣いて一切の有情を濟度するを云ふ。
⑦ 古徳の道く。次の二句は十支談回機頌の句なり。
⑧ 煩惱海。煩惱は菩提に對す、一切衆生を迷はし幅ます然にして、心身を苦むる惡傾向をいふ、障、蓋、漏といふも皆同じ、今は海に喩ふるなり。
⑨ 無明山。無明は明に對す、眞理に闇きこと、即ち吾人の煩惱妄想は般若の智慧を味ます故に、眞理を明むること能はず、されば煩惱の根本を無

① 虎兇を畏れざるは獵夫の勇なり。水に入りて蛟龍を避けざるは漁者の勇なり。白刃前に臨んで、死を見ることが生の如くなるは將軍の勇なり。如何なるか是れ沙僧の勇。寒時は寒殺閻梨、熱時は熱殺閻梨。還つて遊戯自在の處ありや、也た無しや。百尺の竿頭、進一步退一步。

上堂、十五日已前、月、萬像を吞却して、琢して一顆の寶珠と成る。十五日已後、月、萬像を吐却して、鑄て幾多の明鏡を得たり。古徳云く、「心月孤圓、光萬像を吞む。光境を照すに非ず、境亦存するに非ず、光境俱に忘す、復た是れ何物ぞ」と。師曰く、「大衆光境俱に忘する時に當つて、如何が領略せん。淨智圓明、智の外に冥智の境なし、心境絶待、境外に照境

明といふ、今は山に喩ふるなり。
② 鏝湯爐炭。鏝湯は大鼎に煮られたる湯、爐炭は爐中に燃ゆる炭火。次の劍樹刀山等と共に地獄中に於ける苦境なり。
③ 薔薇。此れ寶慶十六境の一なり、次の銀椀も然り、薔薇は梵語、此に黃華といふ、今の梔子花なり。
④ 古徳云く。次の四句は正傳第二十二祖摩訶羅尊者の語。
⑤ 虎兇。兇は野牛のこと、一角にして青色、重さ千斤、皮は堅厚にして鐵を製すべしといふ。
⑥ 蛟龍。蛟は「みづち」といふ、龍の屬、角無くして蛇に似、細頸、頸の上に白嬰ありと。又一説に龍の母をいふともあり。
⑦ 寒時は寒殺閻梨云々。此れ洞山無寒暑の答話なり、閻梨は和尙の義にして自己の身體

のこと、寒の時には寒になりきつて自己といふ觀念を立てざるをいふ、熱殺閻梨も之に準す。
⑧ 遊戯自在。心に任せて優游自在なるをいふ。
⑨ 古徳云く。次の六句は盤山寶積禪師上堂の示衆なり、傳燈第七に出づ、眼藏都禮卷にも之を引用せり。
⑩ 領略。意義を理解すること。
⑪ 實主以下の二句は、十支談破還鄉曲頌の句なり。
⑫ 泰山。支那五嶽の一、一名岱宗といひ、山東省青州の西にあり、但し大なる山の義にも用ふ、今或は然らん。
⑬ 當山初祖。當山は薦福山を指す、師此の時永平に在り、齊に實慶に赴く。初祖は寂圓和尚なり、師は其の法嗣なり。
⑭ 陸座。座は高座、貌座、須彌座の意、法座のことなり、師

の智なし。又道ふことを見すや、^①寶主存する時、全く是れ妄、君臣合する處、正中の邪と。還つて委悉せんと要すや。木馬^②、泰山の頂に嘶き、泥牛海上の田に耕す。參^③。

當山初祖三十三回忌^④、陞座、師此の時永平に在り、齋に當山に赴く。香を拈じて云く、「此の^⑤一瓣香、胸襟より拈出す。恩に酬いと欲すれば、恩還つて怨の如し。怨に報せんと欲すれば、怨亦恩に似たり。恩を超え怨を越ゆ是れ一本分。上、日月星辰の爲に光彩と作り、下、萬木百草の爲に靈根と作る。爐中に^⑥蒸向して、先師當山初祖に供獻して、用つて^⑦法乳の恩に酬ゆ。」座に就いて乃ち云く、「萬機休罷、一物長に靈なり。^⑧太虛寂爾、^⑨霹靂轟々。未審し先師平生是れ甚の^⑩心行ぞ。^⑪吉祥孤

家が説法する時、高座に陞るをいふ。

① 一瓣香。瓣は片なり、一ひらの香のこと。

② 蒸向。蒸は焼なり。

③ 法乳の恩。佛祖の恩徳のと、世の小兒が慈母の乳に依りて成長するが如く、佛弟子は佛祖の教法に依りて慧命す資益し來るが故に、法乳といふ。

④ 太虛寂爾。太虛は大虚空のこと、寂爾はさびしき貌。

⑤ 霹靂轟々。霹靂は迅雷のこと。

⑥ 未審し。未だ審かならずと訓み、疑ひ且つ問ふの語なり。

⑦ 心行。心やりといふことにて、思慮分別、或は俗にいふ了簡の意。

⑧ 吉祥孤雲嶺の風月。吉祥は永平寺の山號、今は永平道元禪師を指す、孤雲は孤雲懷非禪師のこと、今初祖及び二祖の家風といふ意を風月に擬へていふなり。

⑨ 西來三周の棹。正宗記に云く、「達磨、震旦に緣熟し、行化時至るを念ふて、重溟に汎び寒暑を三周して南海に達る」といふ、今はそれをいふなり。

⑩ 拾遺。のこれるを拾ふこと。

⑪ 二祖。孤雲懷非禪師のこと。

⑫ 某甲。名字の代りに用ふる語、余、我等の自稱に同じ。

⑬ 印す。印可證明の意、師家が學人の所證を點檢し、正當なるを信認し證明するをいふ。

⑭ 作禮拂袖。作禮は禮拜すること、拂袖は袖を拂ふことにて、怒つて立ち去る時の氣勢なり。

⑮ 頌。梵語伽陀の譯、元來支那に於て頌といへば、聖王明王の盛徳を頌揚する韻文をいひ、印度の經論中にある韻文又多く佛徳を頌讚せるものなるより、之を頌となせども、轉じて一般に師門にて法意を明せる詩を頌又は偈と稱するに至れり。

⑯ 新豐の曲。新豐は洞山悟本大師所住の山の名なり、これより洞山特地の佛法を音曲に擬へて新豐の曲とはいふなり。

雲嶺の風月をして、萬福深岳林の巖扉を排かしむ。此の風^①西來三周の棹に隨つて滿ち、此の月南海一葦の船を逐うて來る。正恁麼の時、去來の路に涉らず、阿誰か敢て^②拾遺せん。「擧す。先師曾て永平に在りし時、^③二祖に問うて云く、「如何なるか是れ師子吼の一音。」祖曰く、「更に外に出です」と。師云く、「甚としてか出でざる。」祖曰く、「百獸腦裂す。」師云く、「恁麼ならば太だ益無きに似たり。」祖曰く、「一人も恩を承けざるなし。」師云く、「某甲會得す。百獸皆師子吼を作す。」祖曰く、「如何が恁麼に會す。」師云く、「萬曲是れ一聲。」祖^④印して曰く、「汝能く觀音入理の門に達す」と。師^⑤作禮拂袖して嘯き去る。^⑥頌に云く、「師子吼ゆる時衆獸喪す。死中に活を得て卻つて和同す。一聲奏出す。新豐の曲。觀自在門此れより通す」と。上堂、心々異心なし、一心一切法、念々異念にあらず、一念是れ萬年。

寶慶寺語錄終

住 吉祥山 永平禪寺語錄

侍者 曇希 編

師、正和三年甲寅十二月初二日に於て入院す。

山門、金鶏曉を報じ、解脱門開く。依然として歩を引く、脚下風雷。

佛殿、世尊に密語あり、長舌唇を離れず。迦葉覆藏せず、家國茲より富めり。安樂兜率、左方右邊。

據室、一尺の水一丈の波、中に於て能く巴歌を唱ふ。毘耶の大神通を勘破し了れり。許如の閑座今什麼にか在る。縦横擬議を容

- ① 吉祥山は永平寺の山號なり、越前吉田郡志比谷村にあり、初め波多野雲州太守義重并に左金吾禪門覺念等相謀つて市野山の東、金松の西に一寺を建立し金松峰大佛寺と稱す、後寛元四年六月十五日大佛寺を改むると共に、金松峰を改めて吉祥山となす、高麗進院の日、山中瑞氣縹然たり、故に山を吉祥と號すと。
- ② 永平禪寺、曹洞宗の大本山なり、道元禪師の開山に係る。
- ③ 曇希、義雲唯一の法嗣、永平及び寶慶に住す。
- ④ 正和。本邦人皇九十四代花園帝の曆號。
- ⑤ 山門。寺院に於ける總門をいふ、山門の制は左右中の三門を並列して一門を作るが故に三門とも書く。
- ⑥ 解脱門。一切の束縛を離れ、苦惱を脱したる自由無礙の處のこと。解脱の境に入るを門に入るに喩へて門といふ。
- ⑦ 佛殿。佛菩薩の像を奉安する堂なり、法堂の前にあるを通制とす。
- ⑧ 世尊。佛十號の一、釋尊の異稱なり、蓋し佛は三徳を圓具

れず、亦是れ葛藤舊窠。

障座、祝聖罷つて、又香を拈じて云く、「此の香佛々の鼻孔を穿鑿して、混沌未分の靈薰を通じ、祖々の髓皮を包容して、兒孫繁茂の根帯を全うす。爐中に熟向して、薦福開山圓和尚大禪師に供養して、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

提綱、(問答録せず) 半路にして新豐の吟を作し、驀頭に空劫の身を轉す。谷は聲に應ずるの響を含み、山は寂を愛するの人に屬す。腦後に踵を繼いで故を温ね、目前對を亡じて新しきを知る。孤輪高く耀いて、寰中夜ならず。五葉凋ますして、劫外の春に逢ふ。若し又此に於て薦取せば、懷戀の思も是れ外にあらず、枯棹の巧も必ずしも親しからず。動容本來の地を出でず、誰か清空に向つて客塵を拂は

- ① して世間を利するが故に、世間善く之を尊重するが故に此の語あるなり。
- ② 密語。密は秘密の密に非ず、親密の密なり、説く所悉く宇宙の眞理諸法の實相と一體無二なるが故にいふ、又能説所説能所なきが故にいふ。古徳の偈に、「世尊に密語あり、迦葉曾て藏さず、一夜落花の雨、滿城流れ香し」とあり。
- ③ 安樂兜率、左方右邊。永平寺佛殿の本尊は三世佛の故に斯くいふなり、安樂は過去佛阿彌陀如來の居處西方安樂世界の事、兜率は未來彌勒菩薩の居處なり。
- ④ 據室。新命の住持、方丈室に據るをいふ。
- ⑤ 巴歌。西漢書註に云く、「巴は巴人なり、高祖初めて漢王と爲るに、巴俞の人を得、并に趨捷にして善く聞ふ、之と三
- ⑥ 秦を定め楚を滅す、因つて其の武樂を存す、宋玉が所謂下俚巴歌なり。
- ⑦ 毘耶の大神通。維摩不思議品に、維摩詰神通力を現じて須彌燈王佛の所に至り、三萬二千の師子座を取つて一丈の室中に入る云々。
- ⑧ 閑座。閑は無用の意なり、今は三萬二千の師子座を指す。
- ⑨ 擬議。擬も議も「はかる」と訓す、彼れがこれかと思慮分別するをいふ。
- ⑩ 葛藤舊窠。窠は穴なり、葛藤の舊穴の意にて、煩惱に喩ふ。
- ⑪ 祝聖罷。聖とは聖主の略にて天子のこと、祝は祝禱の義にて、天子の聖壽無疆を祝禱することなり、罷は「やむ」と訓じ、後の義。
- ⑫ 混沌未分。混沌は又渾沌に作る、混沌は物の形の判然と顯

ん。祖々此に於て大佛事を作し、佛々此に於て大法輪を轉す。山僧此に於て開堂演法す。作麼生か佛祖と相見せん。明月空に満ちて天水浄し、弟兄俱に合同船に在り。復た擧す、百丈因に僧問ふ、「如何なるか是れ奇特の事。」丈云く、「獨坐大雄峰」と。天童浄和尚拈じて曰く、「大衆動著せず、且つ者の漢を坐殺せしむ。

- ① はれざる貌にて、天地未開の様子をいふ。
- ② 靈蕪。靈は神なり、不思議の意、蕪は蕪氣なり。
- ③ 根帯。根は本なり、花の根を帯といふ、今は根底といふ程の意。
- ④ 提綱。提要、又は提唱ともいふ、宗師上堂して大衆に宗旨の大綱を提示すること。勅修清規開堂に、「住持、垂語、問答、提綱」とあり。
- ⑤ 新製の吟を作す。洞山所作の新製吟を作すといふ意には非ず、今は只だ古曲を奏すると云ふ程の意に見るべし。
- ⑥ 對。對待又は對境の義、俗に「相手」といふ程の意。
- ⑦ 孤輪。月のこと。
- ⑧ 寰中。猶ほ寰内といふが如し、天子の畿内のこと。
- ⑨ 劫外の春。劫外とは成住壞空の四劫といふこと、餘蘊不到

の春光、即ち常住不變の別天地の意。
⑩ 懷裏。結棒(はれつるべ)、莊子天地篇に曰く、「子貢南の方楚に遊んで晋に反る、漢陰を過ぐるに、一丈の人將に團畦を爲らんとす、隣を鑿つて井に入れ、鑿を抱いて出で灌ぐを見る。子貢曰く、此に機有り、一日百畦を浸ぐ、力を用ふるに甚だ寡うして功を見ること多し、夫子欲せざるが、圃を爲る者、仰いで之を見て曰く、奈何ん、曰く、木を鑿つて機を爲る、其の名を梓と爲す、圃を爲る者忿然として色を作して笑つて曰く、吾れ之を吾が圃に開けり云々。」
⑪ 法輪を轉す。說法すること、輪は車輪の義、車輪の運轉する時は、能く一切の物を摧破す、佛祖の說法能く衆生の邪見を破するに喩ふ、又車の轉

するや、物を運載して此より彼に至らしむ、佛祖の說法能く衆生をして聖境に入らしむるに喩ふ。
⑫ 百丈。百丈山懷海禪師、馬祖道一の法嗣、天童に移過して喫飯す、此の句如淨錄下卷に見ゆ。
⑬ 奇特。奇は不思議、特は特別義、奇異特妙といふこと。
⑭ 獨坐大雄峰。大雄峰は百丈山のこと、獨り大雄峰に坐するの意にて、獨立尊嚴の様子をいふ。
⑮ 天童浄和尚。支那浙江省寧波府鄞縣天童山長翁如淨禪師のこと、道元禪師の師なり。
⑯ 淨慈。淨慈寺のこと、支那浙江省杭州城外西湖畔にあり、如淨禪師天童住山迄此に居る。
⑰ 鉢盂。應量器のこと、比丘世の糧食を受くるに資身の用具

今日忽ち人あつて、浄上座に如何なるか是れ奇特の事と問はゞ、只だ他に向つて道はん、甚の奇特かあると。畢竟如何。浄慈の鉢盂天童に移過して、喫飯す」と。師曰く、「即今人あり、山僧に奇特の事を問はゞ、他に對して道はん、一枝の藤、人を打つに力あり、一瓶の水受用窮りなしと。」

上堂、十方壁落なし、從來遮欄を絶す。四面亦無門、這裡是れ入處。眼睛を瞎卻して、七佛諸祖と相見し、言理に分明にして燈籠。露柱と談論す。恁麼の時に當つて、頑石點頭し、草木現瑞す。見すや、僧、仰山に問うて曰く、「法身還つて說法を解すや也た無しや。」山云く、「我れ説くことを得ず、別に人の説き得るあり。」僧曰く、「説き得る底の人甚れの

- ① たり、食器。
- ② 十方以下の四句、宏智廣録一に見ゆ、小參に云く、兄弟十方壁落無く、従本來もと遮欄なし、四面亦門無く、祇だ者裡是れ入處。」
- ③ 這裡。道は「此」と同じ、這裡は「こ」といふ程の意なり。
- ④ 瞎却。瞎は盲目の意、却は助字、盲目にするといふこと。
- ⑤ 七佛。過去七佛のこと、一毘婆尸佛、二尸棄佛、三毘舍浮佛、四拘留孫佛、五拘那含牟尼佛、六迦葉佛、七釋迦牟尼佛なり、前三を過去莊嚴劫の三佛といひ、後四を現在賢劫の四佛といふ。
- ⑥ 露柱。法堂佛殿等にある丸柱のこと。
- ⑦ 頑石點頭。十八賢傳に云く、「道生虎丘山に入り、石を衆めて徒となし、涅槃經を講す、……群石皆點頭す」と。
- ⑧ 仰山。支那江西省遂州仰山慧寂禪師、鴻山靈祐の法嗣、此の問答傳燈十一仰山章に出づ。
- ⑨ 法身。法身に三意あれど、今は生身の菩薩に對して肉體の繫縛を離れ、靈覺を體とせる菩薩をいふ。
- ⑩ 杖子。子は助字、寢具の杖のこと。
- ⑪ 鴻山。支那湖南省長沙府寧鄉鴻山の靈祐禪師のこと、百丈懷海の法嗣。
- ⑫ 寂子。仰山を指す、仰山の名は慧寂なればかくいふなり。
- ⑬ 越山云々の二句、雪竇重顯の語。祖英集下送僧に云く、「春風颺々として花正に飛ぶ、紅霞碧霞高低を籠む、越山日暮少林の客、塵に籠くべし子規の深夜に啼くことを、但し今は永平寺越州にあるが故に、義實禪師自らのものとしての

處にか在る。山乃ち、枕子を推出す。馮山聞いて乃ち云く、「寂子、劍刃上の事を用ふ」と。且く道へ、永平門下還つて恁麼に説得し、恁麼に聞得すや。良久して云く、「越山、日暮少林の客、應に聽くべし。子規の深夜に啼くことを。」

上堂、當山初祖衆に示して云く、「向上の一路、玲瓏八面、當陽の要機、全身擔ひ來る。是は乃ち金鎗掩ひ難し、非は乃ち玉石俱に焚く。擬議して進まざれば、盡界粉碎す。總に不恁麼、又且つ如何。」良久して云く、「是非娘生の口に掛けず、自ら傍觀の短長を論するあり。大衆、初祖の道處を會せんと要すや。一條の拄杖天地を拄ふ。更に阿誰をかして短長を論せしめん。」

頌出なり。

① 子規。ほととぎす、禽經に、「江左に子規と曰ひ、蜀右に杜宇と曰ふ」といへり。三四月の間に於て夜啼き且に達るといふ。

② 向上の一路。言語思慮の及ばざる最上の一路といふことにて、向上宗乘の事、或は向上秘則の事など同意なり。

③ 玲瓏八面。玲瓏は珠の明らかに透き通りたる貌、四方八面通達無礙なるをいふ。

④ 當陽の要機。當陽は「天子朝に臨むをいふ」とあり、今は當面といふ程の意なり、要機は要妙なる支機の義にして、妙法といふ程の意なり。

⑤ 不恁麼。今は不是の意。

⑥ 娘生の口。娘は母の通稱、父母所生の口といふも同じ。

⑦ 雲。神妙不可思議の義。

⑧ 明々。明々なる貌、了々も同

じ。

⑨ 祖意。教意に對す、祖師意の略、祖師とは支那禪宗の初祖達磨大師を指す、達磨西來の意旨といふこと、達磨の西天より支那に來るや、經論に依らず稱念せず、只管打坐するのみ、是に於て教外別傳の説あり、教家と宗意を異にするものとす、然し今はそれ程深き意味には非ず、百草に對して祖師といふ程に見るべし。

⑩ 龍窟居士の句に、「明々百草頭、明々たる祖師意」とあり。

⑪ 頂相。上半身の骨像のことなれど、今は相貌、形相と云ふ程の意なり。

⑫ 風月等の二句は、宏智上堂の語なり、同錄一に出づ。

⑬ 古渡。古はけた渡場の意。

⑭ 雲門。支那廣東省韶州府曲江縣治雲門山文僊禪師、雲峯義存の法嗣。此の示衆は雲門廣

上堂、一物長へに、靈なり、萬戸俱に透る。百草本、明々、祖意自ら了々。天普く覆ふて人々、頂相圓なり。地普く載せて箇々脚跟平かなり。此に於て薦得せば、一も也た不是、二も也た不成。什麼の處に向つてか唇皮を鼓せん。還つて會すや。良久して云く、「風月清寒なり。古渡の頭、夜船撥轉す瑠璃の地。」復た擧す、雲門衆に示して云く、「儂若し未だ箇の入處を得ずんば、三世の諸佛汝が脚跟下に在り、一代藏教汝が舌頭上に在り、且く葛藤の處に向つて會取せよ。」師曰く、「韶陽老漢恁麼に道ふと雖も、未だ免れず。奴を認めて郎と爲すことを。永平門下、者の活路のある有り、儂若し實に未だ箇の入處を得ずんば、更に草鞋を買つて行脚せば好し。」

上堂、擧す、曹山因に僧問ふ、「眉と目と還つて相識るや也た無しや。」山云く、「相識らず。」僧曰く、「甚としてか相識らざる。」山云く、「同じく一處に在るが爲なり。」僧曰く、「恁麼ならば即ち不分なりや。」山云く、「眉且つ是れ目にあらず。」僧曰く、「如何なるか是れ目。」山云く、「端的にし去る。」僧曰く、「如何なるか是れ眉。」山云く、「曹山卻つて疑ふ。」僧曰く、「和尚什麼とし

鎌垂語の部に出づ。

① 韶陽老漢。韶陽は韶石山の南に在り、此れ即ち雲門所住の地、故に雲門を指すなり、老は老大の意、漢は人のこと、老年寄宿の人を尊稱するに用ひ、又老耄の意にて輕蔑の語にも用ふ。

② 奴を認めて郎と爲す。奴は奴僕、郎は郎君の義、從僕を認めて主人と作すといふことにて、識神を認めて佛性となし、煩惱を認めて菩提と作す如きに喩ふ。

③ 行脚。善友真師を尋ねて諸國を遊行し、山川を跋渉すること。

④ 支那江西省撫州曹山本寂禪師、洞山真价の法嗣、此の問答は山録及び傳燈十七に見ゆ。

⑤ 端的。端は正、的は明白の義、正確分明の意なり。

てか卻つて疑ふ。山云く、「若し疑はずんば即ち端的にし去らん」と。師頷して曰く、「弟兄本是れ一家の兒、眼を青鬘に著けて兩眉を展ぶ。誰か識らん曹山端的の處、經行坐臥相疑はず。」

上堂、目前の機、肘後の印、會て間隔なし。即今分明、然も恁麼なりと雖も、揚眉胸目すれば、即ち眉目に熱瞞せらる、談玄說妙も亦玄妙に汚染せらる。若し又寂に住すれば、還つて通身を縛す。空を解すれば空自ら窠窟を作す。大衆作麼生か行履して、恁麼の偏坑に墮せざることを得去らん。還つて會すや。良久して云く、「動容古路に揚る、悄然の機に墮せず。復た擧す、曹山因に僧問ふ、「時節恁麼に熱す、什麼の處に向つて廻避せん。」山云く、「鑊湯爐炭裡に廻避せよ。」僧曰く、「鑊湯爐炭裡如何か廻避することを得ん。」山云く、「衆苦も到ること能はず」と。師曰く、「曹山恁麼に道ふと雖も、未だ免れず外に向つて馳走することを。若し人有つて、永平に時節恁麼に熱す、什麼の處に向つて廻避せん」と問はゞ、他に對して道はん、須らく日下に向つて廻避すべしと。又炎々たる日下如何か廻避することを得んと問はゞ。良久して云く、「時節若し至れば、佛性現前

①弟兄本是れ一家の兒。弟兄今は眉と目とを指す、南嶽の語。傳燈南嶽章に曰く、「師入室の弟子總に六人有り、師各々印可して云く、汝等六人同じく我が身を證して各々一路に契へり、一人は吾が眉を得て威儀を善くす、一人は吾が眼を得て顧眄を善くす、云々。」

②經行。本義は坐禪の時、坐風を防ぎ或は睡眠を除くため、僧堂内の單間を一定の時間に徐徐に歩むことなれど、一般歩行の義にも用ふ。

③機。發動の義、縁に遇ふて發動する可能性をいふ。

④肘後の印。印は心印なり、喻の語、古は百官の印は皆組んで之を穿ち腰に佩び、或は人をして時に繋げしむ、故に肘後といふと。

⑤揚眉胸目。胸は目を動かし、「めくばせ」すること。眉をあ

せん。」

上堂、眞說機に對せず、眞機說を待たず。所以に大人大用を具し、大機大智を具す。且く道へ、諸禪德、畢竟作麼生か是れ大人大機底の作略、還つて委悉すや。靈羊角を掛けて、絶跡亡蹤。復た擧す、當山の初祖曰く、「古人扇子を拈起して云く、「任爾あれ千般の巧、終に兩様の風なし」と。山僧は即ち然らず、任爾あれ千般の巧、更に見る萬様の風と。」師曰く、「雲上座、半句を加へて古人虧闕の處を補はんと欲す。任爾あれ千般の巧、終に兩様の風なし。涼を招くと。月を翫ぶと、只だ一輪の中にあり。」

げ目を見はることをいふ。②談玄說妙。玄は黒くして赤色を帯び幽遠なる色のこと。玄は幽にて、「かすかにして微妙なる義、上は覆ふの義、幽なるものを覆へば更に幽にして暗くなるなり。轉じて真理の意にも用ひらる、妙は年弱くして纖く美しきこと、轉じて微妙の義となり、更に轉じて神妙不可思議の義とす。今談玄說妙は宇宙玄妙の道理を談示すること。

③佛性。佛陀たるべき心性の義にて、人々本具の自性に外ならず、教家にては性得佛性說、修得佛性說、有情有性說、非情有情說等ありとも、禪門にては身心一如と談するが故に、内外性相を論ぜず、非情有情の區別をなさずと知るべし。此の二句、涅槃經にあり。

情、是れ我が眞箇の漢、方に護生を解す。禁足や、歩々妄に移さず、護生や、心々妄に動せず。所以に道ふ、大圓覺を以て我が伽藍と爲す、身心安居、平等性智と。佛々此に到つて歸を同じうし、人々此に住して法爾たり。還つて委悉せんと要すや。一輪の皎月大圓覺、刹海三千鐵一團。歩々空を點じて、朕跡なし、人喚んで我が伽藍と爲す。

上堂、途中に相過ぎて、蓋を傾け、直下頭を回せば關を阻つ。向去茲より、普請し去り、卻來此れより來端を悉かにす。拄杖を拈じて劃一劃して云く、「過去の諸、如來、此の門已に成就、現在の諸、菩薩、今覺して圓明に入る。未來衆、學人、當に是の如きの法に依るべし。所以に道ふ、湘の南、潭の北、中に黄金あつて

詩に云く、犀は月を蔽ふに因つて紋角に生ず」と。今按するに、犀牛角子の縁に因つて、此の語有るならん。

⑦ 乾坤。乾坤は天地のこと。

⑧ 法界。法界は世界といふ程の義。

⑨ 禁足。結制九旬安居の間は之を禁足といふて安居の僧は其の道場の外に出づることを禁するなり。蓋し印度に於ては此の安居は雨季に限られ、雨期に於ては蟲類最も繁殖するが故に、門外に出で踏つて蟲類を殺す等のことなからんため、又此の安居九十日間は、一向に辨道修行の時節なるを以て、一切の外出を禁せしものならん。眼藏安居卷に「竊に以れば薰風野に扇ぎ炎帝方を司る、法王禁足の辰に當る是れ釋子護生の日」といへり。

⑩ 朕跡。朕は物の生ずる「さざし」にて、跡は「あと」かたと訓じ、已に形に露はれたること、二字にて物の形跡といふこと。

⑪ 平等性智。如來四智の一、凡夫の第七識の我見を轉じて、此の智慧を得、以て自他平等の理を證し、常恒に大悲大慈の化益を行するなり。

⑫ 朕跡。朕は物の生ずる「さざし」にて、跡は「あと」かたと訓じ、已に形に露はれたること、二字にて物の形跡といふこと。

⑬ 蓋を傾く。孔子家語註に「傾蓋は車を駐むるなり」とあり。

⑭ 直下。當下に同じく、直ちにの意。

⑮ 辨請。大衆を普く請じて勞役作務すること。

⑯ 如來。佛十號の一、梵語多陀阿伽度の譯、如は眞如の義、即ち眞如より現はれ來りし覺者の義、又如去來の義にして、如々不動にして、渡邊世界に來りて衆生の根機に應用するが故に如來といふ。

⑰ 菩薩。具には菩提薩埵といひ、覺有情と譯す、覺智を求むる有情の義にして、諸佛の覺智を得んとして修行する大士に名く、即ち上菩提を求め、下衆生を教化する悲智の二願を具し、自利利他の行を全うする修行人なり。

⑱ 學人。佛道を參學修行する者を云ふ。

⑲ 湘の南、潭の北。以下の四句は魯巖十八則無礙塔の語の源の頌なり、湘南は湘水の南方のこと、湘水は湖南省にありて、洞庭湖に注ぐ川の名、潭北は潭州の北のこと。

⑳ 世尊。一日云々。此の因縁は法苑珠林五十敬塔部、又會元一に見ゆ。

㉑ 阿難。具には阿難陀、佛十大弟子の一、佛成道の年に生れ、世尊五十五の年より二十年間侍者となりて東西の化導に隨行し、入滅の際も其の左右に居りたり、迦葉の法を嗣ぎ第三祖たり。

㉒ 塔廟。塔は梵語率塔婆の略、廟は率塔婆の譯、故に單に塔といふも同じ、舍利を安置する處をいふ。

㉓ 佛に逢ふては云々の二句。永平傳錄上堂語に見ゆ。

㉔ 十方佛土中、唯一乘法。法苑

一國に充つ。無影樹下の合同船。瑠璃殿上に知識なし」と。復た擧す。世尊一日、阿難と行く次、一の塔廟を見て便ち作禮す。阿難問うて曰く、「是れ何人の塔廟ぞ。」佛言はく、「是れ過去の諸佛の塔廟なり。」阿難曰く、「過去の諸佛は是れ誰の弟子ぞ。」佛言はく、「過去の諸佛は是れ我が弟子なり。」阿難曰く、「應に當に是の如くなるべし」と。侍從して便ち行く。師云く、「佛に逢ふては則ち佛を拜し、牛に騎つて更に牛を免む。還つて委悉すや。橋を過ぐれば村酒美なり、岸を隔て、野花香し。水は竹邊に向つて縁に、月は松頂に當つて涼し。」

上堂、鶴自ら長し、之れを截れば鶴にあらす。鳧自ら短し、之れを續がば鳧にあらす。須らく信すべし、十方佛土中、唯一乘法な

ることを。若し復た擬議せば、是法住法位、世間相常住。

上堂、性海澄々清うして底に徹し、一波纒に動いて萬波隨ふ。龍魚活路更に外なし。裏許曾て死屍を宿せしめず。

監寺に謝する上堂、虚空の邊際なうして、大方を覆ふが如く、日月の光明を轉じて、日夜を分つに似たり。只だ是れ事に觸れ私なし、何ぞ更に物の辨せざる有らん。進んでは將軍の太平を致し、退いては師子の返擲を解す。玄則丙丁の因縁、楊岐挾路の相見も亦是れ分外にあらず。良久して云く、金繩拽轉す泥牛の鼻、半夜馳せ來つて海上に耕す。

上堂、虚空自ら虚空の邊量を知らず、大地自ら大地の廣狹を測らず。自己の三昧是れ自己の

經方便品の句、云く、「十方佛土中、唯だ一乘の法有り、二も無く亦三も無し。」十方は東西南北四維上下なり、佛土は佛の住み給ふ國土の義、但し佛の教化を受くる國土を悉く佛國土といふを通説とす。今は大千世界の中といふ程の意、乘は車乘にて、佛の教法に喩ふ、教法一を載せて涅槃の岸に運ばば乗と名く、唯だ一つの教あるのみといふ意。

① 法住法位、世間相常住。法華經方便品の句、云く、「是の法、法位に住すれば世間の相常住なり、道場に於て知り已つて、導師方便を説く。」法位とは眞如なり、法位に住すとは十界三千の諸法悉く眞如に住するをいふ、然るに眞如は常住なり、故に世間の相も亦常住なるなり。

② 性海。一佛性海の義、差別生經方便品の句、云く、「十方佛土中、唯だ一乘の法有り、二も無く亦三も無し。」十方は東西南北四維上下なり、佛土は佛の住み給ふ國土の義、但し佛の教化を受くる國土を悉く佛國土といふを通説とす。今は大千世界の中といふ程の意、乘は車乘にて、佛の教法に喩ふ、教法一を載せて涅槃の岸に運ばば乗と名く、唯だ一つの教あるのみといふ意。

③ 虚空。空中のこと、廣大にして一物も無く少しの障礙も無きに喩ふ。

④ 玄則丙丁の因縁。碧巖第七則評唱、則監院の如き、法眼の會中に在つて未だ曾つて參請入室せず、一日法眼問うて云く、則監院何ぞ來つて入室せざる、則云く、和尚登に知らずや、某甲背林の處に於て簡の入頭あり、法眼云く、汝試み

に我がために擊せよ見ん、則云く、某甲問ふ、如何なるか、是れ佛、林云く、丙丁童子來求火、法眼云く、好語恐らくは備錯つて會せんことを、更に説くべし看ん、則云く、丙丁は火に屬す、火を以て火を求む、某甲の如きは是れ佛、更に去つて佛を求むと、法眼云く、監院果然錯り會し了れり、則不憤、便ち去る、法眼云く、此の人回らば救ふべし、若し回らずんば救ひ得ず、則中路に到つて自ら付つて云く、他は是れ五百人の善知識豈に我を贖すべけんや、遂に回つて再び參す、法眼云く、爾但だ我に問へ、我れ汝が爲に答へん、則便ち問ふ、如何なるか是れ佛、法眼云く、丙丁童子來求火、則言下に於て大悟す。

所覺にあらず、他人の靈性豈に他人の心機に落ちんや。然も恁麼なりと雖も、魚は水に在つて命を得、鳥は空に遊んで身を保つ。且く問ふ、大衆、衲僧什麼の處に在つてか身心を保持し去らん。良久して曰く、「百尺の竿頭、一進一退。」

上堂、本實際の智是れ隱顯にあらず、空劫の身因縁に屬せず。然も恁麼なりと雖も、

① 楊岐挾路の相見。會元十九楊

② 或る時は八臂三目の上天子となる。眼藏有時の卷に曰く、

有る時は、一頭兩角の水牯牛となり、有る時は八臂三目の上天子と作る。青黯々の處靴を穿ち去り、明歴々の時帽を戴き来る。恁麼の消息未だ往來の機を免れず。作麼生か是れ本來一段の光明。良久して云く、「鳥は無影樹に棲み、花は不萌枝に發く。」復た擧す、玄沙因に僧問ふ、「三乘十二分教は則ち要せず、如何なるか是れ祖師西來意。」沙云く、「三乘十二分教、總に不要」と。師曰く、「且く問ふ、大衆這一則の公案、作麼生か領略せん。若し三乘十二分教の内に就いて覓めば、金屑貴しと雖も眼に落ちて翳と成る。若し三乘十二分教の外に向つて求めば、野鹿渴に臨んで陽炎を逐ふて走る。人あつて永平に三乘十二分教は則ち要せず、如何なるか是れ祖師西來意と問はゞ、

「有る時は三頭八臂、有る時は丈六八尺。」
①上天子。大自在天身のこと。止觀十に云く、「摩醯首羅天は此に大自在といふ、色界の頂天三日八臂なり。」
②鳥は無影樹云々の二句。宏智錄四上堂語に見ゆ、「鳥は無影樹に歸して宿し、花は不萌枝上に在つて開く。」
③玄沙。支那福建省玄沙山宗一大師備、雪峰義存の法嗣。此の問答は傳燈十八に出づ、眼藏佛教の卷にも引用せり。
④三乘。三乘、一に聲聞乘、二に緣覺乘、三に菩薩乘なり。乘は運載の義、此等三種の機類は、各自迷界を出づるに四諦十二因緣六度中、各自に逆する教法に乗るが故に斯く云ふなり。
⑤十二分教。十二分經又は十二部經ともいふ。佛陀の所説を

十二種に分類せるものなり、一に修多羅(契經)、二に祇夜(應頌)、三に和伽羅(授記)、四に伽陀(諷誦)、五に尼陀那(因緣)、六に優陀那(自記)、七に伊帝目多(本事)、八に闍多那(本生)、九に毘佛略(方廣)、十に阿婆達磨(未曾有)、十一に阿婆陀那(譬喻)、十二に優婆提舍(論議)なり。
⑥祖師西來意。祖意と云ふも同じ、前注を見よ。
⑦公案。公府の案牘なり、公界定むる所の法式案文をいふ、天下是れに依りて訴訟の事項を處理す、今禪門に於ける古來佛祖の機緣相契ふの因緣、或は宗綱の開示等、此れ後人の法を是非判斷するの所以なるが故に、喩へて公案といふなり。
⑧金屑云々の句。本願機論に出づ、又會元十一臨濟章にも見

他に對して道はん、祇だ這の三乘十二分教、總に三乘十二分教にあらすと。」

①正旦上堂。乾坤禪僧の鼻孔より出入して平穩に、日月佛祖の眼睛を、扶出して清明なり。所以に道ふ、「天地と我れと同根、萬物と我れと一體」と。億萬斯年今日に於て成じ、百千の國土是の處に在りて現す。釋迦老子此に於て一乘の法を説き、達磨大師此に於て五葉の春を敷く。諸人還つて看るや、元正啓祥、萬物成新なり。
上堂、記得す、臥龍因に了院主に問ふ、「先師云く、盡十方世界是れ箇の眞實人體。爾還つて僧堂を見るや。」主曰く、「和尚眼花することなかれ。」龍云く、「先師遷化、肉猶ほ煖かなること有り」と。永平聊か第二義門に向つて

えたり。云く、「王常侍曰く、金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成ると。」
②野鹿云々の語。宋釋楞伽經二又會元四に出づ。云く、「長慶の大安禪師曰く、若し作佛を欲せば、汝自らは是れ佛なり、佛を擔ふて傍家に走る、渴鹿の陽燄を逐ふが如くに相似たり、何時か相應し去らん。」
③正旦上堂。正月元旦、上堂して演法するをいふ。
④扶出。点ぐり出すこと。
⑤所以に道ふ。次の二句、肇師涅槃無名論妙存品に出づ。
⑥元正云々の語。類聚歲時門に出づ。云く、「鏡清の符禪師に僧問ふ、新年頭還つて佛法有りや也た無なや、師云く、有り、曰く、如何なるか是れ新年頭の佛法、師云く、元正啓祥、萬物成な新なり。」詐は福の義なり。

⑦臥龍。支那福州臥龍山安國院慧球寂照禪師、玄沙師備の法嗣、此問答は傳燈廿一出づ。
⑧院主。寺主、又は院宰ともいふ、寺院の事務を主宰する者の意にて、監寺の舊名なり。後住持を尊崇するを以ての故に、監院又は監寺と改む。
⑨僧堂。具には聖僧堂といひ、又雲堂、禪堂、選佛場とも稱す、大衆の常に起臥し坐禪辨道する處なり。
⑩先師遷化。先師は玄沙を指す、遷化は化度を他界に遷すの義にて、僧の死をいふ。
⑪第二義門。第一義諦に對す、建化門に同じく、向上の平等邊より、向下の差別門に却來して種々の手段を弄し、衆生の惑障を斷じ、迷妄を破して、成佛得悟の道を示すといふ。
⑫眼裡云々。此れ智門禪師の語、會元十五、智門禪曰く、

註脚を下さん。先師道く、「盡十方世界是れ箇の眞實人體、還つて僧堂を見るや。」拂子を立てて云く、「這箇は是れ永平が拂子、那箇か是れ眞實體。和尚眼花することなかれ。」眼裡筋なれば一世貧し。先師遷化、肉猶ほ煖かなることあり、水は竹邊より流れ出で、緑に、風は花裡より過ぎ來つて香しし。

上堂、擧す、青原、石頭に謂つて云く、「人悉く道ふ、曹溪に消息ありと。」頭曰く、「人あり、曹溪に消息ありと道はず」と。原云く、「大藏小藏何れよりか得來る。」頭曰く、「盡く這裡より去つて諸事總に關せず」と。師曰く、「青原は只だ大家日月の照すことを知つて、自己眼睛の明かなるを覺らず、石頭は家裡寶貝の貴きを見ると雖も、争か識らん。崑崙靈玉の多

- ① 情應を驚起して妄見を生ず、眼裏筋に無ければ一世貧し。
- ② 水は竹邊云々。此の二句、宏智録一上堂及び同四に在り、便蒙類篇上に出づ。
- ③ 青原。支那江西省吉州青原山行思禪師、大鑑慧能の法嗣、大いに宗風を振ひ、後世南嶽下に並び稱せらるゝ源をなせる人。此の話は傳燈十四及び會元五、共に石頭希遷の章に載す。
- ④ 石頭。無際大師希遷禪師、青原の法嗣、支那端州高安の人、天寶の初に荐りに衡山の南寺に行き、寺東の石上に庵を結びて坐す、故に時人呼んで石頭和尚といふ。
- ⑤ 曹溪。支那廣東韶州府の東南三十里雙峰下にあり、今は寶林寺慧能禪師を指す、黃梅弘忍の法嗣、青原の師、石頭授業の師なり、達磨正傳の禪、師に至つて大成す。
- ⑥ 消息。音信なり。
- ⑦ 大藏小藏。藏は舎の義にして佛一切の教を舎藏するの意、大藏は菩薩藏のこと、即ち五千四十餘卷の經文、小藏は聲聞のこと、即ち八百四十卷の經文をいふ。
- ⑧ 崑崙。崑崙山のこと、支那の西方にあり、亞細亞最大山脈の一、パミルの東境葱嶺より起り、西藏と新疆との間を東走して河南省に至る、東崑崙は秦嶺と稱し、東端に近く、五嶽中の華山、嵩山あり、中崑崙は南山と呼び、南方より支脈東北走して賀蘭山、陰山となり、興安嶺に連る、支那の古史に所謂崑崙山は南山の南部を指すといふ、崑崙山の玉を産するとは、史記、正義其他多くの書の文に見ゆ。
- ⑨ 一夜落花云々。此の二句、若

きことを。大底は大、小底は小、者裡是れ什麼の處在ぞ。關と説き不關と説く。良久して云く、「一夜落花の雨、滿城流水香しし。」

上堂、擧す、僧、首山に問ふ、一切衆生及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆此の經より出づと、如何か是れ是れ此の經。山云く、「低聲々々。」僧曰く、「如何か受持せん。」山云く、「染汚すること莫れ。」宏智禪師拈じて曰く、「來つて此の經を問ふ、低聲々々、大千卷、塵中より出で、三世佛、口裡より生ず。天一を得て以て清く、地一を得て以て寧し。空、無依谷に盈たす。摩訶般若波羅蜜。落日、漁樵太平を歌ふ」と。師曰く、「永平、二老の吾頭を借らす。重ねて此の義を宣せんと欲す。」良久して云く、「吾相廣大此の經を轉す。近く聞いて

- ① 燈錄六に黃龍智明和尚の語として見ゆ、又雪竇足庵和尚、世尊密語の話の判語なり。
- ② 首山。支那河南省汝州首山省念禪師、風穴延沼の法嗣、此の話は傳燈十三、會元十一に見ゆ。
- ③ 阿耨多羅三藐三菩提。梵語略して阿耨菩提といひ、無上正徧智、無上正等覺と譯す、佛陀の智徳を稱する一名號、佛は絕對智者にして其の智を超えて大なる者無きが故に無上といひ、萬有の一々を了悟せざるなきが故に正徧智といふ。
- ④ 宏智禪師。支那明州天童山の正覺禪師、宏智は其の諡號、丹霞、淳の法嗣、此の拈提は宏智録四、上堂語に出づ。
- ⑤ 得一……盈谷。老子三十九章の句。
- ⑥ 摩訶般若波羅蜜。大智慧と譯す、六度の一、般若の智慧を以て一切事理の正邪を辨別する心作用、波羅蜜は譯して度といふ、般若の智慧を以て事理を辨へ一切の苦惱を度するの義。
- ⑦ 漁樵。漁者樵者なり。
- ⑧ 吾相廣大云々。放光般若經舌相光明品に云く、「世尊廣長舌を出して、三千世界に普徧す云々。」
- ⑨ 近く聞いて云々。圓機活法山水詩に云く、「遠く見れば山に色有り、近く聞けば水に聲無し。」
- ⑩ 寶王利。寶は七寶莊嚴の意、又尊重の辭、王は法王の意にて佛のこと、利は國土又は國界の義、故に寶王利は七寶莊嚴の佛寺の意なり。
- ⑪ 微塵。色體の極少を極微となし、極微を七倍せしものを微塵となす、微塵の七倍たる金塵は金中の間隙を遊履し得と

溪澗水に聲なし。百千の妙義誰か解すること許さん。風梧桐に入つて秋始めて成る。」

上堂、天地の間に處して、而して天に先ち地に先つ、是れ什麼物ぞ。佛祖の氣を稟けて、而して佛を超え祖を越ゆ、是れ什麼人ぞ。一杖子を挿んで、寶王刹を建て、一微塵に坐して大法輪を轉す。恁麼の時に當つて微塵是れ小にあらず、大千是れ大にあらず。所以に教中に云く、「是法平等無有高下」と、大衆還つて會すや。拂子を豎起して云く、「是れ什麼の法ぞ。」

上堂、本性一靈の光明、時と發起し、通身回互の手眼、觸處相宜し。眼處に聲を聞いて明歷々、耳處に色を見て淨躑躅。石人汝に似たらば、能く巴歌を唱へん、汝石人に似たらば、須らく雪曲を和すべし。塵々清淨智を發し、處

いふ、以て其の小を知るべし。
② 回互。回はめぐる、互はたがひに」と訓み、甲乙彼此互に交參滲入すること。六根と六境とが互に入り合つて能く眼に色を見、耳に聲を聞く、更に六根の間、又互に入り合つて眼に聲を聞き、耳に色を見るなり。

③ 石人汝に云々。會元六、洛浦元安禪師の云く、「石人の機汝に似るや、巴歌を唱ふるを解し、汝若し石人に似ば、雪曲も亦和すべし。」巴歌は卑賤の歌、雪曲は陽春、白雪として、向上の歌曲なり。

④ 閻王。閻魔王のこと、閻魔は梵名、閻摩羅、夜摩虛迦等に作る、雙王、遮止等と譯す、冥官の名なり、雙王とは妹はYamiと云ひ、兄妹共に地獄の王となり、兄は一切の男性を審判し、妹は一切の女性を

審判するの義。蓋し之は印度吠陀時代の神が佛教に混入せられ、幾多の變化を経て、今日の思想に至りしものならん。

⑤ 鐵牀洋銅。法苑珠林第十二卷に、問地獄經を引く。曰く、「十八王十八獄あり、其中第八鐵牀十八洋銅と。」
⑥ 宿生。前生、過去生といふに同じ。

⑦ 辨道。道業を成辨するの義、辨道の方面に二あり、一は向內的、二は向外的、その向內的とは坐禪の儀則に従ひ、正身端坐して内觀自省するをいふ。其の向外的なるに更に三あり、一は參師問法にして、正見を具する正師に就いて親しく辨道の用心を參究すること、二には或從經卷にして明窓淨几の下に靜坐して、先哲古賢の經典を繙き、自ら古教

處普門の境に入る。諸人這箇の道理を委悉せんと要すや。古渡風清し一片の秋、月色江光冷にして相照す。

三月旦上堂、大衆を召して云く、「時常に人を催すことあり、人豈に虚しく時を度らんや。或は水中に軀を亡じ、或は火裡に命を失す。刃刀に腸を割き、箭鋒に骨を透す。病患老少を擇ばず、閻王寧んぞ貴賤を問はんや。剛ひて微纖の罪犯を質して、供するに鐵牀洋銅を以てす。宿生の善種に依つて箇の人身を得たり。般若の良因に答へて、祖師門下に投ず。今日若し空しく過さば、幾劫にか又相逢はん。寒氣已に去り、熱時未だ來らず。辨道時最も宜し、空しく光陰を度ること莫れ。」

上堂、擧す、僧九峰に問ふ、「祖々相傳當に何事をか得べき。」峰云く、「釋迦の愷、迦葉の富。」僧曰く、「如何なるか是れ釋迦の愷。」峰云く、「物の人に與ふるなし。」僧曰く、「如何なるか是れ迦葉の富。」峰云く、「國內の孟嘗君。」僧曰く、「未審し相傳底の事如何。」峰云く、「百歳の老兒、分夜の燈」と。師曰く、「妙明の田地、纖塵點じ難し。鬧市門頭、相逢ふことを妨げず。暗裡に身を轉す平坦の路、明中頂を覆ふ。等閑の人。大衆還つて

照心すること、三に事上得解又事上練磨にして、事々物々に接して練磨の功力を積むをいふ。但し此等のもの各別には非ず、畢竟相關的のものなれば、一を以て他を捨つべきに非ず、内外相應して初めて辨道の實を完うすべきなり。

⑧ 九峰。九峰道慶禪師、石霜の法嗣、此の話は會元六、同師傳中に載す。

⑨ 孟嘗君。史記評林七十五に其の傳有り、門下に三千の賓客を養ひ、貴賤を計らず、曾上中下三等に分ちたりといふ。

⑩ 等閑の人。等閑は無事の意なり。
⑪ 泥融して云々。此の二句杜甫の詩、杜詩集註十五に之れ出づ。
⑫ 窟窟。「をしどり」なり。
⑬ 解脫門。一切の束縛を離れ苦惱を脱したる自由無礙の處の

體悉すや。泥融して燕子飛び、沙暖かにして
鴛鴦睡る。

解夏上堂、縛解不到の處、大解脫門開く。

從聽あれ炎暑の去ることを。誰か冷風の來るを
疑へん。未だ曾て軌則を存せず、何ぞ更に安排
を用ひん。此に於て薦取せば、木馬奔迭、石牛
懷胎、還つて委悉すや。身を轉じ、透出す竹
竿の路、眼を開いて、掀翻す甕裡の天。

知事に謝する上堂、叢林輔弼の柄を執つ
て、大家平穩の功を樹つ。事々、圓通觀自在
尊と手を把つて行き、門々隔てず、香積如來供
を送り來る。然も是の如くなりと雖も、未だ楊
岐挾路の相見を假らず。何ぞ、毘耶城の野狐通
を用ひん。還つて委悉せんと要すや。良久して
云く、「盧陵米價高し。」

こと、解脫の境界に入るを門
に入るに喩へていふ。
⑦ 身を轉じて云々。此の二句、
如淨錄上に出づ、但し竹竿を
竿頭に作る。

⑧ 掀翻。掀は手を以て高く上ぐ
るをいふ、即ち「はねかへす」
の意。

⑨ 知事。各自其の役に就きて其
の事を知つべき意にして、
禪門に於ける寺院には六
知事あり、都寺、監寺、副寺、
維那、典座、直歲是れなり。

⑩ 叢林。和合衆の安居同學する
處に名く、即ち大樹の叢生し
て林となるが如く、僧侶の衆
合せる意なり。
⑪ 大家。大衆の意。
⑫ 圓通觀自在尊。圓は性體周遍、
通は妙用無礙の意、觀自在は
梵語阿婆盧吉低婆羅の新譯、
舊譯には觀世音といふ。菩薩
の名、常に大悲大慈を以て十

方國土に遊び、衆生を化益
す、南海普陀洛島に居すとい
ふ。衆生の其の名號を稱ふる
を聞きて、ために解脫を得せ
しめ、三十三身を現じて說法
度生す。尊は尊者、梵語阿利
耶の譯、又聖といふ、尊ぶべ
き人の意。

⑬ 香積如來。維摩經八香積佛品
第十に云く、「時に維摩詰即ち
三昧に入り、神通力を以て諸
の大衆に示す、上方の界分、
四十五河沙の佛土を過ぐるに
國あり、衆香と名く、佛を香積
と號す今現在す、其の國の香
氣は十方諸佛世界人天の香に
比するに最も第一となす、彼
の土には聲聞辟支佛の名ある
ことなく、唯だ清淨の大菩薩
のみ、是に於て香積如來
衆香の鉢を以て香飯を盛滿し
て化菩薩に與ふ、時に彼の九
百萬の菩薩俱に聲を發して曰

中秋上堂、蒲團功就つて、三昧より起つ、

大用現前世間を照す。夜半正明、之を望めば
光に礙へらる。天曉不露、之を覷れば眼に瞞せ
らる。直に得たり。沙門、一隻の眼睛子を開い
て、神境通徹の大機關を活すること。
慈麼の田地に到つて還つて奇特ありや。良久し
て云く、「鯨は海水を呑み盡して、露出す珊瑚
の枝。」

九月朔上堂、明歴々の處跡を匿し、穩密々の
間身を轉ず。天言はすして日往き月運ぶ。地
言はすして山高く海深し。衲僧言はすして凡を
超え聖を超ゆ。拄杖言はすして與奪縱橫。只
だ樹凋み葉落ち、體露金風の如きは是れ言か
不言か。良久して云く、「橋は流れて水は流れ
ず。」

く、我れ娑婆世界に至つて、
釋迦牟尼佛を供養せんと欲
す。

⑭ 毘耶城の野狐通。維摩詰を指
す、野狐通とは野狐神通のこ
と、眞實に非ざるをいふ、人
を欺き誑かす者に喩ふ。
⑮ 盧陵米價高し。僧、青原に問
ふ、如何なるか是れ佛法的々
の大意、原云く、盧陵の米作
麼の價ぞ。
⑯ 三昧。今は禪定坐禪をいふ。
⑰ 夜半正明……天曉不露。此れ
寶鏡三昧の句なり。

⑱ 沙門。梵語舍羅摩擊の訛、又
桑門、沙門那に作る、動息、
止心、出家人等と譯す、出家
して佛道を修する者の總稱。
⑳ 一隻の眼睛子。一隻眼といふ
に同じ、前註を見よ、子は助
辭。
㉑ 神境通徹。六神通の中の神境
通よりもじりたる語にて、自

由自在の意なり。
⑲ 機關。工匠機巧の事をいふと
古書に註せられ、自然に動作
を起す機械といふことなれど
も、師家が學人を接待する巧
妙の手段作略をいふなり。

㉒ 鯨は海水云々。是れ希上人、
盧同に酬ゆる詩の句、碧巖六
則の鈔、從容錄六の頭に全詩
出づ。
㉓ 天言はすして云々。論語九、
陽貨篇に曰く、「子曰く、天何
をか言ふや、四時行はれ萬物
生ず、天何を言ふや。」
㉔ 只だ樹凋み云々。碧巖二十七
則、「僧雲門に問ふ、樹凋み
葉落つる時如何、門云く、體
露金風。」
㉕ 體露金風。山體露はれ金風吹
くの意にて、秋の景色なり。
㉖ 橋は流れて云々。傳燈二十七
善慧大士の傳、偈に曰く、空
手にして鋤頭を把り、歩行水

上堂、擧す、^①僧、雪峰に問ふ、「^②聲聞人の見性は夜月を見るが如く、菩薩人の見性は晝日を見るが如し。未審し和尚の見性如何。」峰打すること三下。其の僧後に^③巖頭に問ふ、頭打すると三掌。雪竇拈じて云く、「病に應じて薬を設け、且く三下を與ふ。若し令に據つて行せば打すること幾多かすべき。」師曰く、「永平が見性、聲聞に同じからず、菩薩に同じからず、三大老漢に同じからず。諸人眼を著けて見取せよ。」拄杖を卓すること三下して乃ち下座す。

^④蘭月旦上堂、乾坤の内、宇宙の間、中に一寶あり、^⑤形山に秘在す。^⑥肇法師然も恁麼に道ふと雖も、只だ月を語り月を指すことを解して、未だ指話俱に忘ること能はず。永平は然らず、乾坤宇宙一擧に撻破して、具眼の人を

牛に騎る、人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず。」
^②僧、雪峰に問ふ云々。佛果擊節第五十五則に出づ、雪峰は義存禪師。
^③聲聞人の見性は云々。涅槃經師子吼品に曰く、「十地の菩薩の所見の佛性は夜、色を見るが如く、如來の所見は晝、色を見るが如し」と、今此の文を轉換し將ち來つて問頭となすなり。
^④巖頭。巖頭全義禪師、證發は清嚴大師、德山宣鑑の法嗣。
^⑤雪竇。雪竇重顯のこと、智門光祚の法嗣。
^⑥三大老漢。雪峰、巖頭、雪竇を指す。老は老大の意、漢は人のこと。老漢は老年書宿の人も尊稱するに用ふ。
^⑦蘭月。蘭は臘に同じ、十二月のこと。
^⑧乾坤の内云々。寶藏論空有品に、「夫れ天地の内宇宙の間、中に一寶あり形山に秘在す。」此の文もと勝天王般若經三法性品第五より來る。
^⑨形山。五蘊四大をいふ、即ち吾人の色身のこと。
^⑩肇法師。羅什門下四哲の一。
^⑪細にして問隙なく云々。寶鏡三昧に曰く、「細には無間に入り、大には方所を絶す、毫忽の差、律呂に應ぜず。」
^⑫毫釐。韻會に云く、「蠶の吐く所を絲といふ、十絲を一毫となし、十毫を一釐となす云云。」
^⑬律呂。通考に、趙氏慎曰く、律は法なり、言は陽氣と陰氣と法をなす、呂は助なり、言は陰氣陽を助け氣を宣ぶ、總じてこれを言へば、陰陽皆律と稱す、故に三十二律といふ云々。」
^⑭萬里に崖洲を望む。猶ほ「遠

して疑猜なからしむ。拄杖を卓すること一下して云く、「還つて見るや、梅花と白雪と、色を同じうして香を同じうせず。」

上堂、是の法は計較の到る所にあらず、吾が心淨穢に礙へられず。^①細にして問隙なく、大にして方隅を絶す。^②毫釐も之に差へば、律呂に應ぜず。直下承當本奴婢なし。但だ有ることを知るが故に、狸奴白牯修行地に進み、有ることを知らざるを以て三世の諸佛法王城に迷ふ。若し此に於て勝負を論せば、^③萬里に崖洲を望む。正當恁麼の時如何か著手し去らん。良久して云く、「聊か拄杖を將つて滄溟を撻して、魚龍をして水の命たることを知らしむ。」

(永平寺語錄終)

① 小 參

寶慶 冬至小參。陰も也た去處なく、陽も也た來由を没せん。短長の時劫に涉らず、豈に始終の羅籠に拘らんや。備我れを怪しむこと莫れ、

うして遠し」といふが如し、崖洲は瓊洲府、三州の一、京師に至る九千四百九十里なりといふ。
^①聊か拄杖を將て云々。傳燈二十一慧球禪師上堂に云く、「一隻の折筋を以て大海を撻し、彼の龍魚をして水の命たることを知らしむるが如し。會すや、若し智眼之を審諦するなくんば、さもあらばあれ百般の巧妙なるも究竟となさず。」
^②小參。小參は大參に對す、大參は結堂に於ける上堂にして専ら宗旨を擧揚す。小參は多く住持方丈に於て一山の大家に對して家訓を教誨するをいふ。
^③冬時。二十四氣の一、陽曆十二月二十二日頃。史記、「日冬至則一陰下藏一陽上舒」と。唐の雜錄に、「宮中以女功。按二日之長短、冬至後比日常日増。」

風 凜々として竹を破る。吾れ備に隠すことなし、雪 皚々として松を壓す。所以に道ふ、一時節若し至れば、其の理自ら彰る」と。拂子を堅起して云く、「者箇は是れ 三祇劫の本際、一刹那の中央、其れ或は擬議せば劫を隔つることある。畢竟如何。」良久して云く、「夜半鳥兒頭に雪を戴く、天明に啞子抱頭して歸る。」

除夜小參。廓爾として靈なり、本來光明自ら照す。寂然として應ず、特地に大用現前す。向去底は泥牛海に入つて消息を没し、卻來底は木鷄曉を唱へて元樞を發す。前後際斷、古今 無諍三昧に住す。來去蹤なく、風煙古渡頭邊に横はる。殘臘已に極り、新歲未だ到らず。中間如何が足を借らん。還つて委悉すや。千光照さず 空王殿、夜半の鳥鷄雪を帯びて飛

一線之功こと。
①時劫。時劫は時間といふ程の意。劫は名義第三に、劫、大論に泰に分別時節といふ、雜阿含經第三十四に云く、譬へば鐵城の方一由旬なるが如き、高下亦然り、中に滿つるの芥子あり、百年に一芥子を取り、其の芥子を盡すも劫猶ほ竟らず。又云く、大石山の不斷不壞にして方一由旬なるが如き、若し士夫あり、迦尸劫貝を以て百年に一拂し、之を拂ふて已ます、石山遂に盡くるも劫猶ほ竟らず」と。
②經籠。籠は「あみ」、籠は「かご」のこと。
③凜々。清寒の貌。
④皚々。霜雪の白き貌。
⑤所以に道ふ。禪林類聚水火門に、「百丈云く、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし、時節若し至れば

其の理自ら彰る。」北本涅槃經師子吼品は之と小異なり。
⑥三祇劫。三阿僧祇劫の略、阿僧祇は梵語無數と譯す、數を極むるとも知る能はざる大數の意なり。即ち三祇劫は三無數劫のことにして、菩薩が佛果を得る迄に經玉ふ修行の年時なり。
⑦一刹那。刹那は梵語、念と譯す、印度に於ける時の最小單位なり、極めて短き時間といふ。一彈指に六十五刹那ありといふ、以て知るべし。
⑧夜半鳥兒云々。此の語、禪類一間法門に出づ、谷山有緣禪師西來意の問に答ふる語なり。
⑨除夜小參。此の小參は、次の入院小參と前後す、永平に在つての除夜小參なるを以てなり、除夜は又除夕とも云ふ、大晦日の夜なり。

ぶ。復た擧す、趙州因に僧問ふ、「兩鏡相向ふ、那箇か最も明かなる。」州云く、「汝が眼皮 須彌山を蓋ふ。」當山初祖拈じて曰く、「或は人あつて永平に兩鏡相向ふ、那箇か最も明かなると問はば、他の爲に拄杖を拈じて道はん、者箇は是れ拄杖子と。他又此れは是れ 長連床上學得底、佛祖向上什麼とか道はん」と道ふて、拄杖を擲下して下座。師曰く、「今夜山僧に兩鏡相向ふ、那箇か最も明かなるやと問はゞ、即ち道はん、一段の光明古今を照すと。」

永平 入院小參、法は法に隨つて行し、法幢は隨處に建つ。一出六出、藥山の師子。異類同類、青原の麒麟。自家の鑰子を拈起して向上の玄關を打開す。恁麼の時に當つて祖宗の爐鞴、魔を鍊り佛を鍊る。鑊湯消融、本

⑩廓爾。雲晴れ空廣き貌。
⑪前後際斷。前後際の念を斷絶すること、一切相對的の念を截斷して不思議不思議とならぬをいふ。
⑫無諍三昧。法性の眞理たる一切皆空の理を證し、自他是非の差別の相を泯すれば、よく法性の理に隨順して違ふこと無きが故に、諍ふところなし。之を無諍三昧といふ。
⑬千光照さず云々。此の二句は如淨錄に出づ、緣西堂に謝する上堂の結句なり。
⑭空王殿。空王は佛の總名なれど、今は過去の一佛の名なり、空劫に出現する佛。空王殿はその佛の在處にして今は空無に喩ふ。
⑮須彌山。梵に蘇迷盧といひ、妙高山と譯す、印度の古説に依れば、一世界の中央に須彌山あり、周圍に七金山八海を

有し、一切の生類皆之に依りて生息し、日月諸天また之に依りて廻轉すといふ。
⑯長連床。僧堂の單位のこと、蓋し單位は長くして五六人乃至十人位づつ一床に坐する床なるが故に、長連床といふなり。
⑰入院。入寺に同じく、新命の住持初めて其の寺に入るをいふ。
⑱法は法に云々。此の二句、宏智録一に出づ、小參語なり。
⑲法幢。道場の標幟にして印度に於ては大法を人に宣傳する師が、其の標幟として門頭に建つるものなり。
⑳一出六出藥山の師子。禪類四獅象門に、雲巖最禪師因に藥山に問ふ、聞く汝師子を弄することを會せりと、是なりや否や、師云く、是、山曰く、幾ばくを弄得し出す、師云

分の鉗鏡、自を鍛ひ他を鍛ふ。面目儼爾、既に
恁麼の手段を得、作麼生かの當ならん。道ふ
こと莫れ鯤鯨羽翼なしと。今日親しく鳥道より
回る。復た擧す、藥山因に僧問ふ、「祖師未だ
此の土に到らず。此の土に祖師意ありや也た否
や。」山云く、「有り。」僧曰く、「已に祖師意あらば
又來つて什麼が作さん。」山云く、「有るが爲の所
以に來る」と。師の頷に曰く、「劫前の消息
誰人にか屬す。五葉の聯芳、芬馥新なり。少
林眞の妙訣を識らんと要せば、一聲の鐵笛、陽
春を奏す。」

結夏小參、虚空を擘破して、九旬の窠窟を構
へ、圓覺を打開して、大地の有情を接す。馬
牛を驅つて自己一片の田地を耕し、凡聖を會し
て空劫已前の規綱を張る。所以に道ふ、「十方

く、六を弄得し出す、山曰く、
我れ亦弄得す、師云く、和尚
幾はくを弄得し出すや、山
曰く、我れ一を弄得し出す、
師云く、一即六六即一と。傳
燈十四雲巖章にも出づ。
⑦青原の鯨鱗。會元五青原章に
云く、「石頭青原に問ふ、曹溪
大師選つて和尚を識るや否
や、師曰く、汝今吾を識るや否
や、曰く、識る、又争か能く
識得せん、師云く、衆角多し
と雖も一鱗走る。」
⑧燒桶。鍛冶工の銅鐵等を鍛練
する爲に用ふる火爐、風を起
す「ふい」このこと。師家が學
人を陶冶する手段に喩ふ。
⑨護湯。護は大鼎なり、故に護
湯は熱湯の意。
⑩道ふこと莫れ云々。宏智上堂
の語、同錄一に見ゆ、但し事
實は莊子逍遙篇に出づ。云
く、「北冥に魚有り、其の名を

鯢となす、鯢の大き其の幾千
里なるを知らず云々。」
⑪藥山。支那湖南省澧州藥山惟
嚴禪師、石頭希遷の法嗣、此
の話は會元五藥山章に出づ。
⑫劫前。空劫以前の意、天地の
開くる以前のこと。
⑬芬馥。香氣盛なる貌。
⑭少林。支那河南省河南府登封
縣の四十里嵩山少林寺、達磨
面壁の地、今は達磨大師を指
す。
⑮陽春。楚國の歌曲の名、高尚
なる詩を稱す。
⑯圓覺。如來の覺性をいふ。圓
とは満足周備して此の外更に
一法無きをいひ、覺は靈明靈
照にして、諸の分別念想無き
をいふ。
⑰所以に道ふ。以下の四句龍居
士の偈なり、龍居士は支那唐
代の人、姓は龍、名は蘊、字
は道玄、襄陽の人、世々儒を

同聚會、箇々學無爲。此れは是れ 選佛場、心空 及第して歸る」と。且
く問ふ、龐老者裡階梯を立せず、及第底是れ什麼。若し又心地本來空なる
ことを證せずんば、争か平等性智に安居せん。此に於て薦得せば、欄に及
第を許す。然も是の如くなりと雖も、同共一法の中、何ぞ更に揀擇を作さ
ん、還つて委悉すや。争ふに足らず、讓るに餘りあり。記得す、當山初
祖結夏小參に、擧す、慈航禪師道く、「參禪の人第一に鼻孔端正、次に眼
目清明、其の後は 宗說俱到を貴ぶ」と。祖云く、「大衆鼻孔端正の道理を
會せんと要すや。若し也た會得せば、鼻孔を穿破し了れり。眼目清明を會
せんと要すや。便ち是れ傍觀の人に 木楔子に換卻し了らる。宗說俱到を會
せんと要すや。拂子を以て禪床を撃つこと一下して云く、「宗も也た到り、
説も也た到る。向上又方便のある有り。慈航又云く、「九十の長期明日
より始む。繩墨外邊を將つて行くこと莫れ」と。永平今夜此の兩句を續い
で禁足の規繩を爲さん。九十の長期明日より始む。繩墨外邊を將つて行く
こと莫れ。草鞋拄杖 都盧脱して、但た愛す瞿曇の活眼睛」と。師曰く、
「山僧 尊韻を續いで重ねて此の義を宣す。祖宗の機要正に分明。繩墨規を

以て業とす、貞元の初石頭希
遷に謁して禪旨に契ひ、後馬
祖に參じて法を嗣ぐ、留まる
と二年、爾來禮諸師の迅速、
實且の維摩と稱せらる。
⑱選佛場。佛祖を選作する道場
の義にて、僧堂をいふ、蓋し
僧堂は坐禪を修し、坐禪に依
つて作佛する處なるが故にい
ふなり。
⑲及第。選佛場に對していふ
語、心空及第は見性悟道の義。
⑳當山初祖云々。永平廣錄八に
見ゆ。
㉑慈航禪師。慶元府天童山慈航
了朴禪師、育王介藩の法嗣。
會元十八に出づ。
㉒宗說。宗通、説通のこと、能
く宗旨を悟るを宗通といひ、
能く説法をなすを説通とい
ふ。
㉓木楔子。菩提樹の實なり、數
珠の珠に用ふ。

爲して只麼に行く。雲青山に倚つて子は父に歸す。豁開す鐵眼と銅睛と。

解夏小參、大功轉する處、縛を解き黏を去る。三期満する時、拄杖を擔起す。人より傳へず、誰をしてか。千聖を慕はしむ。是れ自得にあらず、何ぞ更に己靈を重んぜん。一葉空に飄つて林岳體露れ、大洋月を涵して珊瑚光を映す。正恁麼の時、九十日の飯錢を還し了るや也た未だしや。若し未だ還し了らずんば、爾が拄杖子を奪はん。若し又還し了らば、爾に本分の草料を與へん。恁麼に相應じ得れば、時慮しく度らず、觸處自在ならん、還つて體悉すや。滿頭の白髮岩谷を離る、半夜雲を穿つて市廓に入る。復た擧す、歸宗に因に僧辭す。宗云く、「什麼の處に向つてか去る。」僧曰く、「諸方に五味禪を學し去らん。」宗云く、「吾が者裡只だ一味の禪あり。」僧曰く、「如何なるか是れ和尚一味の禪。」宗便ち打す。師曰く、「這箇の一槩子如何か透得し去らん。凡を打し聖を打する家風顯示、一片に打成す禪本無味。」

歸宗。支那江西省南康府廬山歸宗寺智常禪師、馬祖道一の法嗣。此の話、會元三に出づ。五味禪。一味禪の對、種々の雜解妄解の混合せる禪の、即ち純粹なる佛祖相傳の禪に非ざるをいふ。一味の禪。純一無雜の最上乘の禪、即ち眞の佛法をいふ。一槩子。子は助字、槩は「くさび」と訓す、一著子と同じ。法語。佛家に於て演說する所のものは皆法語なり。禪人。參禪の人をいふ、即ち禪門に歸入し、坐禪を修する人。單傳。單は單獨、傳は相傳の義、教外別傳の宗は他の教家の如く種々の法門を論ぜず只だ打坐の法を修して見性成佛する、之を直指單傳の法といふ。王三昧。三昧中の王たる三昧

九十。安居九旬のこと。都盧。都ての義、一切殘らずの意なり。

尊頭。永平高祖の頭なるが故に尊敬して斯くいふ。

只麼。「斯の如し」といふ意、恁麼といふに同じ。

三期。長中下の三期のこと。圓覺經圓覺菩薩章に云く、「即ち道場を建つ、當に期限を立つべし、若し長期を立てば百二十日、中期は百日、下期は八十日。」

千聖。聖とは佛祖のこと、千聖とは三世歷代の佛祖をいふ。

艸料。牛馬の日々食する「かひば」のことなり、今は本分の接待、即ち棒喝を與ふるの義に用ふ。

滿頭の云々。此の二句、空谷六十八則投子和尚拈語の末句なり、又安智録一に見ゆ。

法語

禪人に示す

生を佛法流布の處に受け、法を祖師單傳の門に聽く、廣大劫の際最も稀なり。此の生空しく過すべからず、是の法豈に開明せざらんや。中に就いて坐禪の一行は、三昧中の王三昧なり。祖師西來餘事を務めず、面壁打坐のみ。爾直に須らく、回光返照底の智を亡じ、頭に迷ひ影を認むる底の愚を驕して始めて得べし。道ふとを見ずや、三級浪高うして魚龍と化す。癡人猶ほ辱む夜塘の水。」此に於て薦取せば、世人の愛處を愛せず、諸聖の證階を望まず、塵中に混せず、威音世外の歩を擧し、凡聖を超越して從上祖宗の風を弄す。旂を勉めよ旂を勉めよ。

同

吾が胸中宛も虚碧の如し、更に語句の人に與ふべきなし。飯に逢ふては飯を喫し、粥に逢ふては粥を喫す、困じ來れば眼を合し、健かなれば則ち經行す。其れ或は文字を要せば、如々の文字萬象の上に顯露す。其れ或は心を求めば、祖々の心要全く偏が動靜にあり。既に那邊にあつて恁麼の事を擔荷し、這裡に卻來して恁麼の道を履踐するものなり。名も也た得ず、狀も也た得ず。所以に道ふ、從來共に住して名を知らず、任運に相將めて只麼に行く。古より上賢猶ほ識らず、造次の凡流豈に明むべけんや」と。聖諦すら尚ほ爲さず、何に況んや世諦をや。洞山、衆に示して云く、「千人萬人の中にあつて、一人に向はず、一人に背かざ

り落して水を排除し、黄河の汎濫を防ぎたるが故に禹門といふ、俗説に、毎年三月三日に鯉が其の瀑を過りて龍門を透過すれば、角を生じて龍となるといふ。今已に鯉は龍と化し去りたるを知らず、痴人は龍門の淵壺に鯉を搜索するは愚の至りなることをいふ。威音世外。威音は威音王如來の略、太古の佛名なり、威音世外は威音王以前、又は空劫以前、天地未開以前といふに同じ、世外は横に約し、以前は縦に約するの差あるのみ。従上。これまでの意。虚碧。碧空と同じく大空のこと。如々。不變不動の義。所以に道ふ。以下の四句、會元五藥山章に出づ、云く、「山一日石上に在つて坐する次、石頭問うて云く、汝這裏に在

つて何をか作す、曰く、一物も爲さず、頭曰く、恁麼ならば即ち閑坐なり、曰く、若し閑坐ならば即ち爲さん、頭曰く、汝爲さすと道ふ、箇の甚麼をか爲さざる、曰く、千聖も亦識らず、頭偈を以て讀して曰く、從來共に住して名を知らず、任運に將ひて只麼に行く、古より上賢猶ほ識らず、造次に凡流豈に明らかむべけんや。」

②任運。時運に任ずの義。
③造次。急遽苟且の時、即ち暫時の意。
④聖諦すら尚ほ爲さず。諦は眞實の義にて、佛道といふ程のこと、佛法には眞諦と俗諦とありて、眞諦は非有の理を明し、俗諦は非空の理を明す、而して此の眞俗二諦を融鑄したる眞俗不二となりたる所を聖諦といふ。その佛法最上の

る底、是れ什麼人ぞ」と。雲居、衆を出でて云く、「某甲、參堂し去らん」と。此れ則ち吾が家の家珍なり。謾に抛卻すること勿れ。朝に西天に往いて參取し去り、暮に東土に歸つて問著し來る。問ひ來り參じ去つて、月深く年久し。者裡に卻來して須らく洞山雲居に相逢ふことを得去るべし。若し又相逢ふことを得ずんば、長連床上三二十年、心を牆壁に著けて辨取せよ。

佛祖贊

觀音

流に隨つて脚跟を點じ、幾煙雲をか踏斷す。
海島碧岩の裡、快かに入理の門を占む。童

位すら求めず、凡聖の階級に離せず、一物に依倚せざる洒脫自在の境界をいふ。
②世諦。俗諦即ち世俗法のこと、世間萬般の差別の事相をいふ。
③雲居。支那江西省南康府建昌縣西南三十里雲居道膺禪師、洞山悟本の法嗣。
④參堂。堂は僧堂なり、僧堂に歸るをいふ。
⑤西天。支那日本より西方にある天竺國の意にて印度のこと。
⑥海島碧岩の裡。稽古略三に云く、「慶元府の海中に楠性路迦山あり、乃ち觀音示現の地なり。」又一統志四十六に云く、「補陀山は寧波府昌國縣の海中に在り。」
⑦童子。善財童子のこと、華嚴入法界品に委し、善財南方に往き、先づ德雲比丘に參じ、

次第展轉して終に普賢菩薩に參じて、一切佛刹微塵數の三昧門を得、斯の如く百十城を經、五十三の知識に參ず。
⑧涅す。涅は水中の黒土をいふ、涅すは黒く染むること。
⑨攪す。攪は亂なり、攪なり、手動なり。
⑩布袋。唐の明州奉化縣布袋和尚、名は契此といふ、蹙額縮腹、言語恒なく、隨處に睡る。常に杖を以て布囊を荷ひ、物を見れば乃ち乞ひ、少許を分けて袋に入る、自ら長汀子、布袋師と號す、後梁の貞明三年三月示寂、辭世の偈に彌勒眞彌勒、分身千百億、時々時人に示す、時人自ら識らず。」
⑪兜率。世以て慈氏の垂迹となす。又却史多、兜率陀等に作り、妙足、止足、知足等と譯す、欲界六天の第四、須彌山の頂上十二萬由旬の處に在り、内

子艱ること莫れ百城の歩、大千の春は箇の花園にあり。瓶中の蓮々底の水、^①涅すれども染ます。攪すれども渾らす。

布袋

烏藤擔起す大千界、行けば則ち同じく行き休すれば共に休す。^②兜率の法音、噴地に成す。這邊那畔、放に^③優遊す。

永平初祖

^④捷俊たる奇相、博大の心量。曹溪の淵源を吸盡して性海に湛へ、^⑤太白の拄杖を奪取して扶桑に返る。鼻孔端しうして衝天の氣あり。眼瞳重つて人を射るの光を具す。一花五葉春、日暖かに、嶺月洞風秋夜涼し。

永平二祖

肝膽眉目に彰れ、乾坤寸心に斂む。^⑥洞水の派を湛へて眼睛碧海の如く、吉祥の踵を繼いで頂毛雪林に似たり。寶鑑の萬象を含むが如く、虚空の鉞を掛けざるに同じ。閃電の威光舒又卷。儼として^⑦祝座に居して雷音を震ふ。

寶慶初祖

全相の妙、通身の照、洞山頂上の眼睛を奪ひ得て、吉祥堂奥の心要に透徹す。^⑧塵々三昧の座床に據り、^⑨刹々常説の曲調を暢ぶ。拂柄を拈弄して殃兒孫に及ぶ。雲を打し水を打す好一場の笑。

自贊

聖も也た慕はず、凡も也た疎んせず。^⑩曲糸に身を倚せて未だ箇の言路に涉らす。^⑪龜毛横に握つて能く^⑫卦爻の圖を質す。衣薄うして^⑬洞峰の風骨に徹し、年邁いて^⑭嵩岳の雪巔を侵す。鐵樹を攀ちて紅血を注ぐに堪へたり。^⑮天堂に處して妙娛を受くるに倦し、^⑯朝三千暮八百、喫粥了洗鉢盂。

同

面容醜にして彼の欺瞞を受く。一世貧にして物の人に與ふるなし。拂子毫頭眼睛綻ぶ。佛魔驗み了つて齊隣を絶す。吉祥峰の月孤り耀き、^⑰蘆菊林の花春を累ぬ。

外の二院あり、内院には彌勒菩薩住して説法すと。

^①噴地。噴は鼻を鼓するなり、氣を吐くなり、噴地は「たちまち」の義。

^②優遊。適意自由の貌。

^③捷俊。捷は敏捷の義、俊は秀でたること、千人に勝るを俊といふ。

^④太白。如淨禪師を指す、天童山一名太白といふが故なり。

^⑤永平二祖。孤雲懷奘禪師、京都の人、姓は藤原氏、九條相國爲通の曾孫、幼にして出家、經論を精究すると多年、竟に終局に非ざるを知りて轉錫、適々道元禪師の歸朝に會ひ參問再びして淺草に許され、遂に堂奥に入つて嗣法す、道元禪師の永平寺を開くに當りて大いに力を盡す、建長五年永平に住す、文永四年退隱、弘安三年示寂す。

^⑥洞水の派。洞山悟本大師より出でたる支流の意。

^⑦吉祥。道元禪師を指す、吉祥は永平寺の山號。

^⑧現座。又獅子座ともいふ、佛陀は人中に於て最尊なること猶ほ獅子の百獸中に於て王なるが如し、故に佛陀の坐し玉ふ座を獅子座と云ふ、これより佛教の大徳の座を獅子座、又は現座といふに至れり。現は現現なり、獅子の屬。

^⑨塵々三昧。一微塵一毛端の微塵の中に、能く正定に入りて大法輪を轉するをいふ。

^⑩刹々常説。草木國土説の説法をいふ。

^⑪曲糸。腰掛なり、木を刻み之を屈曲して製したるもの、今は各寺院法要の際のみに用ふ。

^⑫龜毛。龜の毛、有るべからざるに喩ふ、今は拂子のこと。

小佛事

戒善 大姉 起籠

有を離れ無を離れ、戒を以て心地と爲す。男にあらす女にあらす、善を以て莊嚴と爲す。既に有無を離れ男女を越ゆ。其の間に生滅ありや也たなしや。生は大地と共に來り、死は虚空と同じく去る。所以に道ふ、「生とも也た道はず、死とも也た道はず」と。甚としてか慙廢なる。從來生死相干らず、而今什麼の處に向つて去るや。足下雲生す。

戒智大姉 下火

無相の大戒を皮肉と爲し、不思議の智を心肝と爲す。本是れ一如、何ぞ内外に涉らん。六十七年、夕電影を收め、一靈の眞性 老蚌珠

① 卦爻の圖。易の算木及び其の變化の有様、暗に重離六爻、偏正回互の宗旨を指す。

② 洞峰。洞山のこと。

③ 嵩山。嵩山少林寺達磨大師を指す、劍樹刀山も曾て恐れざる作用。

④ 天堂。六道中の天上界のこと。

⑤ 朝三千、暮八百。朝打三千暮打八百の略、朝に三千を打し、夕に八百を打するといふことに、吾人の朝より暮に至る迄、進退動止、無量なるをいふ。

⑥ 薜蘿林。薜蘿、又は薜波といふ、金色花樹、其の花香氣あり、遠く薫す。

⑦ 小佛事。佛教の祭祀法會を一般にいふ、小法事といふも同じ。

⑧ 大姉。在家女人の法名の人に附する文字、深く佛法を信する善女の意なり。

⑨ 起籠。舍内に安置せる籠を茶毘に附せんとして送り出すをいふ。

⑩ 所以に道ふ。碧巖五十五則、「道者と漸源と一家に至つて弔慰す、源、棺を拍つて云く、生か死か、吾云く、生とも也た道はず、死とも也た道はず云々。」

⑪ 足下雲生す。思ふまゝに足の下より雲を生じて、それに乘じて飛行すること。法に於て自由自在を得たる人の境界をいふ。

⑫ 下火。又は下炬に作る、乘炬に同じ、葬式の時導師炬を乘りて亡者を火葬する意を表はすをいふ。相傳ふ、黃檗希運其の母の溺死せる時、自ら炬を乗りて偈を唱へて引導せるに始まること。

⑬ 無相。一切の定相を離れたるをいふ、大涅槃經總王品には、

を合じ。那邊眞常の門に趣向し去らんと要せば、先づ須らく 丙丁童子に相見し了るべし。相見底の道理作麼生。忽地本第二人なし。盡空俱に是れ煙雲の跡。

思達 上座下火

思付絶する時寂滅の本路に達す。根塵脱する處圓通の妙樓を開く。風吹いて花自ら散しく、水涵して月自ら流る。杳々として路を鳥道に借り、緊々として身を裡頭に轉ず。火を以て圓相を打して云く、「者裡是れ好便宜、祖佛曾て回避せず、回避せざる底の事又作麼生。塵塵箇の性火三昧に入る。」

慈元侍者下火

慈門廣大にして開閉時あり。虚空大地是れ本元たり。所以に道ふ、「萬法一に歸す、一何の

五蘊と生住滅男女と之を十相といひ、之を離るゝを無相となすといへり。

① 一如。不異不二をいふ。

② 老蚌。珠を含む、蛤の類。呂氏春秋「月望なれば蚌蛤實、月晦ければ蚌蛤虚なり。」

③ 丙丁童子。火を司る童子といふこと、今は只だ火のことなり。

④ 忽地。地は助字「たちまち」の意。

⑤ 上座。上座の義にして、沙門中の老宿の尊稱なれども、出家して具足戒を受けたるものは皆之を上座と名付く。曹洞宗にては出家得度後入寮したるもの、稱なり。

⑥ 根塵。六根六塵の略、六根とは眼耳鼻舌身意、これ六識の所依となり、認識の基本となるが故に根といふ、六塵は色聲香味觸法の六境をいふ、此

の六境は六根を通じて身に入り淨心を空汚するが故に塵といふ。

⑦ 杳々。深くして廣き貌。

⑧ 火。炬なり、「たいまつ」のこと。

⑨ 塵々云々。此の句安録七下火の部に出づ。

⑩ 所以に道ふ。趙州録中卷(碧巖四十五則にも出づ)、僧趙州に問ふの語なり。

⑪ 罔皮袋。罔は無用の義、皮袋は「かばぶくろ」にして身體を指す。

⑫ 涅槃。梵語又泥洹に作り、滅度、圓寂、寂滅等と譯す、一切の迷妄を脱却して寂靜無爲の安得を得ることないふ、不生不滅の眞證即ち佛の悟りなり、然るに小乘にては三界の煩惱を斷じて有餘の依身を滅し、即ち灰身滅智したる阿羅漢の悟りを涅槃といふ、從つ

處にか歸す」と。某人、夢中に生を受け、夢中に滅に歸す。平生の閑皮袋を脱却して、涅槃の一路門に撞入す。諸佛と臂を把つて行き、列祖と袂を連ねて去る。恁麼に行履の處を見んと要すや。火を以て圓相を打して云く、「未だ這箇の火聚を脱得し了らざるに、須らく優鉢羅華の開敷するを見るべし。」火を擲下して云く、「開敷了や。」

寛海塔主下火

天闊うして涯畔を絶す。海枯れて底を看ること難し。珊瑚、月を撐著して、波浪天を拍つて轟る。生や全く生、花開いて滿樹紅なり。死や全く死、花落ちて樹還つて空し。且く道へ、本分の性命什麼の處にかある。火を以て圓相を打して云く、「只だ這裡にあり。」火を擲下して云く、「涅槃路通す。」

長樂開山圓機和尚下火

凡を超え聖を越ゆ箇中の人、佛に入り魔に入つて疎親を絶す。百骸俱に潰散して、一靈鎮常に眞なり。破爛衫を著けて回途に歩を移し、娘生袴を脱して本路に身を翻す。快便逢ひ難し。丙丁童子半途の餓をなす。火を以て圓相を打して云く、「火中芬馥一莖の蓮。」

祥榮侍者入骨

曉風拂々として春榮を奮ふ。還つて是れ空華地より生ず。買はんと欲するに無門什麼の價ぞ。紅爐百鍊金精を見る。某人、雪を凌ぎ霜を経る歳寒の操を保ち、身を碎き骨を粉にする堅密の行を修す。玄機一撥して曾て此際に来り、大命俄に零ちて已に無生に歸す。無生の一路如何か履踐せん。塵々一齊に金剛定に入る。

偈頌

山居二首

① 吉祥峰頭人間にあらず。四時遷變の看を作すこと莫れ。兀坐寥寥として對待なし。青山深き處白雲閑なり。
② 林下幽閑なり一世の貧、外に向つて疎親を問ふに由なし。清風白月賓と

て此の色身を滅して寂靜安樂の死に至るを、入涅槃又は較涅槃といふ。

① 優鉢羅華。優鉢羅は梵語、又優曇鉢羅、優曇跋羅に作り、略して優曇、又は烏曇といふ、植物の名なり。譯して空起、又は起空といひ、瑞應、祥瑞は其の意譯なり、優鉢羅華は其の木の花なり、此の花が希有の意に用ひらるゝは此の樹が隱花植物にして各人の眼に其の花を示すことなきがためなり、南方の熱地に生ず。

② 塔主。塔司と同じ、諸塔の一切の事務を總監する役の名。

③ 珊瑚。珊瑚は此の句は陵吹毛劍の答語、碧巖百則に見ゆ。

④ 開山。寺院を開創したる僧をいふ、古は釋氏の徒多く人跡無き空山を開いて其處に居す、故に此の名あり、初ら一

は道路を通じ不毛を開くは福田の化なると、一は修道に寂靜の地を擇べるに依る。後世に至りては山を開かざるも、新一寺を創め、一法脈を垂るゝ人を稱して開山といふに至れり。

⑤ 破爛衫。褌衫はすそべりある衣、破はやぶれたる意。此の語は會元十四、石門慧徹章に見ゆ。

⑥ 娘生袴。娘は母の通稱、父母所生の袴といふ程の意。

⑦ 快便。快い便利の意、うまい便宜といふ程のこと。

⑧ 入骨。入塔に同じ、僧家にあつては入骨といふ、俗家にあつては入骨といふ、死者の遺骨を塔中に收むること。

⑨ 拂拂。風の動く貌。

⑩ 玄機。玄々微妙にして、言述を以て測るべからざる機用をいふ。

主と。去就平常人を誑さず。

氷

寒風吹き結ぶ千江の浪、識得す元來水の不流なることを。兩岸相連つて、鐵橋滑かなり。行人顛倒して起つて還た休す。

雪の韻に和す

一夜換へ來つて世界新なり。山河大地埃塵を絶す。無陰陽の地身を轉じて看れば、花は發く少林千古の春。

佛涅槃

瞿曇半夜賊身露る。天曉追ひ來つて、驢も追ひ回し。蹤跡今に至つて覓むるに處なし。黃鶯聲滑かなり。綠楊の枝。

宗規 西堂の關西に歸るを送る

結夏し來り解夏して歸る。結び來り解き去つ

此際。本際といふも同じ。金剛定。金剛喻定、又は金剛三昧ともいふ、菩薩の最後位に最極微妙の煩惱を斷する禪定の名。其の智用の堅利なるを金剛に喩ふ。

吉祥峰頭云々。傳燈二十五に類似の句あり、「天台の德昭國師偈有り、衆にぶして曰く、通玄峰頂是れ人間にあらず、心外無法滿目青山。」

兀坐。兀々坐定の略、兀々は不動の貌、大盤石の如く動かすして坐すること、坐禪の當體をいふ。

寂々。寂しき貌。去就。進退といふも同じ、語默動靜の間をいふ。

鐵橋。舊版に「銀橋」に作る。無陰陽の地。陰陽不到の地ともいふ、情識超越の境なり。

瞿曇。又は喬答摩といふ、地最勝と譯す、大地上即ち地球

上に於て最勝なるの意、釋尊の稱。

道。舊版に報に作る。馴。一乘の車に四頭の馬をつけたるをいふ。

綠楊。楊は枝の垂れざる柳をいふ、「かはやなぎ」と稱するものこれなり。

宗規。號明傳多妙樂寺開山月堂宗規禪師なり、姓は宗氏、本州太宰府の人、法を大應國師昭明に嗣ぐ、延寶傳燈錄に出づ。

西堂。又西庵ともいふ、他山の前住の人、叢林に來る時は之を賓位に置く、賓位は西なるが故に西堂といふ、現時曹洞宗にては住持の化を助けて衆僧を接待する者、即ち結制一會の導師を西堂と稱す、昔時とは名同くも實異なること知るべし。

一規。規は「ぶんまはし」の、

て雲の飛ぶに似たり。道に方所なし家に到つて看よ。西北一天月。一規。

僧を送る

同氣相通す。玄牝の門、毫端隔てす一乾坤、任他あれ萬里回途の歩。足下。雲無うして月痕を吐く。

師。正慶二年癸酉十月十二日辭世の頌に曰く、

教を毀り禪を誘す、八十一年。天崩れ地裂く、火裏の泉に没す。

とにて、圓の義、今一輪といふに同じ。

玄牝の門。老子第六章各神章に出づる語。玄は天なり、牝は地なり。

雲。煩惱に喩ふ。

正慶二年。正慶は本邦北朝第一代光嚴帝の曆號、同二年は西紀一三三三年に當る。

泉。火燄裡の清泉に没入するの義、即ち生死自在の妙用をいふ。

國譯義雲和尚語錄終

時延文丁酉、受菩薩戒の弟子寶慶大檀那野州の太守藤原朝臣知冬發願にて開版す矣。集むる所の鴻福、上四恩に報じ、下

三有を資くるものなり。

助緣奉行比丘 瑞雄維那

刊字奉行比丘 等理藏主

洛陽永興比丘 宏心書字

住持永平兼寶慶法嗣比丘曇希 校勘

①延文丁酉。延文は後光嚴帝の曆號、丁酉は同二年に當る、西紀一三五七年なり。
②菩薩戒。菩薩の受持する戒法の義、三歸、三業攝、十重禁の十六條戒あり。
③檀那。譯して布施といふ、今は布施者の意、寺院の信徒をいふ、檀越檀家と云ふも同じ。
④朝臣。四位以上の人をいふ。
⑤四恩。一に父母の恩、二に國

王の恩、三に三寶の恩、四に衆生の恩なり。
⑥三有。欲、色、無色の三界。又は生死中の三有をいふ。
⑦比丘。梵語苾芻、備芻に作る、出家の男子をいふ、破惡、怖寃、乞士の三義を具す。
⑧藏主。又知識ともいふ、藏經を監理する役名。
⑨校勘。しらべかんがふること。

跋

雲禪師、千古未發の道を、句後聲前に霹靂して、頓に大地を蘇息一番せしめたり。宜なる哉、當時永平中興の道譽を盛んにすること。今日此の録再び世に行はる、國の運なり、人の幸なり。然りと雖も若し巻中に向つて相見せんと欲せば、猶ほ山を隔つることあらん。阿々。

正徳第五龍乙未に次る 種九月旦

城州窮谷小衲愚中拜 撰

①跋。後序に同じ、書籍の終りに其の書の來歴などを書ける文、「おくがき」のこと。
②阿々。笑ふ聲なり。
③正徳第五。正徳は中御門帝中の曆號、同五年は西紀一七一五年に當る。
④種。秋の本字。
⑤撰。撰述なり、辭を屬し、事を記するをいふ。

國譯義雲和尚語錄の拾遺の序

宗眼日月を懸けて豁かに、妙辯江河を傾けて瀉ぐにあらざるよりは、安んぞ能く長夜に晃燭として
 枯焦に津潤たらんや。惟るに、夫れ雲霧祖は幼にして教海を掀翻し、長じて宗燈を挑起し、智光
 炬赫、慧澤、森茫たり。其の祖庭衰晩の日に當つて、奮然として出で、永平を董すに暨んでは、
 實に積闇をして頓に朗かに、乾叢をして忽ち蘇らしむ。謂つべし祖道を回復して、勳を百代
 に策すと。芝靈石、師の影に賛して謂く、
 「洞上の宗風を闢き、寶慶の密意を得たり。逸格の機を振ひ、大法の施を弘む、是れを中興永平の第一世と爲す」と云ふものも、亦敢て誣ひざるなり。然して其の語録先彫存せず。後學焉を憾む。今鷹峰老和尚の序を爲つて重刊するに

國譯義雲和尚語錄拾遺の序

①拾遺。のこれを拾ふこと。
 ②曇祖。祖師に同じ、曇は先の義なり、故に先きに出世したる祖師のこと。
 ③炬赫。明かに盛なる貌。
 ④森茫。廣大なる貌。
 ⑤策。建奏の義。
 ⑥芝靈石の贊。建漸録に出づ、「悉掖の衣を裂き、方袍の義を輕くす、選佛場に登つて心空及第、洞上の宗風を闢き、寶慶の密意を得たり、逸格の機を振ひ、大法の施を弘む、春花を枯木枝頭に棲し、霜蟾を夜明簾外に映す、こゝに草草
 寶殿を現じ、瓊樓曜曜して叢林百廢の紀を起す、其の偉績豐功、是を中興永平の第一祖と爲す、永平堂上雲和尚繪相徒弟宗可贊を請ふ、因つて爲に筆を點す、佛靈禪師と賜ふ、杭の淨慧に住持する、八十有三、靈石叟如芝贊す。靈石は虛堂愚に嗣ぐ、濟下の尊宿。鷹峰老和尚。中山道白のこと。叟且。吉且といふに同じ、叟は善なり。
 ⑦叟。「おきな」と訓す、老人の稱。
 ⑧盥沐。盥は手を洗ふこと、沐

逢ふ、誰か感喜せざらんや。仍つて我が山の室内を搜つて、又其の遺篇を拾ひ輯めて一卷と爲して、同じく梓に壽しうす。是れ時節因縁の現成する所以なり。希冀はくは前録と輝を交へて照臨し、源を同じうして流通せんことを。

惟れ時正徳第五、歳乙未に在るの孟秋、穀旦遠孫嗣祖比丘龍堂、叟即門

① 盪沐焚香九拜、龔んで越前州寶慶、練若の舍光室中に題す。

は髪を洗ふこと。
① 練若。阿練若の略、梵名、阿蘭若、阿蘭擯に作り、遠離處、寂靜處、又は無諍處と譯す、閑靜無諍の義に依りて、或は

法或は處に名け、或は一轉して隱者道士の稱とせらるゝことあるも、普通には比丘の住處たる寺院、精舎の如き閑靜にして諍聲なき處をいふ。

國譯義雲和尚語錄拾遺

永平禪寺語錄

歲朝上堂、青天一を得て以て清く、白日一を得て以て明かに、年一を得て以て稔り、月一を得て以て盈ち、人一を得て以て康樂に、國一を得て以て太平なり。何を以てか驗とせん。雨は一味を含んで潤ひ、土は萬物を吐いて榮ゆ。復た、宏智古佛の歲朝上堂を擧し、師韻を續いで曰く、「三千を擊破して、二儀廓然、春は浩劫を含んで古今在前。蜂は不萌枝上の葉に舞ひ、人は無影樹頭の船に歌ふ。」

國譯義雲和尚語錄拾遺

遠孫寶慶住持比丘龍堂輯

① 住持。一寺の住職のこと、一寺に住して化門を張り佛の慧命を繼ぎ、佛法を久住護持するの意なり。
② 稔。斂なり、粟なり。
③ 驗。穀の熟するを稔といふ、實なり、賑なり。
④ 宏智古佛歲朝上堂語の偈、「歲朝坐禪、萬事自然、心々絶待、佛々現前、清白十分江上雪、謝却滿意釣魚船。」
⑤ 三千、三千の諸法をいふ、三千とは地獄、餓鬼、畜生、修

羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の境界を十界とし、圓融の妙理よりは此の十界互に十界を具すれば、相乘じて百界となる、百界の一々に性、相、體、力、作、因、緣、果、報、本末究竟の十如の義を有すれば、相乘じて千如となる、此の千如を各々衆生國土五陰の別あれば、相乘じて三千世間となる、これにて一切の法を盡すなり。
⑥ 二儀。天、地の二つ。

① 上元上堂、我が家に箇の無盡燈あり、古に亘り今に騰つて増減するにあらず。定光尊の授記を假らず、豈に飲光佛の處分に從はんや。靈山の拈花陶目、少室の得髓安心、黃梅夜半の密傳、石頭住山の斧子、皆是れ一燈下の風流のみ。道ふことを見ずや、「盡十方世界自己の光明裏にあり」と。還つて恁麼の光明を知らんと要すや。良久して云く、「詔風新雪自ら祥を爲す、一片の形霞和して光を發す。古佛誰か言ふ過去すること久しと。然燈半夜に朝陽を挑ぐ。」

② 涅槃會上堂、澹泊にして内搖ぐことなく、廓然として外亂れず。黃閣樓前廉垂れ樞掩ふ。紫羅帳裏氣を斂め、聲を飲む。本明隱さす大虛の月の如く、寂照靈あり空谷の神に似たり。

① 上元。正月十五日なり。
 ② 無盡燈。一人の法を以て百千の人を開導し、展轉して盡きざること一體を以て百燈を燃すに譬へていふ、此は横、今は縱の無盡燈なり。
 ③ 定光尊。梵名に提洹羯佛、錠光佛、又は然燈佛と譯す、足あるを錠といひ、足なきを燈といふ、定に作るは非なり、釋迦佛嘗て童子と稱す、此の佛の出世の時五莖の蓮を買つて佛に奉る、以て未來成佛の授記を得。
 ④ 飲光佛。迦葉の譯名、自らの光にて他の微光を飲蔽する義、飲光と名付くるに二義あり、一は是れ祖先の姓なるが故に、一は彼の身に光明あるが故に名くと。
 ⑤ 黃梅夜半の密傳。大鑑慧能、蕪州黃梅の東禪院に五祖弘忍に謁し、碓房にあると八ヶ月、

「菩提本樹無し、明鏡亦臺にあらす、本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん」の一偈を作つて、半夜五祖の衣法を相傳せるをいふ。
 ⑥ 石頭住山の斧子。景德傳燈原章に曰く、師、石頭をして書を持つて南嶽讓和尚に與へしめて云く、書を達し了れば速かに回れ、吾れに箇の鐵斧子あり、汝に與へて住山せしめん。石頭彼に到る、未だ書を呈せずして乃ち問ふ、諸聖を慕はず、云云、乃ち歸る、師問ふ、書達するや否や、石頭云く、書復た達せず、信も亦通せず、師云く、作麼生、石頭云く、發する時和尚箇の鐵斧子を許す、即今便ち請ふ、師一足を垂る、石頭乃ち禮拜して南嶽に住す。
 ⑦ 詔風。春色之を詔光といふ、又和暢の義。

⑧ 影體前に轉じて白雲青山の父に就き、光頂後に分つて新雪枯木の英を作す。四十九年一字不説、最後の句義誰あつてか論量せん。山を澤に藏し、舟を壑に藏す。釋迦老子何處にか身を藏す。良久して云く、「刹々塵々。」頰に云く、「半夜の鐘聲轉た霜に咽ぶ、倏然として雙樹春榮を變す。白毫輪裏自ら休歇、遺蔭蟬蝶として柳絮馨し。」

⑨ 由西堂の遺書到る上堂、派を汲み源に投す斯道の翁、離亭柳を折つて春風を約す。遺書及を藏して愁腸斷す、閃電光を捲いて碧空に没す。鳥道涯なし飛騰杳々、雲程定めず來去縦々。碧潭底に徹して清く、浮沫更に外なし。大衆卻來底の事は則ち礙へず、向去底の人什麼の處に向つてか去る。還つて委悉すや。花落

① 形霞。形は赤色、今は赤き色の霞。
 ② 古佛誰れか云々。慧忠國師の曰く、「古佛過去すること久し。」
 ③ 朝陽。日の已に出づるを朝陽といふ。
 ④ 澹泊。私慾なく俗氣を離れたるをいふ、無慾の貌。
 ⑤ 黃閣。丞相廳事の門をいふ、蓋し黃を以て門を塗るが故にいふなり、但し宗門にては多く禁庭の事に用ふと知るべし。
 ⑥ 聲を飲む。敢て聲を出さざるをいふ。
 ⑦ 影體前に云々。宏智錄一上堂語に見ゆ。
 ⑧ 山を澤に藏し云々。莊子の太宗師の篇に曰く、「夫れ舟を壑に藏し、山を澤に藏す、之を固しと謂ふ、然して夜半有力の者之を負ひ去るも、而も味

者は知らず。」
 ⑨ 半夜の鐘聲云々。一統志三十三南陽府の山川に云く、「豐山は府城の東三十里に在り、山海經に曰く、山に九鐘有り、霜降れば鳴る」と、今は暗に之を用ふ。
 ⑩ 倏然。にはかなる貌。
 ⑪ 雙樹春榮を變す。雙樹は印度に産する落葉の喬木にして、高さ餘樹を凌ぐが故に、譯して高遠といふ、葉は楕圓形にして尖り、花は淡黄色なり。後分涅槃經に云く、「爾の時に世尊娑羅林中寶牀に寢臥す、其中夜に於て第四禪に入り寂然として聲無し、是に於て時頃あつて便ち般涅槃し玉ふ、大覺世尊入涅槃し已れば、其の娑羅林東西の二雙合して一樹と爲り、南北の二雙合して一樹と爲つて寶牀を垂覆し、如來を蓋ふ、其の時倏然とし

ちて風猶は覆しく、鳥啼いて山更に幽なり。

上堂、拄杖を拈じて云く、「拈じ來れば天を柱へ地を拈へて、黒漫々、放下すれば虎と化し龍と化して、閑話々。一枝の花靈山に綻びて陶目綿々たり、五葉の芳少室に聯つて髓皮密々たり。

本性湛圓、心地の瑞光耀きを發し、六根互用、通身の手眼宜しきに隨ふ。直に得たり眼處に聞聲悟道し、耳處に見色明心することを。所以に道ふ、「石人汝に似たらば巴歌を唱ふることを解せん、汝、石人に似たらば須らく雪曲を和すべし」と。此に於て薦取せば、毘盧揖して下風に立ち、舜若窺つて頂を見さす。畢竟無依獨脱の時如何。」卓拄杖一下して下座す。

由西堂の爲にする上堂、春風飄拂として老梅の榮を奪ひ去り、臘月、依稀として嶺頭の雪

て白に變ず猶ほ白鶴の如し。

① 白毫輪。白毫光輪のこと、白毫光は佛三十二相の一、佛の兩眉の間に白毫あり、清淨柔軟にして右に旋轉し、常に光を放りといふ。

② 嶢嶢。山の高き貌、又深險なる貌、轉じて歲月の高く積み重りたること。

③ 由西堂。肥後大慈寺二世斯道紹由禪師、寒巖義尹の法嗣。

④ 遺書。自ら預め死後に履行すべき事を記したる文書。

⑤ 離亭。鄭谷が詩に云く、「數聲の風雨離亭の曉、君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。」

⑥ 柳を折る。事苑四に云く、「古樂府に折楊柳あり、乃ち行役別離の意なり、故に送別に多く此の事を用ふ、直ちに柳を折るの謂には非ず。」

⑦ 綻々。事に趨る貌。

⑧ 花落ちて云々。玉簫の詩に類似の句あり、云く、「風定んで花猶ほ落ち、鳥啼いて山更に幽なり。」

⑨ 黒漫々。方語、不明の貌、漫漫は廣く遠き貌、即ち眞黒にして何物も見えざることを。

⑩ 閑話々。閑は擾りて靜かならざること、話々は無知の貌なりといひ、又多言にして人の意を亂すといふともあり。

⑪ 本性湛圓……雪曲を和すべし、安智録四、上堂語と大同小異なり。

⑫ 毘盧。毘盧遮那の略、梵語、毘は徧、盧遮那は光明照の義なり、故に光明遍照といふ、華嚴天台の兩宗にては毘盧遮那は釋迦牟尼佛の内證たる靈體佛を特稱すと解すれども、眞言宗にては釋迦彌陀の別佛たる大日如來の梵名とせり。

に和して投す。玄々として去つて去跡なく、密々として來つて來由を絶す。身を曠古空處に横へ、伴を十字街頭に借る。撥轉するや長潮疾風に乘じて雲外に激し、休罷するや怒濤湛海に沈んで衆流を飲む。其れ或は未だ然らずんば、日は自ら晝を照し、月は自ら秋を含む。復た擧す、乾峰和尚云く、「十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭什麼の處にかある。」拄杖を以て劃一劃して云く、「這裏にあり」と。師云く、「然も是の如くなり」と雖も、乾峰老漢既に拄杖に設せらる。永平門下還つて設せられざる底ありや。」拄杖を拈じて卓一下して下座す。

上堂、色聚にあらずして箇の身を受く、上天下地、識知を離れて本智あり、暗を超え明を越ゆ。若し又此の事を論せば、明珠の掌

① 舜若。舜若多の略、梵名空性と譯す、即ち一切空無の性をいふなり、虛空神のこと。

② 臘月。臘は臘臘の義、月明かならざるをいふ。

③ 依稀。彷彿なり、彷彿は見ることに審かならざる貌。

④ 玄々。内外空然寂寞として見難きをいふ。

⑤ 乾峰。越州の乾峰禪師、洞山良价の法嗣、傳燈十七に此の語を載す。

⑥ 十方薄伽梵。一路涅槃門。薄伽梵は梵語、世尊又は佛と譯す、涅槃は梵語、寂滅、又は無爲等と譯し、迷妄を破して證得する不生不滅の眞理をいふ、諸佛の妙法は法界に充滿す、然るに衆生は此の法に迷ふが故に生死に入れど、一度此の法を悟れば不生不滅の涅槃界に入る、故に此の佛の妙法こそ生死涅槃に入る門なり

⑦ 色の意なり。

⑧ 色聚。色蘊のこと、蘊は積集の義、故に聚ともいふ、俱舍には五根五境無表色の十一なり、成實には五根五境四大なり、唯識には五根五境法處所攝色の十一なり、此等色法に種々差別あり、一に集めて色蘊とはいふなり。

⑨ 識知。識は了別の義、根に依りて境を認識する主觀の心をいふ。

⑩ 此の事。此の一大事の略、佛祖の大道を云ひ表はす換言葉。

⑪ 勾芒。木の神なり。

⑫ 東帝。春を司る神なり。

⑬ 與麼。梵語に同じ、是の如くの意にて支那の俗語。

⑭ 當山初祖擧す。永平廣錄四、上堂語に見ゆ。

⑮ 廓然。々わらつとして何もなき貌。

にあるが如し。胡來れば胡現す十萬八千、漢來れば漢現す一念萬年。薦めば則ち恁麼に薦む、朝日の影の如く、退けば則ち恁麼に退く、水月の光に似たり。遮莫あれ嶽高うして四面雪消ゆること緩く、只だ看る雨下つて一庭艸自ら青きことを。勾芒德振ふ萬國の際、東帝改め成す一朶の花。正 與麼の時如何が道中の事を辨せん。良久して云く、「龍枯木に吟じ、雲半天に起る。」

上堂、當山初祖舉す、梁の武帝達磨に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨曰く、「廓然無聖。」帝云く、「朕に對する者は誰ぞ。」磨曰く、「不識。」祖曰く、「達磨の不識を知らんと要すや、廓然無聖不識、汝得皮肉骨髓。人あり更に如何と問はゞ、伊をして三拜して位に依らしめん。」山僧一頰あり、「少林の消息人の知るなし、殘雪風に和して稍髓に入る。胡漢何ぞ問てん古鏡の中、依然として偏正當位にあり。」

暉首座の遺書到る上堂、消息を絶する處、倏忽消息を通ず。擧揚の時、當つて冷淡擧揚するに懶し、月落ちて、明暉潭底に徹し、風行いて虚碧蹤方を没す。半座 巍々として、緇林の大位に倚り、全身 堂々として

如幻の三昧に入る。正與麼の時、還つて入理深談の分ありや。良久して云く、「泥牛水月に吼え、木馬春風に嘶く。」

上堂、山、四運に應じて不動の身を現じ、水、大洋に到つて衆流の響を飲む。事々虚通縁に涉らず、心々絶待佛性を見る。宗本去來の路を絶す。門未だ出入の人を障へず。大衆孰か是れ入門の人、諸人須らく知るべし。諸聖俱に 萬行の門より得入すと雖も、佛々祖々親しく 面授する所は、坐禪是れ正門なり。所以に達磨西來餘行を務めず、經論を講せず、只だ少林にあつて九年面壁するのみ。實に知んぬ坐禪は則ち 正法眼藏涅槃妙心、又是れ傳法救迷情の直路なることを。兄弟須らく光陰を惜んで坐禪辨道すべし。古人云く、「人の車に駕するが如き、車若し行かすんば車を打つが即ち是か、牛を打つが即ち是か。大衆如何が受持せん」と。良久して云く、「如是如是。」

暉首座の爲にする上堂、吉祥雲白うして山林瑞を爲し、洞水派分れて性海濶を收む。東關叢席、座頭唱へ大いに、北陸戲場、合殺の筵寒し、玉兔懷胎して碧空に走る。驪馬追へども及ばず。金鳥卵を抱いて潭底に落

③三拜して位に依る。二祖慧可得髓の因縁。
④暉首座。暉暉首座、徹通義介の法嗣。首座は首衆、又は第一座とも稱して、叢林に於ける大衆の首位に居るなり、六頭首の一、多年遍參の功成りて大事了畢の者を以て任ずる職なり。

①明暉。暉は「ひかり」、又は「かがやく」と訓す、今暉首座の名に因みていふなり。
②半座。一師家が、門下の首位にあるものに自己の法座を分ちて説法化度せるをいふ、往昔釋尊、迦葉のために半座を與へ玉へるに初まる。
③巍々。獨立廣大の貌。
④緇林。緇は黒色をいひ、僧の著する法衣は黒色を以て常となす、所謂墨染なり、故に僧衆を緇林といふなり。
⑤堂々。いかめしく立派な貌、

明かにあらはれたる説。

①如幻三昧。一切諸法の如幻の理に達する三昧なり、又種種如幻の事を現作する三昧なり、百八三昧の隨一なりといふ。
②四運。四時のこと、四氣、四序といふも皆同じ。
③萬行。一切の行法をいふ、六度萬行などといふ是れなり。
④面授。師と弟子と顔々相對して授くるをいふ、經論の釋義又は文書の相傳に對す。
⑤正法眼藏。涅槃妙心。靈山會上釋尊拈華付屬の語を起源とし、歷代佛祖止傳し來れる佛法を稱して正法眼藏涅槃妙心といふに至れり。正とは邪に對するに非ず、正邪超越中正不偏の心體をいふ、法とは其の中正不偏の心體より顯現する萬法をいふ、眼とは此の心體を以て事々物々を照破する

つ、俊鷹戯れども看えず。石女杼を抛つて涙を拭ひ、木人友を失つて肝を迷はす。暉座元已に脚足を收めて、行脚す、還つて生死の關を踏斷すや也た未だしや。那邊に向つて影を避けんと欲すれば影彌露はる。這裡に來つて體を窺はんと擬すれば體還つて虚なり。道ふことを見すや、身を藏する處、没蹤跡、没蹤跡の處身を藏すること莫れ」と。没蹤跡の處は且く致く、如何なるか是れ莫藏身の處、良久して云く、「雪四山を覆ふ、雲は是れ一抹。」

開爐上堂、桃花開く時、靈雲と合頭して、赤心片片、火爐閉づる處筒裏高下なくして行地平平。古に亘り今に騰り、桃紅柳綠、諸人の見處と靈雲と是れ同か是れ別か。若し同と道はゞ、直に如今に至つて更に疑はず。若し別と道はゞ、幾

に、一點も明かならざる所なきをいふ、藏とはこの心體は一切の善法を含藏して餘す所なきをいふ、涅槃とはこの心體の常住不變にして、生滅去來の相を絶するをいふ、妙心とは心體の妙用不可思議なるをいふ。畢竟するに正法眼藏涅槃妙心とは吾人本具の一心の妙徳を形容したるものにして、悟道といひ、證契といふも、この一心を徹見して其の光明を發揮せしむるに過ぎざるなり。

①古人。南嶽懷讓禪師なり、會元三、師の章に見ゆ。
②座頭。座の頭主の意、増一阿含第廿に佛四種の座を説く、謂く、卑座、天座、梵座、佛座なり、次第の如く輪、帝、梵、佛の座なり、就中佛座は是れ四諦の座なり、乃至佛座は四神足の座なり、四神足は所謂

師子吼無畏是れなり。
③合殺。殺は散なり、歌曲の終をいふ。谷響集に云く、「梵樂の儀則、讀經行道す、唱首隊を引く、諸衆屬して和す、其の將に終らんとする曲調を名けて合殺といふなり。」
④玉兔懷胎。月中に形有り、兔の如し、故に月を玉兔といふ。圓悟擊節七十三則に、「兔子は雌無し、中秋の月夜月光を吞んで孕む、口より子を産む。」
⑤金鳥。日は太陽の精、鳥象あり、故に金鳥といふ。

⑥座元。首座のこと、蓋し首座は僧堂座位の元首なるが故なり。
⑦行脚。善友良師を尋ねて諸國を遊行し、山川を跋渉するをいふ。今日の旅行に似たれど、其の目的とする所は、尋所問法道心を修練し、求法證悟するにあり。

回か葉落ちて又枝を抽く。此に於て明得ば、生死の根源便ち坐得斷し、本來の家業正に現在前せん。還つて委悉すや。主山は高うして峻々、案山は翠にして青々たり。

上堂、雨四山に灑いで春色媚ぶ、黃鳥啼き斷ゆ綠楊の枝。爲に憐む歲月の蹉跎し去ること、壯年を復して老衰を改め難し。諸仁者、直に須らく道と仔細に相應すべし、虚しく時光を度るべからず。此の生、強ひて愛惜することなかれ、一息を轉すれば則ち來生なり。況んや又佛祖の正法に相逢ふこと、優曇花の開くより稀なり。須らく、頭然を救ふて辨道すべし。應に知るべし、坐禪の一門は、便ち直指人心見性成佛の西來意なることを。君に勸む尋常蒲團上に坐して、身心脱落せよ。兄弟須らく知るべ

⑧道ふことを見すや。會元五、船子德誠禪師夾山に囑して云く、「汝向後去つて直に須らく身を藏すべし、身を藏する處没蹤跡、没蹤跡の處身を藏すること莫れ。」

⑨没蹤跡。没は絶なり無なり、事物の痕跡なきこと、恰も鳥の空を翔るが如く、魚の水中を行くが如き、無罣礙の行履をいふ。
⑩靈雲。靈雲志勤禪師、長慶大安の法嗣。傳燈十一に云く、「靈雲志勤禪師初め嵩山に在り、桃花に因つて悟道す、頌有り、三十年來劍を尋めるの客、幾回か葉落ち又枝を抽く、桃花を一見してより後、直に如今に至つて更に疑はず。」
⑪赤心片片。赤は空の義にて、少しもいつぱりなき心、即ち「まごころ」といふこと、片々は分明なる貌。

⑫主山、案山。支那にて宮城第宅を創營するに地理を相し、北に當つて一番高きを主山、南に當つて少しく低きを案山といふ、但し今は案山は前山、主山は後山といふ程の意。

⑬峻々。高峻の貌。
⑭蹉跎。時を失ふをいふ。
⑮諸仁者。仁者は道人を尊敬していふ語。
⑯頭然を救ふ。頭に火の燃えつきたるを救ふの義、頭に火の燃えつきたる時は何人も急いで之を消さんとすべし、萬事を抛つて急に精進辨道することに喩ふ。
⑰直指人心見性成佛。見性成佛とは見性即成佛の意にして、自己の心性を徹見し、諸法實相の當體と一致することないふ。達磨大師の語といはるゝ偈に、「不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛」とあり。

し、**外道**。二乗も坐禪を營むことあることを。然りと雖も佛祖の單傳と天地懸隔なり、外道は我々所の執を以ての故に、邪見著味の過あり。二乗は自調自度を以ての故に、涅槃擇滅の病あり。所以に道ふ、「盡く情の所計に屬す」と。六十二見の本、甚としてか二乗外道を折伏して、佛祖の正路に趣向せん。見すや、六祖云く、「一切の善惡都て思量すること莫れ、自然に清淨の心體に入ることを得ん。坦然常寂妙用恒沙なり」と。還つて委悉すや、良久して云く、「利劍死漢を截らす。」
上堂。七佛の宗風今猶ほ未だ息まず。向の上の關候誰か敢て打開せん。快便空しく過し難し。處に隨つて法幢を建つ。有る時は孤峰頂上に艸庵を盤結して、佛を呵し祖を罵る。有る

①身心脱落。脱落は「もぬける」といふ意にて、身心共に此の儘にして、此の身心は我物なりとの執着を離れ、無我の境界に入るをいふ。
②外道。佛教徒以外のものをいふ。釋尊出世當時の六十二種の外道の如きこれなり。
③二乗。聲聞乘、緣覺乘のこと。
④我々所。我は五蘊中に於て妄計して我といふ、我所は即ち五蘊の身等なり。
⑤邪見著味。大論に云く、「外道の禪中に三種の患あり、或は味著或は邪見或は憍慢なり。」又云く、「外道は禪定樂を得、其の心に樂著し味を受す、味とは初めて禪定を得、一心に受樂す、是を味となす。」四教儀集註に云く、「邪見は斷常を計るに由る、因果を信ぜず、復た此の我を計して以て自然に冥初無性と爲す、或は父母

時は荒村里中に身を放つて遊逸し、合水和泥す。之れを上せども虚空界に登らず、之を下せども塵泥の底に沈まず、所以に道ふ、「一毫端に寶王刹を建て、微塵裏に坐して大法輪を轉す」と、甚としてか恣麼なる。橋を過ぐれば村酒美なり、岸を隔て、野花香し。
佛生會上堂。賊既に指點して賊身露る。宇宙尊と稱して還つて自ら瞞す。一杓の熱湯鷄頭に灑ぐ、矜誇淋漓して芳顔を見る。詔陽老、棒頭の迅雷、狂狗土塊を逐ひ、遵布衲、杓中の香水、櫻兒玉盤にあり。且く問ふ、布衲者箇を浴得することは則ち且く致く、什麼物をか把將し來らん。良久して云く、「一事に因らざれば一智に達すること無し。」
結夏上堂、時に應じて號令回避し難し。曠古

十と成り、三世に經歷して六十となり、斷定の二見を加へて六十二となる、而してこれ我を以て根本となす。
⑥六祖。大鑑慧能禪師。次の語壇經宣詔第九に見ゆ、云く、「汝若し心要を知らんと欲せば、但だ一切の善惡都て思慮することなかれ、自然に清淨の心體に入ることを得ん、坦然常寂妙用恒沙なり。」
⑦坦然。廣く平かなる貌。
⑧利劍死漢を截らす。前寶壽の語、傳燈、會元等に出づ。
⑨七佛。過去七佛のこと、前註を見よ。
⑩向上的の關候。關候は關門の鍵のこと、言詮不及、意路不到なる玄妙の奥義といふこと、黃檗の語。
⑪孤峰頂上。孤峰は山の重疊せる處に特に一段と聳ゆる峰をいふ。會元七德山の章に云く、
⑫微塵梵天等より生ずと計す。自調自度。大智度論第六十一に云く、「二乗は持戒を自調となす、修禪を自淨となす、智慧を自度となす、又獨一解脫なり、故に孤調解脫と曰ふ、皆利他なき故に貶して云ふのみ。」
⑬涅槃擇滅の病。俱舍論頌疏一に云く、「諸の冥滅は即ち是れ擇滅なり、佛世尊煩惱を斷じ、無生の法を證するに因つて名けて擇滅となす、擇は慧なり、四聖諦を簡擇するに由るが故に、滅とは涅槃なり、不生を滅と名く。」楞嚴釋要鈔に云く、「擇は是れ智、滅は是れ理、智慧障を簡擇するに由るが故に滅諦の理を説す。」
⑭所以に道ふ。六祖壇經志道章に見ゆ。
⑮六十二見。五蘊の内外に約して即離大小を論するが故に二

の規繩大方を成す。許さず行雲の嶺外に遊ぶことを。珠、金盤に轉じて靈光を發す。百川、駛々として派を同じうし、大海、洋々として天を涵す。三月護生、無生の道を行す。十虛誰をしてか神足の通するを禁せん。箇中の履踐、畢竟如何。上り難きの岸に行くこと莫れ。鳥飛んで空を出でず。

上堂、混沌未分早く此の土あり。三世の諸佛此に於て魔軍を降し正覺を成じ、大千界に於て妙法輪を轉す。諸代の祖師此に於て不陰陽の地を領じ、無影樹頭に坐し、千聖不傳底の向上の一門を開き、諸佛未說底の秘要の大義を演ぶ。所以に道ふ、吾本來茲土、傳法救迷情。傳法救迷情は且く致く、什麼の處か是れ茲土なる。拄杖を以て劃一劃して云く、「此に於て擬議せば十萬八千、如何なるか是れ向上の一門。」拄杖を卓して云く、「箇の杖子跳り上つて、帝釋の鼻孔に、築著す。還つて秘要の大義を聽かんと要すや。」卓拄杖一下して云く、「人に逢ふて舉似すること莫れ。」
上堂、尺璧財にあらず、璞を楚庭に抱いて足を削らる。寸塊賤しからず、沙を金輪に供して臺を得たり。昨日は定法を説く、天、常達、地

り。云く、「一事に因らざれば一智を長じ難し。」
① 駛々。駛は快に同じ、はやくき形容。
② 洋々。流動充滿の貌。
③ 無生の道。世間生滅の相を離れたる大道をいふ、即ち佛道のこと。
④ 十虛。十方虛空の略。
⑤ 三世の諸佛此に於て云々。妙經七、神力品に云く、「諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、此に於て法輪を轉じ、此に於て般若涅槃す。」
⑥ 吾本來茲土。二句達磨の偈中の起承なり。
⑦ 帝釋。梵語、釋提桓因のこと、梵漢兼舉の語、能天主と譯す、須彌山の頂上、初利天の天主にして喜見城に居り、三十三天及び四天王を統領して佛法歸依の人を守護す、阿修羅の軍を征す。又帝釋天、天帝釋

安寧。今朝は不定法を説く、風條を鳴し、雨塊を破る。拄杖を拈じ卓一下して云く、「這裏是れ什麼の處在ぞ。定と説き不定と説く、者の一杖子、半は天を拄へ半は地を拄ふ。既に兩頭の分附あり、一分は地下の釋迦に奉り、一分は天上の彌勒に奉る。且く現前の大衆に什麼を以てか奉獻せん。」良久して云く、「脚下是れ黄金。」
上堂、胡種族の道は、木人劫前の印を把つて泥牛に印し、虚空に印し、石女肘後の符を分つて賊軍を護し、家子を護す。一人化大にして恩澤を開き、萬國、妥帖にして太平を歌ふ。此に於て蹉過せば、聲前に會肯するも尙ほ願鑑の端に滞り、言下、宗に契ふも未だ情識の際を出でず。只だ是れ夢中に夢を説く。記得す、舍利弗、須菩提に問ふ、「夢中に六波

ともいふ。此の語雲門の語、云く、「扇子勃跳して三十三天に上つて、帝釋の鼻孔に築著す、東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆を傾くるに似たり。」
① 築著。打ちあたること。
② 璞を楚庭に抱いて足を削らる。韓非子に云く、「楚人卞和玉を楚の厲王に獻す、王の曰く、石なり、使を遣して一足を削る、武王即位するに及んで、又之を獻す、武王又怒つて復た一足を削る、楚の文王立つに至り、和、璞を抱いて荆山の下に哭す、文王召して謂つて曰く、足を削るもの何ぞ然るや、和云く、足を削ることを怨まず、眞玉を以て玉石となし、忠事を以て漫事と爲すを怨む、是を以て哭すと、文王乃ち工をして石を削らしむるに乃ち眞玉なり、文王嘆

じて云く、哀れなる哉二先君、人の足を削ること易うして石を削ること難き。」
③ 沙を金輪に供して臺を得たり。密家に金輪佛頂あり、故に金輪とは佛をいふ也、又云く、「天輪聖王の意なり。」阿育王經一に曰く、「佛在世の時闍那童子有り、砂を以て模と名けて佛鉢に捧げ内る、佛即ち之を記す、我入涅槃して百年の後、當に波吒利弗多城に生じて阿育王と名くべし、四分轉輪王として正法を信樂せん」と。
④ 昨日は定法を説く云々。會元一に曰く、「世尊因みに外道問ふ、昨日は何の法を説く、曰く、定法を説く、外道曰く、今日は何の法を説く、曰く、不定法外、道曰く、昨日は定法を説く、今日は何ぞ不定法を説く、世尊曰く、昨日は定

羅密を説くと覺の時と、是れ同か是れ別か。須菩提云く、「此の義幽深我れ解すること能はず、此の會に彌勒大士あり、汝往いて彼に問へ」と。雪竇拈じて云く、「當時若し放過せずんば、後に隨つて一箭を與へん。誰をか彌勒と名く、誰か是れ彌勒なる者ぞ」と。便ち氷消瓦解を見ん。大衆、雪竇慙廢の伎倆ありと雖も、未だ免れず他の脚跟後に隨ふことを。永平は然らず、舍利弗の夢中に六波羅密を説くと覺の時と、是れ同か是れ別かと問ふに當つて、須菩提に代つて道はん、「憐れむべし去日顔玉の如し」と。却つて歎く歸時鬢霜に似たることを。須菩提甚としてか道ふ、「此の義幽深我れ解すること能はず、此の會に彌勒大士あり、汝往いて彼に問へ」と。索、短うして深泉に構らす、絲長うして使

今日は不定。」
① 窟達。鹿き貌。
② 風條を鳴らし云々。王充論衡第十七卷是應篇に云く、「太平の世には五日一風、十日一雨、風條を鳴らさず、雨填を壊らす。」
③ 胡種族の道。佛道のことをいふ、支那人は印度等の諸外國を胡と稱す、釋迦、達磨皆印度人なるが故に斯くいふ。
④ 一人。天子を指す。詩の大雅燕民篇に云く、「夙夜解かず、以て一人に事ふ」と。
⑤ 安帖。安は安なり、平なり、帖は靜なり、安帖は猶ほ安靜といはんが如し。
⑥ 聲前。音聲の未だ發せざる以前の意。
⑦ 顯鑑。顯は振り廻り見ること、鑑は自ら省みること、次の情識と同じく思慮分別の意。
⑧ 記得す。舍利弗、須菩提の問答大般若第三百三十、及び同第四百五十一卷に見ゆ。
⑨ 舍利弗。梵名舍利補坦羅、又は舍利弗多羅に作る、舊譯には身子、新譯には鷲鷲子といふ、佛十大弟子の、智慧第一の稱あり、目連と共に六師外道の一人なる沙然に従ひ、各一百の弟子を有せしが、釋尊成道の後、相共に弟子となれり。
⑩ 須菩提。善現、善采、空生、善吉などと譯す、佛十大弟子の一、解空第一と稱せらる、ちと舍衛國の長者なり、其の性慈悲深く、出家して無諍三昧に入り、常に能く善業を修す、故に善業と名くと。
⑪ 六波羅密。波羅密は梵語、度又は到彼岸と譯す、六度といふも同じ、生死の此岸より涅槃の彼岸に到るの意なり。一檀那(布施)、二尸羅(戒)、

① 巨浸に垂る。畢竟作麼生。之を争へば足らず、之を讓れば餘あり。
② 上堂、獅子兒にあらざれば、獅子窟に遊戯すること能はず。虚空者にあらざれば、争か虚空と對談することを得ん。地、平かにして千峰千巒の泰山を繋げ、石、魯にして無等無價の寶玉を含む。古人甚としてか博を磨して鏡と爲さんことを要せりや。是れ古鏡か是れ明鏡か。若し兩鏡相照して、中に於て一點の塵なしと道はゞ、何ぞ措磨の手段を用ひん。諸人試みに斷せよ看ん。若し斷することを得ずんば、坐して三生六十劫を経るも、只だ是れ小伎の野狐精なり。兀坐の時に當つて碧眼の胡僧、汝が掌中に於て身を藏し眼を開くことあらん。慚愧。

三に歸提(忍辱)、四に毘梨耶(精進)、五に禪那(靜慮)、六に般若(智慧)是れなり。
⑦ 雪竇。支那浙江省明州慶元府雪竇山重顯禪師、智門光祚の法嗣。次の擧拈は明覺錄二に見ゆ。
⑧ 一割。割は鹹なり、痛切なる一問をいふ。
⑨ 憐むべし云々。此の二句、杜甫の詩、又十玄談に見ゆ。
⑩ 巨浸。大海のこと。
⑪ 魯。魯鈍なり、愚に同じ。
⑫ 古人。南嶽懷讓禪師を指す、磨磚作鏡の因縁は有名なり、前註既に詳説す、就いて看よ。
⑬ 措磨。措は摩拭なり、すりみかくこと。
⑭ 三生六十劫。俱舍の賢聖品に云く、聲聞の利根は三生に證理得果、鈍根は六十劫、緣覺は四生百劫」と。今は其達の意に用ひたるなり。
⑮ 小伎。伎は「わざ」或は「たくみ」と訓じ、才能の意。
⑯ 野狐精。野狐は狐のこと、精は獸類樹木等の年老いたるものをいふ。狐は壽八百歳、三百歳に至れば漸く變じて人となるといふ、今は人を欺き誑すものに喩ふ。
⑰ 碧眼の胡僧。達磨大師のこと。印度の產たるが故に胡僧といひ、師の眼、紺青の色あり、故に稱して碧眼といふ。
⑱ 端午。月の五日は皆端午と稱して可なり、されど普通は重午日即ち五月五日をいふ。
⑲ 霖霖。共に久雨をいふ。兩三日以上を霖雨といひ、十日以上を霖と稱すと。
⑳ 洽然。洽は霑濡周遍なり、うるほす貌。
㉑ 除差。二字共に病の去るをいふ、癒に同じ。
㉒ 鬼魅。韓詩外傳に云く、「人死

端午上堂、梅雨霖霖たり斯れ一味、甘露
① 洽然として萬叢を生ず。翳病眼裏に除差し
て、空花何ぞ目瞳を瞞せん。外都て鬼魅の怪
なし、家誰か白澤の圖を用ひん。然も是の如
くなりと雖も、一莖の藥草を拈じて生殺を分
ち、七尺の鐵棒を與へて佛魔を驅る。還つて莖
草を費さず、棒力を假らざる底の對治ありや。
良久して云く、「怪を見て怪とせざれば、其の
怪自ら除く。」

上堂、道は虚空の内外なきが若し。遮障なし
と雖も到る人稀なり。裏頭更に彈指を用ひず。
樓閣風推し月扉を啓く。記得す、當山初祖云
く、「昔唐虞、人の法を犯すあれば、僅かに其
の衣服に畫くのみ。然れども人の法を犯すなき
は法を重んずる所以なり。後來五刑の辛法を

して其の陰氣漸然として、獨
り存して依る所なし、故に鬼
といふ」と、魅は説文に「老
精物なり、人面鬼身四足、好
んで人を惑はし、山林異氣の
生ずる所なり」と。

② 白澤の圖。廣博物志の十九異
獸の部に云く、「黃帝内傳に云
く、帝東方に巡狩して海に至
り、恒山に登る、海濱に於て
白澤神獸を得、其の形六角九
目、能く言ひ萬物の情に達
す、帝則ち天下鬼神の事を問
ふ、白澤言く、古より精氣物
となり、游魂變りたる者凡三
萬一千五百二十種なりと、帝
之を聞いて之を圖寫せしめ、
以て天下に示す、帝乃ち辟邪
の文を作し、以て之を祝す。」

③ 一莖の藥草を拈じて生殺を分
つ。文殊一日善財をして藥を
採らしめて云く、是れ藥なる
もの採り持ち來れど、善財大

地を徧觀するに、是れ藥なら
ざるなし、文殊に白して云
く、是れ藥ならざるもの有る
ことなし、文殊曰く、是れ藥
なるもの採り持ち來れ、善財
遂に一枝草を拈じて文殊に度
與す、文殊提起して衆に示し
て云く、此の藥亦能く人を殺
し亦能く人を活すと、類の藥
餌品に出づ。本は佛說奈女耆
城因緣經に見ゆ。

④ 怪を見て云々。性理字義に云
く、「大抵妖は人に由つて興
る、人以て怪となせば怪、以
て怪となさざれば不怪。」
⑤ 彈指。指を以て強くこと、驚
覺彈指及び不淨彈指の二あ
り。

⑥ 當山初祖云く。永平廣錄二に
出づ、晚間上堂の語なり。

⑦ 唐虞。堯舜のこと。
⑧ 五刑。一、墨、其の額に點鑿し
て涅するに墨を以てす、二、

行ふと雖も、而も人の法を犯すもの多し、是れ法を重んぜざる所以なり。

我が儻幸に唐虞に比すべからざるの佛正法に逢ふ。縦ひ衣服に畫かざ
るも、豈に法を犯す者ならんや。若し又之を犯さば佛法を重んぜざるな
り。苦なる哉。復た擧す、南泉、黃檗に問ふ、「什麼の處にか去る。」

衆曰く、「菜を擇び去る。」泉曰く、「什麼を將つてか擇ぶ。」衆、刀子を豎起
す。泉曰く、「只だ客と作ることを解して、主となることを解せず」と。祖、
拈じて云く、「若し大佛、黃檗の刀子を豎起する時に當つて南泉に代つて
道はん、我が王庫の内是の如きの刀なし、大佛門下又且つ如何。劍去つ
て久し、敢て船を刻むこと莫れ」と。師曰く、「甚としてか是の如く道ふや。」

良久して云く、「陶壁の靈梭、雲を起し霧を吐く。」
上堂擧す、曹山に因に僧問ふ、「眞佛出世すや也た否や。」山曰く、「出世
せず。」僧云く、「眞佛を奈せん。」山曰く、「瑠璃瓶子の口。」僧無語。宏智古佛
拈じて曰く、「通身及盡、徹底無依、手を撒して與に來り、隨處に用ふる
ことを得たり。還つて曹山老漢を識るや、戸に當つて影迹なし、徧界曾て
藏さず」と。師拈じて云く、「者の僧煙を見て火を怪しむ、曹山只た身を藏す

則、鼻を截る、三、刑、足を削
る、四、宮、淫刑なり、男子
は勢を刺き、婦人は幽閉す、
五、大辟、死刑なり。
⑨ 南泉。池陽南泉普願禪師、馬
祖道一の法嗣。
⑩ 黃檗。支那福建省福州府福清
縣黃檗山希運禪師、百丈懷海
の法嗣。
⑪ 大佛。道元禪師の自稱なり、
永平寺未だ改名せず、大佛寺
と稱したる時なればなり。
⑫ 劍去つて久し云々。東寺如
會禪師の語、會元三に出づ。
呂氏春秋に云く、「楚人江を涉
り、舟を行ふこと有り、劍を
遺す、遂に其の舟を刻んで曰
く、我れ此に於て劍を墮す、
求むれば必ず之を得んと。」
⑬ 陶壁の靈梭。梭は菱に通じ、
機織の時緯を這る「ひ」の義
とす。晋書列傳に出づる故
事。晋の陶侃、少時雷澤に漁

ことを解して、角を露はすことを覺えず。宏智恐らくは猶ほ多岐に渉る。永平分上又且つ如何。周體清虛縁に渉らす。元來心月自ら孤圓。誰か這裏に臻つて存没を論せん。色聚頭邊、普賢を看る。」

上堂、長劍高く揮つて、龍蛇の陣を驚し、獅子一吼して象虎の橋を伏す。見すや達磨大師、六宗の關鎖を、踢倒して、大いに正路を通じ、五葉の瑞英を抽開して、永く祖林を興す。直に得たり、龍吟じて雲起り、虎嘯いて風隨ふことを。記得す、臨濟云く、「夫れ出家人は見解真正にして、佛を辨じ、魔を辨じ、凡を辨じ、聖を辨じ、眞を辨じ、偽を辨じ、正を辨じ、邪を辨す。佛魔未だ辨せず、邪正未だ辨せずんば一家を出で、一家に入る。喚んで造業の衆生と作す、是れ眞の出家にあらず」と。諸人已に父母の家郷を離れて佛祖の屋裏に入ることを得たり。豈に還つて造業の衆生と成るべけんや。但だ是れ利を貪り名に耽り、生を愛し死を憎み、自を是とし他を非とするに因るのみ。生死事大、無常迅速、古の責之にあり。面前の一團子、虚しく落地せしむること莫れ。甚としてか是の如くなる。良久して曰く、「正理の人は曲げて斷ることなし。」

し、一の織機を綱し得たり、壁上に掛けて後一日雷電あり、化して忽ち龍と爲り去ると。

曹山。支那江西省撫州曹山崇壽院本寂禪師、洞山良价の法嗣。此の語は傳燈、會元共に石霜の章に出づ。宏智拈古又石霜に作る、今恐らくは暗起失談、以て曹山となすならん。手を撒す。撒は「ちらす」、又は「はなつ」と訓す、兩手を放ち開きて何物をも取らず、何處にもか、はらざるをいふ。普賢。梵に三曼跋陀羅、又遍吉と譯す、普は普徧、賢は賢善にして徳の法界に周きを普といひ、至順にして善を調ふるを賢といふ、此の菩薩は阿彌陀佛が因位の無淨念王なりし時の第八王子にて、其の第三子文殊菩薩と共に悲と智、定と慧、行と證との一雙一類

上堂、十方通徹の眼を具する底の人、針眼裏に身を藏すること能はず。四域照輝の光を揚ぐる底の月、未だ免れず深淵水に沈没することを。一出一入、半合半開、龍泉と鏽斧と、鐵を同じうして利鈍懸に殊なり。駝驢と驢驘と、途を一にして遲速大いに別なり。甚としてか是の如くなる。先行不到、末後太過、然も恁麼なりと雖も、我が者裏は然らず。良久して曰く、「行くときは歩を同じうし、臥す時は床を同じうす。」

の代表者なり、十大願を具し常に佛に隨ひて學び、恒に衆生の機に應じて化度す、普賢の像は悲定行を現はすために六牙の白象に乗る。龍蛇の陣。武備志五十五に云く、「東方は青龍の獸なり、龍陣といふ、西方は白虎の獸なり、虎陣といふ、南方は朱雀の獸なり、鳥陣といふ、北方は玄武の獸なり、蛇陣といふ、中を中陣といふ。」六宗。第一有相宗、第二無相宗、第三定慧宗、第四戒行宗、第五無得宗、第六寂靜宗是れなり、會元一達磨大師の章に見ゆ。踢倒。踢は顛倒すること。臨濟。支那直隸省鎮州臨濟院義玄禪師、黃檗希運の法嗣。此の語は臨濟錄に載す。生死事大無常迅速。六祖壇經機緣第七に出づ、永嘉大師の

語。無常は常住ならずして遷流變轉窮りなきをいふ。一出一入云々。明覺錄第二上堂に云く、「龍泉と刀斧と鐵を同じうして利鈍懸かに殊なる、駝驢と驢驘と途を同じうして遲速異あり、酌然酌然、一出一入、半合半開、平展の流、試みに細素を辨ぜよ。」龍泉。劍の名、越絶書に見ゆ。駝驢。駝は荷を負はす馬、驢は「うさぎうま」のこと。驢驘。驢馬、周の穆王の八駿の一。先行不到云々。此の二句は洞山玄中銘の語。法王。佛のこと、佛は法に於て自在なる義よりして法王といふ。陽燄を追ふ。前註に云へる如く、渴鹿陽炎を追ふの義。意氣ある時に云々。白雲端、黃

元是れ十方の佛 十方の佛を識らんと欲せば、
是れ眼中の花にあらず。眼中の花を識らんと欲
せば、是れ十方の佛にあらず。此に於て明め得
ば、過十方の佛にあり。若し明め得ずんば、聲
聞舞を作し、緣覺臨粧せん」と。大衆恁麼の道
理を委悉せんと要すや。水は自ら東に朝し、
星は皆北に拱す。

上堂、炎々たる火景布いて縦横、忽地爲に
警む一葉の風。始めて信す熱寒臻らざる處、蘆
花雪を帯びて玉玲瓏。巴猿月に叫んで露虛碧を
涵し、老鶴陰に舞ふて雛銀籠を出づ。甚としか
道ふ、「上に攀仰なく、下己躬を絶す」と。之を仰
げば彌高し、梵王は佛頂相を窺ひ得ず。之を
聞けば稍遠し。目連終に梵音聲を窮むること
なし。甚としてか是の如くなる。虎窟に入らず

樂六十棒を頌するの兩句、類
の二棒喝に見ゆ。
① 那那。支那安徽省壽州那那山
慧覺禪師、汾陽善昭の法嗣。
此の話は會元十二に出づ。

② 水は自ら東に云々。増集續傳
燈第一劍門に、「分庵主、衆に
示して云く、十五日以前天上
に星あり、皆北に拱ふ、十五日
以後人間水として東に朝せざ
るなし。」又頌古聯珠集三十
三、雲門透法身の話、黃龍慧
南の頌に同じく、此の語あり。

③ 朝。春見るを朝と曰ひ、夏見
るを宗と曰ふ。諸侯天子に見
るの名なり、川の海に奔趨す
るや、其の勢猶ほ諸侯の王に
朝宗するが如きに喩へていふ
なり。

④ 炎々。火光の上るをいふ、熱
なり熾なり。

⑤ 梵王。又梵天ともいふ、梵天

王の略、印度教の神名にし
て、彼にありては天地創造の
神として諸神の主位を占む、
佛教にては佛經保護の神とし
て信仰せらる。止觀に云く、
「若し如来を見ば、身相一切現
ぜざる所なし、明淨鏡の衆の
色像を觀るが如し、一々の相
好、凡聖其の邊を得ず、梵天
も其の頂を見ず、目連も其の
聲を窮めず。」

⑥ 目連。目連連、摩訶目連連、目
連離夜那等といふ、佛十大弟
子の一、神通第一と稱せらる、
大論に云く、「是の時目連心
に念へらく、佛聲の近遠を知
らんと欲す、即時に己が神通
力を以て無量千萬億佛世界に
去つて、息ふて佛の音聲を聞
くに、近づくが如くに異なら
ず、一中略一彼の佛日伽路子
度に問ふ、汝何を以て此に來
るや、目連答へて言く、我れ

んば争か虎子を得ん。大衆佛頂相を看んと要す
や。拂子を竖起して云く、「螺髮右旋、梵音聲
を聞かんと要すや。」拂柄を以て禪床を撃つて云
く、「舌、口を出です。」

上堂、丙丁童子來つて自ら火を求む、盡地
砂を蒸し天際雲を蒸す。須彌の外、鐵圍の内、
宛然として發開す。諸佛及び衆生、練得すや也
た未だしや。調達は中に處して、三禪天を樂
む。其れ或は未だ然らすんば、一柄の扇子、動
容秋を作す。復た擧す、麻谷、扇を搖すの次、
僧便ち問ふ、「風性常住、無處不周、甚とし
てか和尚更に搖扇すや。」谷曰く、「汝只だ風性
常住を知つて無處不周を知らず。」僧云く、「如何
なるか是れ無處不周の道理。」谷乃ち搖扇す。
師曰く、「大衆、還つて搖扇底の道理を體悉せん

佛の聲を尋ねるが故に此に來
至す、彼の佛日連に告ぐ、汝
佛聲を尋ねること無量億劫を
過ぐるも、其の邊際を得るこ
と能はず。此れ亦寶積經にも
出づ。

⑦ 螺髮右旋。大般若經三百八十
一卷に云く、「世尊の毛髮は端
にして皆上に靡き、右に旋り
宛轉として柔潤、紺青にして
金色身を嚴れり、甚だ愛樂す
べし、是れ第十二の相なり。」

⑧ 鐵圍。鐵圍山の略、鹹海を圍
繞して一小世界を區劃する
鐵山なり、鐵より成る、須
彌山を中心として外に七山八
海あり、第八海は即ち鹹海に
て瞻部の四大洲此に在り、此
の鹹海を圍繞するは、即ち鐵
圍山にて之を一小世界とな
す。

⑨ 宛然。分明なる貌。

⑩ 調達。提婆達多のこと、斛飯

王の子、阿難の兄、佛の從弟
なり、出家して神通を學び、
身に三十相を具し、六萬の法
藏を誦するも利養のために三
逆罪を造りて、生れながら地
獄に墮つ、但し其の本地は深
位の菩薩にして法華に於て天
王如来の記願を受く。

⑪ 三禪天。色界の第三禪天な
り、此の天を定生喜樂地と名
けて、深妙の禪定より身心の
快樂を生ず、三界九地の中に
此の地を以て樂受の限とし、
此れより已上の天處に至りて
は唯だ捨受あるのみ、故に此
の地の樂受は三界中の最も第
一にて、聖教中多く之を引き
て比となす。

⑫ 麻谷。麻谷山寶微禪師、馬祖
道一の法嗣、此の話は會元三
に出づ。

⑬ 人橋上を云々。此の二句、善慧
大士の偈、傳燈廿七に出づ。

と要すや。任教あれ千般の巧、但だ憐む一様の風」と。

上堂、虎懸巖に嘯く、風動けば山も也た動く。人橋上を過ぐ、橋流れて水流れず。海大にして塵泥を譲ることなし、甚としてか底に死屍を宿さざる。山高うして塵泥を厭はず、甚としてか頂に雨水を置き難き。心は萬法の根、犀、月を翫んで紋角に成る。境は一心の作、珠、色を承けて更に痕無し。根塵不到の處、還つて人の合頭する有りや。記得す、枯木、衆に示して云く、「佛祖向上の事有ることを知つて、方に説話の分有り」と。諸禪徳、且く道へ、作麼生か是れ佛祖向上の事、箇の人家の兒子有り、六根不具、七識不全、是れ大闡提無佛種性。佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺す。天堂に收不得、地獄接するに門無し。大衆還つて是の人を知るや。良久して云く、「對面 仙陀にあらず、睡多うして寐語饒し。大衆、是の人を看んと要すや。拄杖を拈出して云く、「高く眼を著けよ、這の漢の寐語を聽かんと要すや。卓拄杖一下して云く、「夢中に夢を説く。」

九〇
① 犀月を翫んで云々。前註に詳かなり。
② 珠色を承けて云々。圓覺略疏上に云く、「譬へば清淨の摩尼寶珠五色に映じて方に照ひ、各々現するに、諸の愚痴の者は摩尼珠に實に五色ありと見る。」
③ 枯木。枯木法成禪師、芙蓉道楷の法嗣、此の語は會元十四に見ゆ、上堂語なり。
④ 七識。眼識、鼻識、耳識、舌識、身識、意識、末那識これなり、識は了別の義、根に依りて境を認識する主觀の心ないふ。
⑤ 大闡提。斷善根、又は信不具足と譯す、本來解脱の因を缺きて到底成佛する能はざるもの、又は容易に成佛すること能はざれども、遂には佛の威力に遇ひて成佛する者等の義あり、因果を信ぜず、慚愧な

句子を宣べて、八萬の陀羅尼門を開く。當恁麼の時、塵刹説き、虚空説き、有情説き、無情説き、更に生滅をして説いて、終に間斷無からしむ。擧す、當山初祖云く、「夫れ佛祖向上の參學先づ須らく無情迅速を觀すべし、敢て以て忘ること莫れ。若し無常生滅を忘る、者は、職より常顛倒に由る。三世十方の諸佛諸祖の法は、元凡夫の常顛倒の中に在らず。兄弟須らく知るべし、生々死々、輪廻の迹窮り無く、卓々の參學の機味さす。白雲山に倚り、而して山を以て父と爲す、箇中の功至つて無功なり。明月水に栖み、而して水を以て家と爲す、直下之れ住所住無し、見聞覺知を離れて智有り、生滅の心に非ず。地水火風を離れて身有り、和合の相に非ず。所以に道ふ、「四大の性自ら復す、

く、聖報を信ぜず、現在及び未來世を見ず、善友に親まらず、諸佛所説の教戒に隨はざる者なり。
① 仙陀。仙陀の客の略、伶俐俊發の人をいふ。仙陀は梵語、具には仙陀婆、塩、器、水、馬等の四義あり、涅槃經第九の一の譬喩を説く、昔或國王に一人の伶俐なる臣あり、王、仙陀婆と呼ばば群臣其の何れなりやを解せざれど、彼の臣のみ能く之を解して諫ることなしといふ、それより伶俐の漢に喩ふるなり。
② 五嶽。支那の泰山(東嶽)、衡山(南嶽)、華山(西嶽)、恒山(北嶽)、嵩山(中央)の稱。
③ 須彌自ら芥子に入る。淨名經六不思議品に云く、「若し菩薩是の解脱に住すれば須彌山の高廣を以て芥子中に入るに増減する處なし。」
④ 參學。參禪學道の意。
⑤ 顛倒。四顛倒、苦を樂と計

子の其の母を得るが如し」と。兄弟作麼生か恁麼に會することを得ん。良久して曰く、「霜天月落ちて夜將に半ならず、誰と與にか澄潭影を照して寒き」と。師曰く、「大衆、初祖の開示如何が領會せん。」頌に曰く、「嶺松老いて歳寒の色を帯び、天月零ちて流水の漪に洋ふ。遮莫あれ青山の常に運歩することを。梭を抛つて石女夜兒を生ず。」

解夏上堂、林蟬葉底清吟を作す、聚散時有り嶺上の雲、惜む可し三期殘影の少きことを。蠟人屢誠む精魂に入ること。時光箭よりも疾し、賊過ぎて弓を張ること勿れ。露命風を繋ぎ難し、花落ちて何ぞ朶を望まん。眼花すること莫れ、眼花すること莫れ。

上堂、吉祥峰頂人間にあらず、月に笑ふ一聲何ぞ關を作さん。青葉髻の春樓至の晩、家林の曇葉自ら斑々。瑞鳳娟々常に梧竹に棲み、明珠轉轉稍金盤に轉ず。動著すること莫れ、動著すれば先聖に辜負す。休止すること勿れ、休止すれば我が兒孫を喪す。什麼としてか道ふ、「太虚空に逼塞して赤心常に片々」と。片々底はれ什麼ぞ。荷葉團々鏡よりも團に、菱角尖々錐よりも尖し。還つて委悉すや。良久して曰く、

「水泄れども通せず。」

上堂、紛擾々の中、那伽定に住し、安閑閑の處戲場に遊化す。十字街頭更に知己多く、佛祖屋裏是れ甚の怨讎ぞ。一拶に拶破す野狐の妖怪、大方に漏泄す從上の祖風。道ふことを見すや、「若し一塵を立すれば家國喪亡し、一塵を立せざれば野老安帖なり」と。此に於て見得徹せば動靜の二相了然として生せず。復た擧す、玄沙因に僧問ふ、「承る、和尚言へること有り、盡十方世界是れ一塵の明珠と、學人如何が會得せん。」沙云く、「盡十方世界是れ一塵の明珠、會を用ひて作麼かせん。」沙、來日還つて其の僧に問ふ、「盡十方世界是れ一塵の明珠、汝作麼生か會す。」僧曰く、「盡十方世界是れ一塵の明珠、會を用ひて作麼かせん。」沙云く、「知んぬ、

し、無常を常と計し、無我を我と計し、不淨を淨と計するものは是れなり。

④所以に道ふ。次の二句、石頭參同契の語なり。

④四大。地、水、火、風をいふ、此の四は萬物に周遍して至らざる處なく、一切萬物の大原素なるが故に大といふ。

⑤霜天月落ち云々。此の二句、雪竇南泉牡丹の話を頌するの末句なり、云く、「聞見覺知一に非ず、山河は鏡中に在つて觀され、霜天月落ちて夜將に半ならずとす、誰と共に澄潭影を照して寒き。」碧岩第四十則にあり。

⑥滴。小き水の波紋。

⑦蠟人。事苑六に、「蠟人は風穴衆吼集の下に、蠟當に臘に作るべし、謂く、年臘なり、按ずるに、增輝記に臘は接なり、新故の交接をいふ、俗に臘

の明日を謂つて初歳の爲すなり、蓋し臘盡きて歳來るが故に、釋の式、解制受臘の日を以て之を法歳といふ、是れなり。」

⑧月に笑ふ一聲云々。會元五、「藥山一夜山に登つて經行す、忽ち雲開いて月を見る、大聲一喝するに潯陽の東九十里許りに應ず云々。」

⑨青葉髻。樓至、賢劫出世の二佛なり。大悲分陀利經第四に云く、「沙羅童子當に青葉髻王如來と名くべし。」此亦賢劫出世の如來、拘留孫佛に非ず、然るに義雲禪師は拘留孫佛を以て青葉髻と爲すが如し、何となれば次下の鐘の銘の序に、拘留孫佛所造の石鐘を以て青葉髻と爲すに依りて知る、蓋し賢劫出世始終の二佛を擧げて春といひ晩と謂ふならん。

⑩曇葉。葉は花の心臓なり。

⑪瑞風。格物論に云く、「風は瑞應の鳥、太平の世には現はる、五彩の色あり、梧桐に非ざれば栖まず、竹實に非ざれば食せず。」

⑫娟々。美好の貌。

⑬玉の轉ずる音。

⑭幸負。孤負と同意、そむくこと。

⑮太虚空に云々。圓悟錄十七に出づ。

⑯荷葉團々云々。夾山語、會元五に出づ、夾山、僧問ふ、如何なるが是れ相似の句、師曰く、「荷葉團々鏡よりも團々、菱角尖々錐よりも尖し。」

⑰水泄れども云々。明覺頌古五十九則、類の一に見ゆ、云く、「山の果、入不二門の話を評して云く、居士の高門、謂つべし、壁立萬仞、水泄せども通せず。」

汝^{なんぞ} 黒山鬼窟裏に向つて活計^{くわつけい}を作すことを」と。師、頷^{うなづ}に曰く、「石皓玉^{いしかうぎよく}を含んで本頼^{ほんらい}無し。泥水蓮^{でいすゐれん}を染めて蓮卻^{れんじやく}つて鮮^{あや}かなり。怪^{あやし}むこと莫^なれ黒山鬼窟^{くろさんきく}の計^{けい}、鷄^{けい} 鳴谷^{なりや}に鳴いて日輪^{にちりん}圓^{まる}かなり。」

上堂、佛祖^{ぶつそ}の兒孫^{じそん}、専ら須^{すべ}らく道^{だう}の邪正^{じやせい}、乗の大小^{たいせう}を勘別^{かんべつ}すべし。楚鷄^{そけい}を認^とめて丹鳳^{たんほう}と爲し、燕石^{えんせき}を握^{にぎ}つて玉珍^{ぎよくちん}と爲^なす底^{てい}是^これ多^{おほ}し。一度^{いちど}邪坑^{じやけい}小岐^{せうき}に落在^{らくざい}すれば、歴劫^{りやくこつ}にも出^いで難^{がた}し。西天竺^{さいてんぢく}國^{こく}、正像法^{せいざうぽう}の時^{とき}、猶^{なほ}は解脫^{げだつ}堅固^{けんこ}、禪定堅固^{ぜんぢやうけんこ}、闍諍^{せつじやう}堅固^{けんこ}有り。況^{いは}んや像季^{ざうき}末法^{まつぽう}に於^おてをや。又況^{また}んや邊地^{へんぢ}遠島^{えんとう}に於^おてをや。然^{しか}も是^この如^{ごと}くなりとも雖^{いへど}も、進^まめば到^{いた}ることを得^う、退^{しりぞ}けば彌^{いよ}々^く遠^{とほ}し。佛^{ほとけ}の言^{ことば}く、「上^{じやう}々の因緣^{いんねん}の故^{ゆゑ}に南洲^{なんしゆう}に生^なす」と。既^{すで}に上^{じやう}々の人身^{にんじん}を受け^うけて幸^{さいはひ}に

① 那伽定。那伽、譯して龍といふ、毘婆沙論第三十九卷に云く、「附座の人、龍の蟠結するが如きの故に」といへり。
② 閑々。安靜の貌。
③ 一撈。撈は「おす」と訓す、一問の意。
④ 道ふことを見ずや云々。以下の句、風穴上堂の語なり、會元十一に見ゆ。
⑤ 妥帖。おだやかなること、やさきこと。
⑥ 玄沙。玄沙山宗一禪師、此の語、同師語錄中巻及び傳燈十八、師の章に出づ。正法眼藏一類明珠の卷に引用せり。
⑦ 黒山鬼窟裏の活計。印度の傳説に、大鐵圍山と小鐵圍山との間に陰陽不到の暗黒の處あり、之を黒山といふ、此處は惡鬼棲息すといふ、識情の時窟に喩ふ。
⑧ 鳴谷。孔安國尚書傳に云く、「鳴は明なり、日谷を出でて天下明かなり、故に鳴谷と稱す。」
⑨ 楚鷄を認めて丹鳳となす。伊文子に云く、「楚人山鷄を掘る、路人問ふ、何の鳥ぞ、之を欺いて云く、鳳凰なり。」山海經に云く、「鳳凰は丹穴の山より出づ、故に丹鳳といふ。」
⑩ 燕石を握つて玉珍と爲す。荀子に云く、「宋の愚人燕石を積臺の側^{そば}に得^え、之を藏^{かく}し以て大寶となす、周客聞^きいて之を見んとす、主人齎^もすること七日、端冕^{たんべん}元服^{げんぷく}して以て寶を發^はく、革鞞^{くわく}十重^{じゆう}紕^き巾^{きん}十襲^{じゆう}、客見て俄して口を掩^{おほ}ひ、胡盧^{ころ}して笑つて云く、燕石なり、主人大いに怒つて曰く、盲聾^{もうそう}の言^{こと}と、藏^{かく}すること愈々固^こく、守^{まも}ると愈々謹^こなり。」
⑪ 正像法。釋尊入滅の後遺教の信奉せらるる程度を分ちて正

法時、像法時、末法時となす。正法時とは正しく教行證の三を具足して成佛を得る時期、滅後五百年間なり、像法時とは正法時に似たる時といふ意にて、教行の二のみありて佛果を證得するものなき時期、正法後一千年間、末法時とは遺教のみありて修行し、證得するものなき時期、像法後萬年間なり、經論により異説あれども、大集月藏經、摩訶摩耶經に依るに右の如し。元照の子蘭益經新記に云く、「大集經に五の五百歳を明す、第一の五百歳には解脫堅固、第二の五百には禪定堅固、第三の五百は持戒堅固、第四の五百は多聞堅固、第五の五百は闍諍堅固。」
⑫ 解脫堅固。正法盛んにして解脫を得るもの多きをいふ。
⑬ 禪定堅固。解脫を得るものな

的々の祖道^{そだう}に値^あふ、虚しく光陰^{くわういん}を度^{わた}る可^べからず。中に就^ないて當山^{たうざん}初祖^{しよそ}、遙^{はるか}に萬里^{まんり}の曠海^{くわうかい}に航^{かう}して、親^{おや}しく天童^{てんどう}淨和^{じやうわ}尙^{しやう}に見^まえ、護^ご贖^{じやく}を倒^{たう}卻^{じやく}して身心^{しんしん}脱落^{だつらく}し、佛祖^{ぶつそ}の宗風^{しゆふう}始めて扶桑^{ふさう}國^{こく}に通^{つう}ず、國の運^{うん}なり人の幸^{さいはひ}なり。其の恩山^{おんざん}の如^{ごと}く其の德海^{とくかい}の如^{ごと}し。其の恩德^{おんとく}に酬^{むか}いんと欲^{ほつ}せば、祖師^{そし}の家業^{かぎふ}を漏^{ろう}失^{しつ}す可^べからず。然^{しか}れば則^{すなは}ち當門^{たうもん}の弟子^{でし}、那裏^{なれ}の閒消息^{かんせき}を以^{もつ}て自家^{じか}の古風流^{こふうりゆう}を亂^{みだ}すこと莫^なれ。善星比丘^{ぜんしんひしう}今^{いま}に阿鼻^{あび}底^{てい}に有^あり、忘^{わす}るべからざる者^{もの}か。復^{また}た擧^あげず、僧^{そう}、文殊^{もんじゆ}に問^とふ、「達磨^{だつま}是^これ祖^そなりや也^やた否^{いな}や。」殊^{じゆ}曰^{いは}く、「是^これ祖^そにあらず。」僧^{そう}云^いく、「既^{すで}に祖^そならずんば何^{なん}ぞ西來^{さいらい}を用^{もち}ひん。」殊^{じゆ}曰^{いは}く、「汝^{なんぢ}が祖^そを薦^{せん}せざるが爲^{ため}なり。」僧^{そう}云^いく、「薦^{せん}して後^{のち}如何^{いかん}。」殊^{じゆ}曰^{いは}く、「方^{まさ}に知^しる、是^これ祖^そにあらずることを。」師^し曰^{いは}く、「喚^よんで祖^そと爲^なせば觸

けれども禪定するもの多きをいふ。
⑭ 闍諍堅固。三學を廢して唯だ闍諍を事とし、邪見を増長する時。
⑮ 佛の言はく云々。次の語、南本涅槃經三十四に出づ。
⑯ 護贖。護は慢なり、贖は懺なり、我慢のことをいふ。
⑰ 家業。宗鏡錄三十二に云く、「菩提心を家となし、理の如く修行するを家法となす、乃至勸發し勤修して大乘を斷ぜざるを家業を紹ぐとなす。」
⑱ 善星比丘。佛の太子たりし時の子なりといふ。出家して十部經を讀誦し能く欲界の煩惱を斷じて第四禪定を發得し、之を眞の涅槃といへり。然るに彼れ惡友に近いて所得の解脫を退失せしかば、涅槃の法なしとして因果^{いんぐわ}誤無^{ごむ}の邪見^{じあ}を起^{おこ}し、且つ佛に向つて惡

れ、喚んで祖と爲さざれば背く。觸を超え背を越ゆ、如何が商量せん」と。頰に曰く、「佛々の命根、藤、樹に倚り、人々の心地、月、池に開く。春は過ぎて百鳥來らざる處、風は散れ残梅微笑の枝。」

開爐上堂、火、地坑に起つて燄天方に偏し、金佛曾て經過すること能はざる處、木佛是れを涅槃の道場と爲す。舍利を食する丹霞、人をして媛に屬せしめ、眉鬚を落す院主、自をして殃を招かしむ。既に得失有り、還つて是非に落ちざる底有りや。四大の性、自ら復す、子の其の母を得るが如し。復た擧す、雪峰、衆に示して云く、「世界潤きこと一丈なれば、古鏡潤きこと一丈。」玄沙火爐を指して云く、「火爐潤きこと多少ぞ。」峰云く、「古鏡の潤きの如し」と。師曰く、「這の爐

心を起し、生ながら無間地獄に墮せし人なり。依つて闍提比丘と稱し、又四禪比丘とも稱す、涅槃經三十三に詳かなり。

藤、樹に倚る。會元十三疎山匡仁禪師の章に、「大爲安和尙衆に示して曰く、有句無句は藤の樹に倚るが如しと、師特に彼に到つて便ち問ふ、承りに聞く、和尙道く、有句無句は藤の樹に倚るが如しと、是なりや否や、滬曰く、是、師曰く、忽ち樹倒れ藤枯るゝに遇はゞ、句何の處にか歸すやと云々。」

金佛曾て云々。會元四、趙州上堂に曰く、「金佛爐を渡らす、木佛火を渡らす、泥佛水を渡らす、眞佛内裡に坐す、菩提涅槃眞如佛性盡く是れ貼體の衣服、亦煩惱と名くと。」佛向上の卷に引く。

舍利を食する丹霞。會元五、丹霞天然禪師慧林寺に於て天の大寒に遇ふ、木佛を取り火に焼き向ふ、院主訶して云く、云何ぞ我が木佛を焼き得る、師、杖子を以て灰を撒して曰く、吾れ焼いて舍利を取らんとす、主曰く、木佛何ぞ舍利あらん、師云く、既に舍利なし、更に兩尊を取つて焼かん」と、主、自後眉鬚墮落す。」

紫微宮。後漢書晉が傳の註に云く、「天上に紫微宮あり、是れ上帝の所居なり。」

浩春の瑞。韓愈が曰く、「春雲始めて繁る時雲遂に降る、實に豊年の嘉瑞なり。」

彌勒下生の先兆。彌勒下生經に云く、「時に闍浮提の地東西南北十萬由旬、諸の山河石壁皆自ら消滅し、四大海水各々一方に據る、時に闍浮の地極めて平靜なること鏡の清明なるが如し。」

普賢發機。普賢經に云く、「普賢菩薩は自量無邊、音聲無邊、色像無邊なれども、此の土に來らんと欲して自在神通に入り、身を促めて小ならしむ、闍浮提の人三障重きが故に、智慧力を以て化して白象に乗る、其の象六牙七支、地に柱へ、其の七支の下、七蓮華を生ず、其の象の色鮮白にして白の中の上なるものなり、瓊瓔雪山も比となすを得ず、象の身長四百五十由旬、高さ四百由旬なり。」

長髯。石頭希遷の法嗣、此の公案は會元五に出づ。

槃迦羅眼。祖庭事苑に云く、「槃迦羅此に金剛といひ、又堅固といふ」と。今は金剛王の眼の意にて、眼光明かなるをいふ。

周體鉅置。周禮は全體、通體、

邊の事、如何が商量せん。頰に曰く、「寒風火を吹いて爐中に著く。猛焰天に亘つて遍界紅なり。箇裏縦横古鏡の如し。疑ふこと勿れ星の紫微宮に向ふことを。」

上堂、雪大地に布いて、銀千峰に撃ぐ、枯林、浩春の瑞を呈し、人物一色の功に迷ふ。謂つべし、彌勒下生の先兆、普賢發機の道風と。既に八面玲瓏を得たり、誰か千差の岐路に滯らん。畢竟作麼生。復た擧す、長髯曹深に上つて祖塔を禮し、廻つて石頭に參す。頭問ふ、「何處の處よりか來る。」髯云く、「嶺南より來る。」頭曰く、「嶺南一鋪の功德成就すや也た未だしや。」髯云く、「成就すること久し、但だ點眼を缺くこと在り。」頭曰く、「汝點眼を要すること莫しや。」髯云く、「便ち請ふ。」頭一足を垂る。髯便ち禮拜す。頭曰く、「汝什麼の道理を見てか禮拜するや。」髯云く、「某甲が所見に據らば、洪爐上一點の雪の如し。」師曰く、「者の一段の因縁、如何が透得せん」と。頰に云く、「洪爐一點の雪、臘月水心の蓮、雙手に垂足を承く。槃迦羅眼圓かなり。」

上堂、拄杖を拈じて云く、「拈じ來れば渾身卓立して黒漫々、放下すれば

分外枝を抽でて蒙鬱々。三世の諸佛歴代の祖師、者の杖子の薰力を借つて、出世度生現身說法す。大地の有情、草木國土、者の杖子の處分を承けて、各々自位に在つて現瑞放光す。卓拄杖一下して云く、「慙麼も也た得たり、不慙麼も也た得たり。」又卓一下して云く、「慙麼も也た得ず、不慙麼も也た得ず。諸人の杖子、者の杖子に歸して、用、體處に在り。老僧が杖子、諸人の杖子に混じて體、用處に在り。然も與麼なりと雖も、諸人の杖子撞牆撞壁、許多の力有り。老僧が杖子、周體鈍置、半文に直らず。」

上堂、一蹊平坦にして差路無し、^① 踟躕すれば又還つて半途に滯る。龍門に向つて三級を怪むこと莫れ。^② 月蟾覺えず珊瑚に上ることを。慈航和尚云く、「參禪人は第一に鼻孔端正、次に眼目清明、其の後は宗說俱通を要す」と。誠に夫れ鼻孔若し端しからずんば、争か他の香臭を辨せん、獵犬も何ぞ靈羊の蹄跡を知らん。眼目若し明かならずんば、争か見色明心を得ん。誰か靈雲の桃花を見て悟道することを知らん。若し宗說俱に通せずんば、争か爲人垂手を得ん。拄杖拂子も亦携へ難し。如何なるか是れ鼻孔端正底、鼻と臍と對して、前後に背かす、左右に傾かす、出息入息短からず長からず。如何なるか是れ眼目清明底、目は須らく鼻頭を對見して閉ぢす瞬かす、張らず微ならざるべし。如何なるか是れ宗說俱通底、拂子を以て圓相を打し、又禪床の右邊を撃つて云く、「此の宗本自ら促延に非

① 蹊といふが如し、鈍置は頑固なること、自由無礙ならざるをいふ。

② 踟躕。猶ほ踟躕といはんが如し、行いて進まざる貌。

③ 月蟾覺えず云々。十洲記に、「南海の底に珊瑚あり、月を感じて生ず」とあり、月蟾は月のこと、蟾は「ひきがへる」月中に棲むと稱せらる。

す、一句了然として百億を超ゆ。」

冬至上堂、^① 天關掀動して日月相從ひ、^② 地軸撥旋して海山共に轉ず。陰陽頭尾雪路を理め、長短

交量して線藏さす。文彩未だ彰れざるに文彩還つて顯る。^③ 貴を買ひ賤を賣り、賤を買ひ貴く賣る。

汝が^④ 達磨を斗量し、釋迦を杓白するに一任す、畢竟如何。皓玉瑕あらず琢磨して德を顯す。頌に曰く、「寒風雪に和して松堂を扣き、石女點頭して線芒を舒ぶ。萬類翻身して螻蛄動き、梅唇潛かに笑つて大方香し。」

上堂、禪心地の耕犁、虚空内外無うして雷鳴り電走つて、一點も痕沒きが如し。天地一人の爲に覆載せず、日月一人の爲に發明するに非ず。人

人自ら分有り、忽地須らく薦取すべし。復た擧す、^⑤ 趙州、僧に問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「雪峰より來る。」州云く、「雪峰近日何の言句か有る。」僧云く、「雪峰道く、盡大地是れ沙門の一隻眼、諸人什麼の處に向つてか扇せんと。」州云く、「汝若し嶺を過らば箇の鐵子を附し去らん。」雪

資云く、「者の僧、雪峰より來らず、惜むべし趙州の鐵子」と。師曰く、「三大祖師、出格の商量ありと雖も、永平之を質さんと欲す。雪峰是なることは則ち是、眼裏に翳を生ず。趙州老婆、病に應じて藥を施す。雪

① 天關。天門九重の謂ひ。

② 地軸。括地志に、「地下に四柱あり、廣さ一萬里、三千六百軸あり、互に相牽制して名山大川孔穴相通す」と。

③ 貴を買ひ云々。史記呂不韋が傳に、「賤きを販き貴きを賣る、家千金に累ふ。」説文に、「賤買貴賣を販と曰ふ」と。

④ 達磨を斗量し云々。永平廣錄四に云く、「或は人有り、永平に如何が是れ遷洗身の句と問はゞ、祇だ伊に向つて道はん、釋迦を拘留し達磨を斗量す」と。曾は拈なり、拈は挹なり、拈は酌なり。

⑤ 趙州僧に問ふ云々。會元四禮州章に出づ、近くは明覺錄二

寶、客の貧處を忘れて它の物を施すを妬む。永平分上又且つ如何。遮莫あれ雲の明月に和して白きことを。只だ看る松竹の雪中に青きことを。」

臘八上堂、三祇是れ長遠に非ず、打成一片。刹那孰か言ふ短促と、直に須らく萬年なるべし。大功は賞を待つこと無し、兔徑は象何ぞ遊ばん。

眉間の蛛網何物をか繁ぎ得たる。頂上の鵝巢啄啄同時。山に登らずんば争か猛虎に逢はん、水に入つて便ち能く長人を見る。耐耐なり、明星の瞿曇老の正法眼を瞎卻することを。甚としてか情と非情と釋迦老子と

同參なる、會せんと要すや。拂子を堅起して曰く、「者の毫頭に寶王刹を建つ、若し疑著に涉らば試みに擧す看よ。僧、忠國師に問ふ、「教中只だ有情の作佛を見て、未だ無情の授記を見ず、賢劫の千佛、孰か是れ無情の佛なるや」と。師曰く、「皇太子の未即位の時の如き、但だ一身のみ。即位

の後國土山河盡く皆王に屬す。有情受記作佛の時、無情作佛す、何ぞ無情の別に受記を得る有らんや。宏智古佛拈じて云く、「刹中の佛、處々に身を現じ、佛中の刹、塵々皆爾り」と。又云く、「六國自ら清し紛擾の事、一人獨り恣にす太平の基、永平の門下又且つ如何。一輪自ら轉じて十虛

地出頭して、白毫を舒ぶ。」

斷臂上堂、順行三千、泥龍潭に吟じ、玉馬雪に歩す。逆行八百、烏龜火に向ひ、水老眉を皺む。達磨東土に來らず、面壁九年、二祖西天に往かず得髓三拜。波瀾平地に起り、勢高うして碧天に滔る。擧す、震旦第

二祖昨夜腰を埋むの寒雪に立つて、今朝斷臂の快刀に逢ふ。當に看るべし、庭雪痛切腹を斷つことを。昧旦初祖問ふ、「汝久しく雪中に立つ、當に何事をか求むべき。二祖云く、「願はくは和尚、廣く甘露門を開いて、廣く群品を度せよ。」初祖云く、「諸佛の妙道、曠劫精勤して、行じ難きを苦に行じ、非忍能く忍ぶ、豈に小德小智慢心癡心を以て、眞乘を求めんと欲せんや。徒らに勤苦を勞するのみ」と。爾の時に二祖、潛かに利刀を把つて左

臂を斷ち、初祖の前に置く。初祖、是れ法器なることを知つて便ち入室を許し、名を改めて慧可と曰ふ。可、便ち問ふ、「某甲心未だ安からず、乞ふ、和尚與に安んせよ。」初祖云く、「心を將ち來れ、汝が與に安んせん。」可、思

に引く。

③三大祖師。雪峰、趙州、靈寶の三人を指す。

④大功は賞を待つこと云々。史記韓信傳に「勇略主に震ふる者は身危く、功、天下に蓋ふ者は賞せず。」

⑤兔徑象何ぞ遊ばん。證道歌に云く「大象兔徑に遊ばず、大悟小節に關らんや。」

⑥眉間の蛛網。教修清規沙彌得度の下に云く「大覺世尊金輪の寶位を捨て、子夜に城を踰え、珍御の龍衣を脱して青山に髪を斷つ、鵝巢を頂上に容れ、蛛網を眉間に掛け、寂滅を修して眞常を證し、塵勞を斷じて正覺を成す。」

⑦入水便能見長人。事苑一に云く「唐の則天武后、嵩山の慧安と北宗の神秀とを召し、禁中に入れて供養す、因に澡浴し宮姫を以て給侍す、獨り安

怡然として他なし、武后就じて云く、水に入つて始めて長人有るを知ると。」

⑧耐耐。心中不平なり、又不可忍の義。

⑨忠國師。南陽慧忠國師、大鑑慧能の法嗣、此の語は宏智錄一に引けり。

⑩賢劫の千佛。過去の住劫を莊嚴劫といひ、未來の住劫を星宿劫と名け、現在の住劫を賢劫と名く。現在の住劫二十増減中に千佛の出世あれば、之を稱讚して賢劫といふなり、二十増減の中初の八増減には佛の出世なし、第九の減劫に於て初めて佛あり、拘留孫佛と名く、是れ千佛の第一なり、次に拘那含牟尼佛、次に迦葉佛、次は即ち今の釋迦牟尼佛なり。それより第十増減の減劫に於て彌勒の出世あり、次に第十増減の減劫中に

和尙與に安んせよ。」初祖云く、「心を將ち來れ、汝が與に安んせん。」可、思

惟して云く、「心を免むるに了に不可得。」初祖云く、「汝が爲に安んじ了る。」大衆須らく知るべし、眞の善知識に相逢ふことは、古難し今難し。無上の大乘を禀受することは、實に火裏の水、臘月の蓮なり。縱使ひ初祖海を航して西來すとも、二祖斷臂得髓せずんば、佛法争か今日に傳ふることを得ん。其の恩山の如し、兒孫報謝すべき者か。古人法恩に酬ゆるに、或は國城妻子を捨て、或は頭目髓腦を捨つ。但だ衲僧門下に約せば、手を心頭に著けて辨道し、足を實地に點じて、行李す、是れ則ち報恩の本分なり。還つて委悉せんと要すや。頰に曰く、「雪は嶺頭の松を試み、梅は雪裏の容を娟ぶ、乾坤を定むる底の眼、六門の蹤を坐斷す。」

上堂、賊智君子に勝れて、三更鐵門を過ぐ。忠言還つて舌を截る、好事も無きには如かず。若し又自心の本際に了達せば、何ぞ自を瞞じ他を瞞すること有らん。羅葛松に千尋の外に倚つて丹艱を吐き、明月水に九折の底に印して碧天を涵す。既に頂に徹し底に徹することを得ば、何ぞ更に是に關り非に關らん。諸兄弟、此の日矢の如し、命も亦留め難し。魚少水に迫る、人易んぞ放遊せん。年光自ら極り、新春自ら萌す。白髮

師子佛等の九百九十四佛あり。次に第二増減の増劫に於て樓至出世し、合計一千佛となる。

① 刹中の佛云々。唐華嚴經七菩薩三昧品三に云く、「一々塵中に世界海微塵数の佛刹あり、一々の刹中に世界海微塵数の諸佛あり。」

② 白毫。大般若經第三百八十一卷に云く、「世尊の眉間白毫相あり、右旋して柔軟なり、都羅綿の如し、鮮白光淨にして珂雪等に逾ゆ、是れ三十一の相なり。」

③ 順行三千。永平上堂に、「順行三千、逆行八百」の語あり。

④ 烏龜火に向ふ。臨安府佛日文祖禪師、僧の問に答ふる語、會元十六に出づ。烏龜は黒色の龜のこと。

⑤ 水老。「くらげなり」といふ。

⑥ 眞旦。脂那、脂那、旃旦、神且、眞丹、神丹、眞且等に作る。印度の人の支那を稱して云ふ詞。

⑦ 入室。入室獨參の意、住持室を開いて學人を勸辨する時に、學人の疑を決せんため住持の室に入つて特に所解を呈し、所疑を質さしめ、住持之を勸辨するなり。

⑧ 行李。李は履に通ず、行履に同じ、行は躬行、履は履踐、日用の行持をいふ。

⑨ 六門。六根のこと、六根は認識の門となるが故にいふ。

⑩ 君子。孔子家語一五儀解に、「哀公曰く、何をか君子と謂ふ、孔子曰く、所謂君子は言必ず忠信にして心に怨みず、仁義身に在つて色伐らず、思慮通明にして辭事ならず、行を篤うし道を信じ、自ら強めて息まず、油然として越ゆべしとある如くにして終に及ぶ

の老人誰か復た壯年ならん。此に於て退歩して子細に看よ。白雲自ら長空に靜かなり、何ぞ四山の運轉するを煩はん。還つて相應じて履踐すや。怪むこと莫れ當初腰を没するの雪、今に至つて梅葉自ら娟々。

上堂、學道は大虛の清廓として邊量を得ざるが如く、大地堅牢にして萬物を生長するに似たり。山に上つては須らく嶽頂に到るべし、到らざれば宇宙の寛荒を識らす。海に入つては須らく沙底を究むべし、究めざればか滄溟の深廣を測らん。到と不到と、只だ是れ猛烈と鈍滯とに由る。然れば則ち諸人強ひて浮世の壽命を愛惜すること莫れ、須らく百尺竿頭に一步を進むべし。空花の佛果を求覓すべからず、金屑貴しと雖も眼に落ちて翳と成る。此に於て薦取せば、什麼の難きことか有らん。山に入つて虎兇を畏れざるは獵者の勇、水に入つて蛟龍を避けざるは漁夫の勇、白刃前に臨んで死を見ること生の如くなるは將軍の勇、作麼生か是れ衲僧の勇。良久して曰く、「曉天喫粥、午時喫飯。」

大道方に坦然たり。復た擧す、調達、逆を以て獄に墮す。因に佛、阿難をして傳説せしむるに、「汝地獄に在つて安きや否や。」達云く、「地獄に在りとも、三禪の樂みの如し。」佛又問はしむ、「汝出でんと欲するや否や。」達云く、「佛の入り來らんを待つて、我れ便ち出づべし。」阿難云く、「佛は是れ三界の慈父、豈に地獄に入る分あらんや。」達云く、「我れ豈に獄を出づる分あらんや」と。師、頷に云く、「杲日未だ地に零ちず、落花枝に上り難し。珊瑚月を撐著す、香餌魚龜を引く。」

上堂、清白傳家、窓を啓けば山月朗かに、功業外に施す、岸を隔て、野花香し。然も是の如くなりとも雖も、差ふこと毫釐もすれば天地懸隔。此に於て薦取せば徧界曾て藏さず。擧す、仰山東寺に到る、寺問ふ、「什麼の處より來る。」仰云く、「廣南より來る。」寺曰く、「承り聞く、廣南に鎮海の明珠有り、是なりや否や。」仰云く、「是。」寺曰く、「何の形段をか作す。」仰云く、「白月には隠れ黒月には現す。」寺曰く、「還つて將ち得來るや。」仰云く、「將ち得來る。」寺曰く、「何ぞ老僧に呈示せざる。」仰云く、「昨、瀉山に到つて此の珠を索めらる、直に得たり、言の對すべき無く、理の伸ぶべき無

べからざる者は君子なり。」
③三更鐵門云々。明覺錄一、上堂僧問ふ、承る、師言へるこ
とあり、三更鐵門を過ぐと意
旨如何、師云く、忠言舌を載
ることを避けず、僧禮拜、師
云く、筈に臨んで方に魚の取
り難きを覺ゆ。
④九折。所謂黄河の九曲なり。
⑤杲日。杲は「あきらか」と訓
す。
⑥落花云々。華嚴休靜の語に、
「破鏡重いて照さず、落花枝
に上り難し」とあり。
⑦珊瑚云々。巴陵の語に、「珊瑚
枝々月を撐著す」とあり。
⑧清白傳家。後漢の楊震のこ
と。後漢書楊震傳に云く、「楊
震字は伯起、年五十にして始
めて州郡に仕ふ、性公廉私謁
を受けず、子孫常に蔬食歩行
す、故舊長者或はために産粟
を問かん」と欲す、震肯ぜずし

きことを。」寺曰く、「眞の獅子兒大師子吼す」と。當山初祖拈じて曰く、「這箇の因縁、叢林喚んで呈珠の話と爲す、作麼生か是れ珠。」拂子を以て一圓相を打して云く、「是れ這箇にあらずや。這箇は且く致く、那裏か是れ呈珠の處。」乃ち云く、「飯足り粥足る。諸人日用著力の處、直饒ひ索めて珠の在處に到るも、大佛彌に三十拄杖を與へん。」師曰く、「初祖の提唱是なることは是、猶ほ拂子の力を用ひ拄杖の功を借ること有り。山僧諸人に對して明珠を頷出せんと欲す。」曰く、「圓かなることは皓月の清虚に點するが如し。是れ缺くるに非ず還た餘り有ること無し。」問象、端然として進前する處、元來黃帝珠を遺れず。」

小參

結夏小參、九旬制を守つて自ら安閑、雲白く月明かにして碧巒を照す。圓覺の一輪廣狹に非ず、十方通會す我が伽藍。法を以て界と爲す、何

て曰く、後世をして稱して清
白吏の子孫となさしめんと。
②功業外に施す。前漢傅介子
の故事。西京雜記第三に曰
く、「傅介子年十四、好んで書
を學ぶ、嘗つて鴈を棄て、歎
じて曰く、大丈夫當に功を絕
域に立つべし、何ぞ能く坐し
て散儒を事とせん、後卒に匈
奴の使者を斬り、還つて中郎
に拜し、樓蘭王の首を斬つ
て、義陽侯に封ぜらる。」
③仰山。支那江西省袁州仰山慧
寂禪師、潯山靈祐の法嗣、下
の語は會元三東寺如會の章に
出づ。
④當山初祖云々。此の拈提は永
平廣錄第二卷に出づ。
⑤大佛。大佛寺は永平寺の前
名、道元禪師自ら指す辭。
⑥問象。人の名、無知に喩ふ。
⑦莊子天地篇に云く、「黃帝赤
水の北に遊ぶ、崑崙の丘に登

ぞ涯畔を限らん、是を本分の道場と爲す。道を以て心と爲す、豈に思慮に
渉らんや、是を平等性智と名く。① 摩竭の正令、猶ほ沙を披いて金を揀
ぶが如く、毗耶の默然、只だ 株を守つて兔を待つに似たり。此に於て薦取
せば、陝府の牛を驅つて不陰陽の地を耕種し、② 謝三郎と無影樹頭に船を同
じうす。還つて委悉すや、行いては到る水の窟る處、坐しては看る雲の起
る時。兄弟、恁麼の事を成すること但だ時節因縁に在り。然も恁麼なりと
雖も、是れ促延に非ず。三月安居の儀則は千佛の護念する處なり。古佛の
道を以て今人の心と爲し、今人の心を以て古佛の道に通ず。故に道ふ、
道、無心にして人に合ひ、人、無心にして道に合ふ。箇中の意を識らんと要
せば、一老一不老。道と心と既に相合す、老と不老と如何が甄窮せん。白
雲青山に倚る、父爲り子爲り家業失墜すべからず。松風明月を拂ふ、主爲
り賓爲り相見の威儀須らく親しかるべし。僧、古徳に問ふ、「洞山に三路
の學有り、如何が是れ 鳥道。」徳云く、「應處蹤跡無し、絲毫も身を礙へ
ず。」問ふ、「如何なるか是れ 玄路。」云く、「圓かなること大虚に同じ、缺
くることも無く餘ること無し。」問ふ、「如何なるか是れ 展手。」云く、「當

つて南に望んで還歸す、其の
玄珠を遺れたり、知をして之
を索めしむるに得ず、龍珠を
して之を索めしむるに得ず、
喫語をして之を索めしむるに
得ず、問象をして索めしむ、
問象之を得たり、黃帝曰く、
異なるかな問象乃ち以て之を
得ることや。」
① 端然。端は直なり、正しき
貌。
② 圓覺。圓滿なる如來の覺性を
いふ、如來の覺性は其の徳圓
満周備して一法として攝せざ
るなく、一切法を生起せざる
なし、故にいふなり。
③ 界。界域の義。
④ 摩竭の正令云々。前註に詳な
り、就いて看よ。覺を待つに
似たり迄の句、明覺録二に出
づ。
⑤ 株を守つて兔を待つ。愚人
に喩ふ。韓非子五蠹篇に云く、

機的々に用ひ、的々當機を用ふ。「永平老漢如何が拈頷せん。飛騰路有り、
① 足下絲無く、未だ邊際に著せず、阿誰か敢て窺はん、即ち是れ鳥道。十
方壁落無く、四面門闔を絶す、上未だ攀仰を作さず、下亦已躬を絶す、即
ち是れ玄路。拈じ來るや偏身手眼會て當らず、放下や手眼通身又許多、是
法住法位、世間の相常に然り、即ち是れ展手。還つて三路に涉らざる向上
の一路有りや、之れを揚げば高く、之れを鑽れば堅し。② 珍重。
冬夜小參、塵々 悉く三昧門、何ぞ動何ぞ靜ならん。法法是れ一心性、
境を越え人を越ゆ。外 黒闇女を見ず、家に誰か白澤の圖を用ひん。陰極
つて去留に非ず、③ 月面佛表裏僉照す、陽生じて來論無し、④ 日面佛節に
應じて光を舒ぶ。此に於て薦得せば、日日石牛を驅つて一片不陰陽の地を
耕し、還つて鐵樹を植えて少室五葉の春を看る。進前して歩を移す底作麼
生。⑤ 夜行を許さず。復た云く、「林下の禪衲子先づ須らく鼻孔端直なるべ
し、若し恁麼に端直なることを得ば、終に敢て人に欺誑せられず。方に知
る、直下兩段に非ざることを。」⑥ 所以に道ふ、「二邊に涉らず、更に向背無し。」
又道ふ、「千人萬人の中に在つて一人に向はず一人に背かず。」又道ふ、

「宋人耕者あり、田中に株あり、
兔走り觸れて死す、因つて
拈を釋いて株を守り、復た
兔を得んことを冀ふ云々。」
② 謝三郎。玄沙山師備のこと、
謝氏の三男なるが故にいふ、
少時釣魚を事とす。
③ 行いては到る云々。此の二句、
王維終南別業の詩の頸聯な
り。
④ 故に道ふ云々。此れ洞山上堂
の語なり。
⑤ 古徳。安智禪師なり、此の話
宏智錄第五に出づ、小參語な
り。
⑥ 洞山三路。洞山良价禪師が學
人接待のために設けられたる
手段なり、一に鳥道、二に玄
路、三に展手なり。
⑦ 鳥道。鳥の空中を飛翔する道
にして、吾人の日常の運足轉
歩は鳥の空中を翔つて其の跡
を残さざるが如く、没蹤跡斷

阿羅漢に三毒有りと言くも、如來に二種の語有りと説かず。諸佛と衆生と元來同性、甚と爲てか諸佛と成り甚としてか衆生と作る。觸處曾て人を誑かさず、言端語直の故に諸佛といふ。物を逐ふて自ら誑かし、有に落ち無に落つ、故に衆生といふ。何を以てか同性と爲す。地は是れ堅牢、之れを鑽れば彌々堅し、故に道ふ、「盡大地是れ一箇の解脫門」と。水は自ら濕冷、之を攪けども渾らず、所以に道ふ、「水清うして月現せず」と。火は方に熾熱、鐵を鍊り金を鍛ふ。所以に道ふ、「三世諸佛火焰裏に在つて大法輪を轉す」。風は常に動搖し、之れを胃けて繫かれず、故に云ふ、「風性常住無處不周」と。諸佛は此の性と相應す、諸人曾て此の性を缺かず。玄沙曰く、「釋迦老子我れと同參」と。

消息の往來ならざるべからざることを示す。
④玄路。玄に微妙の道にして有無迷悟等の一切の見を空じて、空寂の處を往來すべきことを示す。
⑤展手。垂手の義にして向上の一路に止らず、更に却來して爲人度生の化、他門に向ふことを示す。
⑥足下無糸。去來自由なるをいふ、足に糸が着いては歩行自由にならざれども、糸なければ束縛なくして行履自由なり、糸は煩惱に喩ふ。
⑦珍重。人の相別るゝに隣んで互に云ふ語にして、俗に「御機嫌よう」と云ふ程のこと、保重自愛せよとの意。
⑧塵々三昧。前註已に出づ、一微塵一毛端の微細の中に、よく正定に入りて大法輪を轉するをいふ。

⑨黑闇女。大涅槃經十二變聖行品に出づる譬喩、美女功德天の妹なり。傳燈十四九峰章に云く、「師云く、功德天を散ぜずして、誰れか黑闇女を嫌はん。」
⑩月面佛。佛の名、此の佛の壽命は一日一夜なりといふ。
⑪日面佛。佛の名、此の佛の壽命は一千八百歳なりといふ。
⑫夜行を許さず。投于大同の語。
⑬所以に道ふ云々。又道ふ云云。是れ洞山真价の示衆語なり、會元十三に見ゆ。
⑭又道ふ云々。長慶慧稜の語、會元七に出づ、原は淨名經六等に見ゆ。
⑮阿羅漢。阿盧漢、阿羅訶に作り、略して羅漢、羅訶といひ、無學、不生、無生、殺賊、又應供と譯す、聲聞四果の極位、生死の境界に生れざるが故に、不生、或は無生といひ、煩惱の賊を滅盡せるが故に殺賊といひ、更に學ぶべき法なきが故に無學といひ、無量の功徳を具して他の供養に應ずるの資格あるが故に應供といふ。
⑯三毒。貪、瞋及び癡なり、吾等不善行爲の根本となり、解脫の善心を障害するを以て毒といふ。
⑰地は是れ云々。楞嚴經四に云く、「汝が身中に堅相を地と爲し、潤濕を水となし、煖觸を火となし、動搖を風となす、此の四塵に因つて乃至五塵覺渾濁す。」
⑱故に道ふ。此の語は譬喩義存の語なり、正法眼藏實相の卷にも出づ。
⑲所以に道ふ。此の二句、譬喩義存の語なり、正法眼藏行佛の卷にも出づ。

諸仁者、今夜六陰已に極り、來朝一陽來復す。閻國の人力を合して推すとも、也た今夜來朝に到るべからず。千鐵牛身を同じうして牽くとも、也た來朝今夜に來るべからず。是に知んぬ、陰も也た實に去らず、陽も也た實に來らず、之を名づけて如來と爲し、亦觀自在と名づく。譬へば滄溟上の客、蘭舟を月渚煙波に泛べて、情に隨つて放曠するが如し。記得す、藥山一夜燈燭無し、衆に示して云く、「我れに一句子有り、特牛の兒を生せんを待つて、便ち汝に向つて道はん。」時に僧有り、出で、「特牛兒を生せり、自らは是れ和尚道はず。」山曰く、「燈を把り來れ。」其の僧便ち衆に歸す。師曰く、「藥山叢祖、心燈已に朗かなり、什麼と爲てか更に燈を索む。者の僧未だ燈を把り來らず、甚と爲てか便ち衆に歸す。明中に暗有り、暗相を以て逢ふこと勿れ。暗中に明有り、明相を以て觀ること勿れ。明暗各々相對す、比するに前後の歩の如し。明を超え暗を越えて如何が歩を運ばん。」良久して云く、「歩々方に迷はず。夜深けぬ、久立珍重。」
除夜小參、萬機休罷、千聖不携、雲谷口に横はり、歸鳥棲に迷ふ。年窮り歲盡きて虚空老倒、月迫り影收つて王兔懷胎、雲中の木馬風に嘶いて去

り、夜半の鳥鷄雪を帯びて飛ぶ。恁麼に究盡する時に當つて、條々無盡無盡條々。年も也た無盡。太歳癸亥に有り、月も也た無盡。端月は甲寅、日も也た無盡。朔旦三朝。還つて委悉すや。宗は促延に非ず、一念萬年、在と不在と無し。十方目前、箇裏の家訓、是れ甚の消息ぞ。佛の言はく、「佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。」時節若し至れば、其の理自ら彰はる。過去は已に去り、未來は未だ至らず、現在に不住なり、箇の什麼の時節をか觀せん。只だ寸陰分陰を惜んで虚しく時光を度らざれ、是れ則ち時節當觀なり。十世古今當念を出でず、今時則ち空劫の本基。然れば則ち面前の一著子、亂りに放捨すること勿れ。一時浪りに蹉過せざれば、十二時中虚しく過さず。一年始終十二月既に過ぎ、臘月小盡二十九、則ち窮る。舊年既に往き、新歲未だ來らず、頭尾未分の時、如何か足を措かん。黒帝に向つて問はんと欲すれば、庭際雪消して跡没し。青皇に向つて問はんと欲すれば、簷外梅笑つて芳を流ふ。是に知んぬ、前後際絶し、古今間無きことを。見すや。古人云く、「十二時中一物に依倚せず」と。然れば則ち物々、依倚せざる底の一物、長を超え短を超え、色に

① 賢へば滄溟上の云々。明覺錄一上堂語なり。唐華嚴經二十に云く、「賢へば船師の此の岸に住せず、彼の岸に住せず、中流に住せざるが如し、而も能く此の岸の衆生を運度して彼の岸に至る、往返休息なきを以ての故に、菩薩摩訶薩亦復た是の如し云々。」

② 藥山。支那湖南省澧州藥山惟嚴禪師、石頭希遷の法嗣、此の話は傳燈十四に出づ。

③ 特牛。特は牛の牡なり、をうしのこと。

④ 明中に暗あり……前後の歩の如し。石頭參同契の語。

⑤ 久立珍重。珍重は挨拶語、俗に「左様なら」の意、大衆直立して聽法したるを以て、今終りに臨み、師家が謝して「ふなり、「御苦勞」といふ程のこと。

⑥ 太歳癸亥に有り。太歳は星の

非す空に非ず、時々依倚せざる底の一時、晝に非ず夜に非ず、陰を超え陽を越ゆ。三世の諸佛此の一時に住して、八萬藏の法を轉じ、諸代の祖師是の一物を將つて、五葉花の春を興す、是れ人天識智の及ぶ所に非ず、況んや又利名榮辱の關る所ならんや。船子和尚、夾山に屬して云く、「城邑聚落到住すること莫れ、深山裏鏝頭邊に於て一箇半箇を接得して、我が道を嗣續せよ」と。是れ則ち名利を山谷の裏に避け、道種を鏝頭邊に植うる底の謂か。僧、雲居に問ふ、「僧家畢竟如何。」居云く、「居山好。」僧禮拜して起つ。居云く、「欄作麼生か會す。」僧云く、「僧家畢竟山に居す、善惡生死逆順の境界に於て、其の心山の如くにして動せず。」居打つこと一棒して云く、「先聖に辜負し、吾が兒孫を喪す。」居又傍僧に問ふ、「汝作麼生か會す。」其の僧云く、「僧家畢竟山に居す、眼に玄黃の色を見ず、耳に絲竹の聲を聞かず。」居又打つこと一棒して云く、「先聖に辜負し、吾が兒孫を喪す」と。拈じて云く、「二僧の見處已に辜負す、永平門下如何が相應して行履せん。居山好居山好、從上の祖宗皆一樣。誰か知る。丁丁たる伐木の聲、青原の斧子深奥に振ふ。夜深けぬ。久立珍重。」

名、この星、癸亥に在るを癸亥の歳といふ。元亨三年、師の世壽七十二なり。

⑦ 端月。正月の異稱。

⑧ 宗は促延云々。以下の四句信心録の語。

⑨ 佛の言く云々。大涅槃經二十八卷の語なり、佛性を見んと欲せば、當に時節形色を觀すべし、眼識佛性の卷に之を引く。

⑩ 過去は已に云々。維摩九阿闍佛品に見ゆ、「我れ如來を觀するに前際以來らず、後際は去らず、今は則ち住せず。」

⑪ 小盡。漱石支談に云く、「月三十に滿つるを大盡となし、一日を少くを小盡となす。」

⑫ 古人。黃檗なり。會元三南泉の章に云く、「南泉、黃檗に問ふ、定慧等覺明見佛性と此の理如何、壁曰く、十二時中一物に依倚せず。」

雲居膺和尚の贊

郁芳たり、鶯嶺拈華の瑞。端的新豐珍曲の吟、
 河を渡つて水波の曾て濕はざることを會し、
 庵を焼いて一法の智襟に措く母し。獨坐年
 を經て天供更に缺くるの日無し。旨を得て以後
 而も通眼窺へども針を容れず。性潔うして碧潭
 の秋月を蔑如し、脚尖にして盡地の黄金を踏斷
 す。知見俱に忘滅して、命脈今に連る。

監寺を謝する偈

胡亂以來是の事に通ず、鹽齋を虧かず幾の餘
 香ぞ。任他あれ夢裏に刀子を語ることを。庫内
 の一靈雪上の霜。

永平禪寺鐘の銘并に序

夫れ永平は佛法東漸の曆號、扶桑創建の祖
 蹤なり。鷲嶽の一枝是に於て密々たり、少林の

① 船子和尙。德誠のこと。藥山
 惟儼の法嗣、秀州華亭に在つ
 て一小舟を泛べ、往來の人を
 渡して縁に臨ひ機に應じて法
 を説く、故に時人呼んで華亭
 の船子和尙といふ。
 ② 夾山。支那湖南省澧州夾山善
 會禪師、船子德誠の法嗣。
 ③ 僧雲居に問ふ云々。類の住山
 門に出づ。
 ④ 丁丁。伐木の聲。
 ⑤ 河を渡つて云々。會元十三雲
 居章に云く、「師洞山に隨つて
 水を渡る次、山問ふ、水深き
 こと多少ぞ、師曰く、不濕、
 山云く、麤人、師云く、請ふ
 師道へ、山云く、不乾。」
 ⑥ 庵を焼いて云々。僧寶傳卷六
 雲居章に曰く、「入室後膺深く
 入り、雲峰の後に留り、庵を
 結んで居す、月に一たび來つ
 て价に謁す、价、其れ未だ情
 を忘ざざれば、道に於て難な

なすと呵す。乃ち其の庵を燒
 き海昏に去つて歐阜に登る。
 ⑦ 獨座年を経て云々。會元十三
 雲居章に云く、「雲居庵を三峰
 に結び、旬を経て堂に赴き
 す、山問ふ、近日何ぞ齋に赴
 かざる、師云く、毎日自ら天
 神あり、食を送る、山云く、
 我れ將に謂へり、汝は是れ箇
 の人と、猶ほ道箇の見解をな
 すあり、汝晚間に來れ、師晚
 に至る、山、膺庵主と召す、
 師應諾す、山云く、不思議不
 思議是れ甚麼ぞ、師庵に回
 り、寂然として宴坐す、天神
 此れより竟に尋ねれども見え
 ず、是の如く三日にして絶
 ゆ。」
 ⑧ 胡亂以來云々。會元三南嶽の
 章に、「師、馬大師化を江西に
 聞くと聞くと、師來に問うて曰
 く、道一來の爲に説法するや
 否や、衆曰く、已に衆のために

五葉今に至つて芬々たり。雜草より以降年序幾ど一百、種莖粗ば列ね
 て樓鐘空乎たり。大家宏道者、林禪人を勸誘して、去歲の孟夏化を發す、
 方に遠近縑素の助力を以て今秋酉月に成る。開山和尚在日、鐘聲許多山
 奥に鳴る、今夏結制の後朝、梵鐘忽爾として嶺頭に響く、先兆の冥符貴ぶ
 べき者か。昔、青葉髻竺土に於て青石の大鐘を造るに、化佛日を遂ふて光
 を放つ。今二禪人吉祥に在つて、青銅の寶器を鑄る、祖宗時と與に護念す
 る者なり。往時と今日と函蓋乾坤、洪韻の劫前劫後に繼ぐことを疑はず。
 銘を作つて曰く、「此の吉祥山、方外の深巖、帝都雲隔り、峻嶺雪寒し。曹
 源の派を受け、洞水の潭を湛ふ。殿堂年舊りて、樓臺未だ安せず。他の化
 功を以て、箇の梵鐘を得たり。槌發するに則有り、聲揚つて窮り無し。千
 佛同風、一音是れ從ひ、前後際斷、緊漫相交はる。欄に臨む月を迎へ、
 林を度る風を送る。債魚業淨く、化蝶夢回る。邪定牀幹り、燒煮鏤
 摧く。寶珠頂に輝き、長鯨胎に吼ゆ。神空谷に諾し、響當來に及ぶ。」
 永平 正法眼藏品目の頌并に序
 正法眼藏、密傳密付、古と今と嫡佛嫡祖。永平元祖、入宋して五

説法す云々、馬師云く、胡亂
 より後三十年、曾て鹽齋を少
 かすと、師之を然りとす。
 ⑨ 銘。銘は「しるす」と訓す、刻
 文なり、禮の檀弓に「銘は明
 雅なり」。釋名第六に曰く、「銘
 は名なり、其の功美を述して
 稱名すべからしむ。」
 ⑩ 東漸。漸は入なり、後漢の明
 帝永平十年に佛方東漸す。
 ⑪ 雜草以除。雜は「かる」と訓
 す、草を翦除すること、創立
 以來と同意。
 ⑫ 棟莖。釋名に、「屋背を莖と曰
 ふ、莖は蒙なり、上に在つて屋
 を覆蒙する也。屋の棟のこと。」
 ⑬ 大家宏道者云々。本山樓鐘の
 銘に曰く、「嘉曆二丁卯歲秋八
 月二十四日鑄造す、鑄匠沙彌
 蓮念、化主巨宏智藏、詔林維
 那、本寺開基第四世雲州の左
 金吾藤原の朝臣通貞、住持第
 五代義雲銘記。」

葉の根帯を穿鑿し、^① 歸朝して能く一天の陰涼と爲る。忒煞だ婆心、和字を以て漢語を柔ぐ。奇妙善巧、人をして文言に累はざらしむ。石の玉を含むが如く、地の山に撃ぐるに似たり。聊か卑語を綴つて其の主旨を述べ。^② 後見此の八字打開せず、妙心源未だ通徹せずんば、一大藏教、少林の妙訣、夢にだも也た未だ見ざることと在らん。^③ 嘉曆四年中夏、^④ 曾孫義雲^⑤ 和南拜書。

第一、現成公案 是れ什麼ぞ。

面前の^① 一著蹉過すること莫れ。空劫の春容此の^② 早梅、^③ 一字公門の内に入り了れば、九牛力を盡して挽けども廻ること無し。

第二、^④ 摩訶般若 ^⑤ 照了綿密。

智燈照徹して^⑥ 陰空を解す、什麼の處の人か

暗室に居せん。徧界藏さす誰か敢て疑はん。摩訶般若波羅密。

第三、佛性 彼に達し此に達す。

威音世界幽遠に非ず、直に今に至つて其の理自ら彰はる。^① 本分の性光疑怪すること莫れ。大千界日 扶桑に出づ。

第四、身心學道 巾斗を飄す。

玄豹霧融じて毛彩變じ、靈犀月朗かにして角紋成る。朝參暮請甚の階級ぞ。曠古の風流缺盈に非ず。

第五、^② 卽心是佛 將錯就錯。

江西直に透波の心を説く、此れより大梅絕峯をトす。三十年來人識らず、香風馥々而今に在り。

第六、^③ 行佛威儀 佛眼も窺ひ難し。

① 鐘聲許多山奥に鳴る。建撫記訂補坤巻に出づ。
② 青葉髻云々。青葉髻は拘留孫佛のこと、法苑珠林百十八に此の因縁詳かなり。
③ 緊漫。緊は急なり、漫は且なり。禪苑清規第六警衆の部に云く、大鐘を打するの法は、先づ輕手鐘に擬すること三下、漫十八聲、緊十八聲、三緊三漫共に一百八聲云々。
④ 債魚業淨云々。宏智錄八鐘銘の中に、化蝶影散じ、債魚業清しとの文あり。法苑珠林百十八に云く、國王あり、闍昵吒と名く、貪虐無道なり、死して大海に生じ、千頭の魚となるに、劍輪廻つて其の首を斬る。續いて又生ず、時に羅漢に逢ひ、鐘聲を聞く間苦痛息む云々。即ち以下の四句は、鐘聲の利益廣大なるをいふなり。
⑤ 化蝶。莊子齊物論に出づ。
⑥ 燒煮。地獄の有様なり。
⑦ 長鯨胎に吼ゆ。物類相感志に云く、海岸に獸有り、蒲牢と曰ふ、性鯨魚を畏る、鯨躍れば鳴く、其の聲鐘の如し。鯨は本聲なし、鯨躍に因つて蒲牢鳴く、故に鯨音と曰ふ。事苑四に、鯨は魚の名、海中に生ず、大なる者は長さ十四里或は一千里。
⑧ 正法眼藏。正法眼藏なる語の語源、并に其の義解及びこれ歷代佛祖相承の佛法そのものを指したるも已に前に註せるが如し。今は永平高祖其の語を取りて以て直ちに書名となせるなり、蓋し著はす所の言言句々、是れ佛法の當體全是なることを表するの深旨歟。現今流布の正法眼藏凡て九十五卷なり、然れどもこの中二十卷は後世諸處に秘在せしむ

のを附加したるもの、其の初に於ては七十五帖なりしなり。七十五帖は大師滅後三年即ち建長七年懷辨禪師の編集に係る。然り而して此の七十五帖は高祖滅後五十餘年、第四世義演禪師の時、永平寺同縁の因の焼失せり、後正和三年義雲禪師入院し、山門諸堂の造立等内外多事の問、灰燼中より撿拾して漸く六十卷を得たり、これ宛も嘉曆四年高祖滅後七十七年なり、世に之を義雲和尚編集の六十卷本と稱す、而して毎卷附するに、著語并に題號の項を以てせらる。以下即ち是れなり。
① 正法眼藏。此れ書名にあらむ、原意なり。
② 入宋。入皇八十五代後堀河帝貞應二年癸未二月二十五日發帆、夏四月明州に到着、師時に二十四歳。
③ 五葉。今は五家の意、臨濟、曹洞、雲門、法眼、演仰なり。
④ 歸朝。本邦安貞二年戊子春、時に師年二十九歳。
⑤ 後見。昆も後の意、後世の子孫といふこと。
⑥ 八字。各人の眉毛をいふ、八字打開は心眼明瞭なるに喩ふ。
⑦ 嘉曆四年。嘉曆は入皇九十五代後醍醐天皇の曆號、四年は己巳の歳、師年七十七、高祖滅後七十七年なり。
⑧ 曾孫。子の子を孫といひ、孫の子を曾孫といふ。道元一箇契一寂圓一義雲。
⑨ 和南。梵語、黎淡、煩淡、後南、伴題に作り、稽首、禮拜、敬禮と譯す。
⑩ 一著。蘭棊の一手といふことにて、一語、一事といふ如し。
⑪ 早梅。冬至以前に開くが故に早梅といふ。
⑫ 一字公門。尺璧雙魚三諺に曰

了々として靈知の了すべき無し。左旋右轉
是れ風流、腳踏點する處蹤跡没し。何ぞ佛邊に
向つて逗留を得ん。

第七、一顆明珠。染ます磷かず。

圓陀々八面玲瓏。轉轉々。朕蹤を留めず。

耐耐なり頭を競つて赤水に馳することを。進前
する罔象皇風に叶ふ。

第八、三時業。雨過ぎて雲。一抹。

現生後報誰か疑著せん。猶ほ夜輪の水中に
浮ぶが若し。照用靈々として。三際を絶す。

爲に憐む松竹の清風を引くことを。

第九、古佛心。撞牆撞壁。

山河大地星辰宿、空劫以前自己の心。一念
僅かに萌せば瑕を鏡に作す。無爲の道人溪林
に在り。

第十、大悟。徧界藏さす。

世尊の密語人の會する無し。迦葉當初覆藏
せず。山嶽連天常に緑を吐く。溪深うして月に
和して流光を轉す。

第十一、坐禪儀。枯木花開く。

兀々々々蒲團に倚る。龍吟じ雲起つて
黒漫々。箇中の消息思議を絶す。刹海三千祇だ
一般。

第十二、法華轉法華。月に照されて月
を翫ぶ。

明月一輪萬象を呑む。卻つて還た萬象。蟾華
を發す。任他あれ。順逆迷悟の類。祇だ是れ
法華轉法華。

頭尾相諍はず。龍蛇互に科に契ふ。虚空と
萬象と。法華法華を轉す。

く、一字公門に入れば、九牛
拽けども出でず。
摩訶般若。大智慧と譯す、般
五に五あり、一には實相(是
れ般若の性)、二には觀照(是
れ般若の因)、三には文字(是
れ般若の因)、四には境界、謂
く、眞俗二諦(是れ般若の境)、
五に眷屬、謂く、一切の福智
(是れ般若の伴)。

照了綿密。異本に照了々綿密
密に作る。

陰空。色受想行識の五蘊、舊
に五陰といふ、今陰空といふ
は偏眞にあらず、所謂照見五
蘊、即ち五枚の般若なり。

威音世界。威音王佛の世界な
り。威音王佛は、乃性古昔無
量無邊不可思議阿僧祇劫以前
の佛なりといふ。

本分の性光。本分は本來に同
じ、吾人從本以來具有眞性の
靈光をいふ。

扶桑。東海水中にありといふ
大なる神木、今は東方の意。

巾斗。巾は斤及び筋に通ず、
斤は斤兩の秤、斗は秤の盤な
り、物衡に餘れば、鍾聲共に
翻却す、これを筋斗を翻すと
いふ、今は翻身自受用の義な
り。

玄豹。黒豹なり。漢の劉向が
列女傳に曰く、陶谷子陶を治
むると三年、名譽興らず家富
むと三倍、其の妻兒を抱いて
泣く、姑怒つて以て不祥とな
す、妻の曰く、妾聞く、南山
に玄豹あり、霧に隠れ七日食
はざることは、以て其の毛衣
を澤し、其の文章を成さんと
欲すればなり。夫家に至つて
は食を擇ばず、故に肥ゆ、肥
ゆるを以て禍を取ると。暮年
にして果して誅せらる。

即心是佛。傳燈七、大梅章に
云く、初め大寂(馬祖の諡號)

に參す、問ふ、如何なるが是
れ佛、寂云く、即心是佛、師
即ち大悟す、唐の貞元中大梅
山鄒縣の南七十里梅子眞が舊
隱に居す云々。

トす。居住すること。
行佛威儀。佛の威儀を行足す
るの意、威とは威あつて畏る
べきをいひ、儀とは儀あつて
象るべきをいふ。

了々。分明の形容。
圓陀々。陀々は美なり、佳麗
美豔の貌。
朕蹤。朕述といふも同じ、朕
は物の生する「きざし」にし
て、蹤は「あと」をいふと訓み、
已に形にあらはれたるをい
ふ、兆候痕跡の義。

三時業。大毘婆沙論百十四の
略に云く、一に順現法受業、
謂く、若し業を此の生に造作
し増長すれば、此の生に異熟
果を受く。二に順次生受業、

謂く、若し業を此の生に造作
し増長すれば、第二生に異熟
果を受く。三に順後次受業、
謂く、若し業を此の生に造作
し増長すれば、第三生に隨ひ
或は第四生に隨ひ、或は復た
此を過ぎて百千劫と雖も異熟
果を受く。

一抹。抹は摩なり、塗抹な
り。
現生後報。現は順現、生は順
次生、後は順後なり、報は上
の三字に連る。
三際。過去を前際、現在を中
際、未來を後際といふ、三世
のこと。

爲に憐む云々。五祖演和尚の
投機頌に、「山前一片の閑田
地、又手して叮嚀に祖翁に問
ふ、幾度か賣り來り還つて自
ら買ふ、ために憐む松竹の清
風を引くことを。」

第十三、海印三昧 波々絶待。

重淵游泳して三昧を得たり。龜印印波して徹底清し。萬派淇湖増減没く、前波未だ到らざるに後波盟ふ。

第十四、空華 死水裏の龍吟

虚空樹上瑞華發く。恁地あれ風を起して飛んで亂零。語ること莫れ眼中金屑を著くと。少林の五葉今に至つて靈なり。

第十五、光明 明暗不倒

明々たる照用敢て誰か藏さん。日は自ら熱く月は自ら涼し。古に亘り今に輝いて疑怪を絶す。山門佛殿及び僧堂。

第十六、行持 超佛越祖

順轉未だ休せざるに逆行發る。道規矩に先んじて時と與に新なり。覺雄祈願す煙村の外。

十地三賢比隣に非ず。

第十八、觀音 六耳謀を同じうせず。

偏身斯れ手臂。通身是れ眼睛。更に物の著すべき無し。何ぞ更に精明を待たん。天堂と寶刹とを趨倒して、劍樹刀山是れ都城。到る處知を亡する處、入門名を犯さず。

第十九、古鏡 呼ぶことは易く、遣

ることは難し。觀面孤圓點埃を絶す。任他あれ胡漢の形を現じ來ることを。雪峰曾て獼猴の春を背して、箇々の眼睛此に於て開く。

第二十、有時 昨日は定にして、今日

は不定。時節因縁誰か愛憎せん、春松秋菊任騰々。高く巍々たる嶺頂の月を翫び、還つて深々たる

出づ、本卷に引く。

⑦ 撞牆撞壁。撞は「うつ」又は「あたる」と訓む、撞壁一々が古佛心なる意。

⑧ 山河大地。宗門統要第七瀉山章に曰く、「師、仰山に問ふ、作麼生か是れ妙淨明心、仰山云く、山河大地日月星辰。」

⑨ 無爲の道人。證道歌に所謂、絶學無爲の閑道人なり。

⑩ 大悟。蓋し密語の寫誤ならん。

⑪ 密語。密は秘密の密にあらす、親密の密、説く所諸法の實相宇宙の眞理と一體無二、又説くものと説かるるものと能所なきをいふ。會元十三、雲居章に出づ。卷中又此の語あり。

⑫ 枯木花開く。傳燈十五、石霜章に、「師、石霜山に止る、二十年の間學業長坐不臥、屹として栴檀の如きあり、天下之

海印三昧といふ。

⑬ 亂零。零は落なり。

⑭ 光明。雲門上堂衆に示して云く、人々盡く光明の在るあり、看る時見えず暗昏々、作麼生か是れ諸人の光明。衆無對、自ら代つて云く、僧堂佛殿厨庫三門。」

⑮ 行持。行履操持の義、卷首に云く、「諸佛諸祖の行持に依りて我等が行持現成し、我等が大道通達するなり。我等が行持に依りて諸佛の行持現成し、諸佛の大道通達するなり。」

⑯ 十地三賢。十住十行十回向の三十位、之を三賢といひ、十地之を十聖といふ。

⑰ 觀音。新には觀自在といひ、舊には義譯して觀世音といふ。自在は義勝れり、諸法實相に觀達し、所度之機和を觀察するに、俱に自在無礙の意

を枯木衆と謂ふ。「龍吟の卷に引けり。

⑱ 兀々。不動の貌。

⑲ 寂々。寂寥の貌。

⑳ 黑漫々。不明の貌、漫々は廣く遠き貌、眞黑にして何物も見えざること。

㉑ 蟾華。月の異名。

㉒ 順逆迷悟の類。順は法華會上に於ける三周得悟の者、逆は五千の退席及び未熟の者を指す。

㉓ 海印三昧。又海印定ともいふ、三昧の名。海は大海の意、印は「うつる」の義、三昧は正定にして坐禪のこと。大海の水には月來れば月を映じ、百川流れ來つて厭はず、更に憎愛取舍の念なし、之を佛の境界に喩へ、佛は其の機類に應じ、宛轉自在些の聖靈なきをいふ、恰も兀々不動の正定に入れる時の貌なれば、

なり、世音は義疾し、化他に局るが故に。

① 到る處知を亡する云々。楞嚴六觀音に云く、「初め門中に於て流れを入へして所を亡す。」知は妄知、亡は無に同じ。

② 呼ぶことは易く云々。碧巖七十五則烏臼棒の頌、呼ぶことは易く、遣ることは難し、互換の機鋒子細に看よ云々。」

③ 雪峰曾て云々。會元七、雪峰の章に曰く、「普請の次、路に一獼猴に逢ふ、師云く、人々一面の古鏡あり、遣箇の獼猴も亦一面の古鏡あり、三聖云く、曠劫無名何としては影はして古鏡となす、師曰く、暇生ぜり、聖云く、遣の老漢甚麼の死念にか著けん、話頭も也た識らず、師曰く、老僧住持事繁し。」

④ 騰々。任運自適の貌。

⑤ 巍々。雲の集る貌。

黒漫々明歴々、睡裏の諸夢は睡裏に成る。胡蝶道遙齊物の事。王庫の刀子は何の形ぞ。

第二十八、四攝法。錦上に花を添ふ。

大施門啓いて九天富む。口愛憎を絶す是れ法輪。利物。同風千里の外。無根樹上四時の春。

第二十九、恚廢。直趣。

我れも是の如く汝も亦是の如し。此土西天雲と水と。鷲嶺の月光少林の葉。恚廢の人恚廢の事を作す。

第三十、看經。遮眼。

出息會て外境に隨はず。卻つて知る入息の蘊に居せざることを。從他あれ月に對し花を弄する底。盧老經を聞いて世恩を弃つ。

第三十一、諸惡莫作。風吹けども動せず。

有るを見て、心中に貪著す。

王子後時此の刀を執持して逃れて他國に至る。是に於て貧人後に他家に寄臥止宿す。即ち夢中に寐語して刀々といふ。傍之を開き收へて王の時に至る。時に王問うて云く、汝刀と言ふもの何處に得たるや、是の具に上の事を以て王に答ふ。會て眼に見ると雖も乃至取て手を以て抵觸せず、況んや當時取るをや。王復た問うて言く、卿が刀を見る時相貌如何が類す。答へて曰く、大王、臣が見る所の者は投羊の角の如し。王是を聞き已つて、欣然として笑つて曰く、汝今より意の所至に隨つて愛怖を生ずること莫れ、我が庫藏の中是の如きの刀なり。(大意)

四十三攝事品に出づ。錦上に花を添ふ。鄒十三娘の語、禪林類聚の尼女門に見ゆ。又佛果の云く、法輪を建て宗旨を立す、錦上に花を添ふ。

九天。八方と中央となりといひ、又物の數を萬といふが如く必ず實に九あるに非ず、數一に起つて九に成る、九は陽數の故にいふなりと。

同風。蜜蜂云く、習子は千里同風。

恚廢。宋代の俗語にて「斯の如し」等の意。會元十三雲居章に出づ。

直趣。直趣菩提の義。一切の方便假説の修行に依らず、頓に佛果を成ずること。發心の當體直に成菩提の當體なることにも用ふ。李道揚悟道の偈に「直に無上菩提に趣き、一切の是非禁むこと勿れ」とあり。

貪愛瞋癡定相に非ず、

土塊握つて是れ黄金

と作す。水中誰か更に炎火を著けん、汝に籍つて容れず。官の針。

第三十二、三界唯

心。竹木椅子。

禪界從來欲界無し、華藏の塵刹一心地。

計較を將つて更に擬議すること莫れ。四海八埏帝里に歸す。

第三十三、道得

り。我れも是の如く云々。我は當に善と作るべし。會元三南嶽の章に云く、六祖云く、祇此の不淨汚諸佛の護念する所、汝も既に是の如し、吾れも亦是の如し。

出息會て云々。卷中に云く、「第二十七祖東印度般若多羅尊者、因に東印度國王、尊者を請じて齋するの次、國王乃ち問ふ、諸人盡く經を輕す、唯だ尊者甚として轉ぜざる。祖云く、曾道出息業緣に隨はず、入息蘊界に居せず、常に如是經を轉すること百千萬億卷、但だ一卷兩卷に非ず。」

盧老經を聞いて世恩を棄つ。盧は六祖大師の氏なり、壇經行由第一に謂く、慧能此の身不幸にして父又早く亡す、老母孤遺南海に移り來つて艱辛

貧乏、市に柴を賣る。時に一客有り柴を買ふ、乃ち慧能錢を得、門外に出づるに一客の誦經するを見る、應無所住而生其心の文に至り、慧能經語を聞いて心即ち開悟す、乃至母を安置し畢つて、便ち辭し違ふ。

諸惡莫作。卷中に引くは、增一阿含第一、涅槃經十四等舊經の文なり。

土塊握つて云々。大涅槃經十五に云く、是の如く大涅槃を修行する者は土を觀じて金と作し、金を觀じて土となし、地に水相を作し、水に地相を作し、水に火相をなし、火に水相を作し、地に風相を作し、乃至意に隨つて成就して虛妄あることなし。

官の針。鴻山、仰山に問ふ、石火及ぶ莫し電光通するなし、從上の諸聖什麼を將てか

人のためにす、仰山云く、官に針を容れず、私に車馬を通す。

禪界從來云々。傳燈七、鶴湖大義禪師、唐の憲宗嘗て詔して入内せしむ、論議するに一法師有り、問ふ、欲界に禪なし禪は色界に居す、此の土何に懸つてか。禪を立す。師云く、法師只だ欲界に禪なきことを知りて、禪界に欲なきことを知らず云々。

華藏の塵刹。華嚴盧舍那品に華藏世界を説く、又離世間品に重々無盡の世界を明す。今は華嚴世界塵刹の義。前註を見よ。

四海。爾雅註疏卷六四極に云く、九夷八狄七戎六蠻之を四海と謂ふ。註に「九夷は東に在り、八狄は北に在り、七戎は西に在り、六蠻南に在り、四荒に次ぐものなり。」

⑧ 蝦蟇啼き蛙 蚓鳴く。

言前に 荐得するも 奇特に非ず。正與廢の時宗説通す。四十餘年不説の説。胡僧語り盡す古今の風。

第三十四、發菩 提心 透頂 徹底。

⑨ 神光雪に立つ甚の 心行ぞ。臂を斷つて師に獻す作廢生。無心に無心の道を體得すれば、雲は自ら白く水は

⑩ 八獎。庭は地際なり。淮南子地形訓に云く、九州の外に乃ち八殊あり、亦方千里。東北

方より大澤と曰ひ、無通と曰ひ、東方を大渚と云ひ、少海と曰ひ、東南方を辰區と曰ひ、元澤と曰ひ、南方を大夢と曰ひ、浩澤と曰ひ、西南方を浩資といひ、丹澤と曰ひ、西方を九區と曰ひ、泉澤と曰ひ、西北方を大夏と曰ひ、北方を大冥と曰ひ、寒澤と曰ふ云々。

⑪ 蝦蟇啼き云々。保寧勇及び如淨禪師の語、眼睛、龍吟兩卷にも引けり。
⑫ 荐得。荐は常に薦に作るべし、薦は進なり。
⑬ 發菩提心。略して發心ともいふ。佛道を求むる心、即ち自利他の大道を修せんとの志を發起するをいふ。
⑭ 神光雪に立つ云々。是れ二祖慧可發心の因縁、前の新贊上

堂に詳なり、會元一邊慶章に出づ、又行持卷に引けり。

⑮ 無心無心の道を云々。龍牙の偈に云く、無心無心の道を體得す、無心を體得すれば道も也た體す。

⑯ 神通。瓔珞經に云く、神は天心に名く、通は慧性に名く、天然の慧徹照して無礙なるが故に神通と名付く。長者論に云く、物に任せて自眞なる、之を稱して神と爲す、不爲不思不定不亂智に任せて徧周す、之を名けて通となす。法界次第中卷に曰く、一に天眼通、二に天耳通、三に知他心通、四に宿命通、五に身如意通、六に漏神通。

⑰ 朝三千暮八百。前已に註す。雲居の語に、朝打三千暮打八百」とあり。
⑱ 野狐通。前已に註す。臨濟錄上卷に出づ。

⑲ 鴻仰曾昔希聲を振ふ。希とは多く見ざるをいふ、稀なり。

卷中に云く、大鴻あるとき臥せるに、仰山來山す、大鴻すなはち轉面向壁臥す、仰山いはく、慧寂これ和尚の弟子なり、形迹もちひされ。大鴻おくる夢をなす、仰山すなほち入るに、大鴻召して寂子とめす。仰山かへる。大鴻いはく、老僧夢をとかん、きくべし。仰山かうべをたれて聽夢をなす。大鴻いはく、わがために原夢せよ見ん、仰山一盆の水、一條の手巾をとりてきたる、大鴻つひに洗面す。洗面をはりて、わづかに坐するに、香嚴來たる、乃至大鴻はめていはく、二子の神通知慧はるかに驚子、目連にもすぐれたり。佛家の神通をしらんとおもはゞ、大鴻の道取を參學すべし。

自ら清し。

第三十五、神通

朝三千暮八百。

左右に侍従す毎常の事。巾は架頭に在り水は瓶に在り。野狐通を將つて妙と作すこと勿れ。鴻仰曾昔希聲を振ふ。

第三十六、羅漢

① 的を破り塵を破る。

② 眼睛鼻孔貪染せず。猶ほ明珠の翳塵を絶するが若し。鉢大虚に等しうして日に供に應ず。眉長く骨脊せて道方に親し。

第三十七、徧參

雲臥く月運ぶ。

③ 雲は山に倚り水は海に歸す。鳥空を離れず魚潭に泳ぐ。達磨了に東土に來らず。二祖未だ曾て竺乾に往かず。

第三十八、葛藤

命脈系の如し。

西天の四七一枝の種。東土の二三五葉の花。

① 的を破り云々。永平中秋上堂語、廣殊一に出づ。

② 眼睛鼻孔云々。卷中に云く、「洪州百丈山大智禪師云く、眼耳鼻舌身意、各々一切有無諸法を貪染せず、之を受持四句偈と名け、亦四果と名く。」徧參。山川を跋渉して徧く天下の善知識を參叩し、修行辨道するをいふ。傳燈十八玄沙の章に、「因に雪峰、師を召して云く、備頭陀何ぞ徧參し去らざる。師云く、達磨東土に來らず、二祖西天に往かず。雪峰深く之を然りとす。」卷中之を引く。

③ 雲臥く月運ぶ。圓覺經金剛藏章に云く、「釋迦牟尼佛金剛藏菩薩に告げて言はく、譬へば動目能く潭水を揺かすが如く、又定眼猶ほ轉火を廻らすが如し、雲臥せ月運び舟行きが如し、亦復た是の如し。」都

機の巻に引く。

④ 葛藤。葛は「つたがづら」、「藤は「ふぢ」にて、共に纏ひからみて物を繫縛するものをいふ。出曜經三に曰く、「其れ衆生あり、愛網に覆するものは、必ず正道を廢して究竟に至らず、是の故に愛網覆ふと説く、猶ほ葛藤の樹を纏ふが如し、末に至つて廻れば樹枯る云々。然れども今は嗣法相續の意に用ふるなり。」

⑤ 甜瓜を愛し云々。會元九無著章に文殊の偈に云く、「苦瓜は根に連つて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜なり。」

⑥ 金輪轉する處云々。長阿含經に云く、「佛、比丘に告ぐ、世間に輪王あり、七寶を成就せり、一には金輪寶、乃至若し轉輪王圓浮提に出づれば天の金輪寶忽ち現前す、乃至、王金輪を摩捫して言く、汝東

甜瓜を愛して苦瓠を憎むに非ず。金輪轉ずる處金沙を布く。

第三十九、四馬 舟行き岸移る。

鐵鞭擧する處毛骨に徹す。四山を趨倒して坦路通す。調御婆心誰か測度せん。空を履み地を走る 快追風。

第四十、柏樹子 寒林春を帯ぶ。

西來の祖意誰に向つてか問はん。柏樹庭前只一株。境を超え人を越えて宇宙に聳ゆ。趙州指上葉枝抽んづ。

第四十一、袈裟功德 非色非空。

靈山の付屬線金を連ぬ。火も曾て焼かず提不起。此十西天何を針を隔てん。古今苗は秀づ福田の地。

第四十二、鉢盂 圓を超え方を越え、

四馬は猶己身痛苦能く厭を生ずるが如し。

四山。生老病死に喩ふ。

調御。如来十號の一。佛は他心を調ふるを以て調御丈夫と名くといふ。

快追風。快は迅速の義、追風は古の名馬の名なり。

柏樹子。會元四、僧趙州に問ふ、如何なるが是れ祖師西來意。州云く、庭前の柏樹子。僧云く、和尚、境を以て人に示すこと莫れ。州云く、吾れ境を以て人に示さず。

袈裟。楚には支伐羅といふ、此に衣といふ、則ち五、七、九條等なり。

靈山の付屬。會元一釋迦佛の章に云く、復た迦葉に告ぐ、吾が金縷の僧伽梨衣を將つて汝に傳付して補處に傳授せしむ、慧氏佛の出世に至るまで朽壞せしむること勿れ。僧伽

鐵に非ず瓦に非ず。

虚空を吞盡して全く無底。二時受用して未だ曾て虧かず。明公力を盡せども手を空しうして去る。此れより衲僧命糸の若し。

第四十三、家常 亘古亘今。

喫飯著衣斯れ日常。更に餘事の敢て應に求むべき無し。阿誰か火裏に向つて水を望まん。驀地に論じ難し親と隣と。

第四十四、眼睛 人々光明の在る有

通身 一隻の眼睛裏。坐臥經行外方に非ず。

往日洞山、師に就いて乞ふ。闍闍野に逼く靈光を發す。

第四十五、十方 擧と措と。

十方頭を競ふて茲の方に入る。一箇の閑人道

製衣は九條衣、即ち大衣のことなり。

提不起。提は「ひつさぐ」と訓む、手にて持ち上げられざるの意。今は六祖、黄梅に衣法を受け三更迷るゝに、慧明なるもの追ひ來り、之を奪はんとしたるも、遂に動かす能はざりしをいふ。詳しくは六祖壇經行由第一に就いて看よ。

古今苗は秀づ福田の地。僧祇二十八に云く、佛王舍城に行き天帝釋石窟の前に經行し、王子に、摩訶提稻田畦畔分明差互所を得るを見る、見已つて諸の比丘に語る、過去の諸佛の衣正しく是の如し、今日より後衣を作らば當に是の法を用ふべし。業疏に云く、世に福田衣と稱す、畦畔の相に法るを以て、世田畦を用ふ、水を以て嘉苗を長じて形名を養ふなり。法衣の田は彌いに四

利の益を弘め、三善の心を増し、法身の慧命を養ふ。

鉢盂。應量器のことにて、比丘の食器なれども、古來衣佛法の信標として師資相承せしが故に、法の異稱として用ひらるゝに至れるなり。

明公力を盡せども云々。此れ尙ほ前に提不起の所に註せると同一の因縁。六祖壇經行由第一に曰く、後を逐ふて數百人來り、衣鉢を奪ばんと欲す。一僧俗姓は陳、名は慧明、乃至衆人の先となつて趁つて慧能に及ぶ。慧能衣鉢を石上に擲下して曰く、此の衣は信を表す、力を以て争ふべけんやといつて、能く草莽の中に隠す、慧明至つて提擲すれども動ぜず。

家常。會元十四芙蓉章に云く、師投子に問うて云く、佛祖の意句は家常の茶飯の如

場を占む。刹海三千誰に向つてか問はん。朝陽先づ必ず扶桑を照す。

第四十六、無情說法 龍枯木に吟す。

無心能く無心の道を語る。誰か識る此の經自ら低聲なるを。山喚び谷應じて甚ぞ分別せん。宗風阻てす大千清し。

第四十七、見佛 有無俱に亡す。

塵積んで山を爲す山塵にあらず。疑ふこと莫れ。清淨 本來身。法輪常に轉じて溪谷に響く。妙聲眞音觸處に新なり。

第四十八、法性 萬境心に歸す。

心心法法是れ同性。鬼窟 寶山我が舊郷。始めて信す。善財百城の友。春に逢ふて自ら識る野林の香しきを。

第四十九、陀羅尼 右轉左旋。

朝暮三千と八百を兼ぬ。陀羅尼一門の中に打す。龍吟すれば則ち半天の雷を振ひ、日出で、大家關鎖さす。

第五十、洗面 水を洗はず。

海面塵無うして波浪を洗ふ。山毛膩くがごとく綠天を衝く。清風琢磨して乾坤淨く、雪上に霜を加ふ明月の前。

第五十一、龍吟 是れ什麼の章句ぞ。

吟曲會て 五音に落ちず。花枯木に開いて春心を帯ぶ。宮商角羽同和の處。此の引調高し誰か敢て侵さん。

第五十二、祖師西來意 落草面壁。

百尺の竿頭高く歩を進め、驀頭に首を回して胡僧を見る。蒲團 恁地に春氣を含む。五葉の麗華自ら任騰。

し、此を離るゝの餘、還つて爲人の言句ありや也た無や。投子曰く、汝道へ、寰中は天子の勅、還つて禹湯堯舜を假るや也た無や云々。

① 巨古巨今。趙州の語。

② 一隻の眼睛。傳燈十、長沙章に、盡十方世界是れ沙門の一隻眼とあり。

③ 往日洞山師に就いて言ふ。傳燈十四雲巖章に云く、雲巖鞋を作るの次、師(洞山)近前して云く、師に就いて眼睛を乞ふ、未審し還つて得てんや無や。巖云く、汝底阿誰にか與へ去るや。師曰く、良价なし。巖曰く、若し有るも何の處に向つてか着けん。師無語。巖曰く、眼睛を乞ふ底是れ眼なりや否や。師曰く、非眼。巖之を咄す。

④ 舉と措と。會元三、章敬の傳

に云く、若し能く返照せば、二八なし、舉と措と施爲實相を虧かず。

⑤ 占。占領の義。

⑥ 無情說法。傳燈五、會元二共に南陽忠國師の章、又會元十三、洞山章に出づ。

⑦ 無心能く無心云々。會元十三、洞山云く、道無心にして人に合し、人無心にして道に合す。此の中の意を識らんとせば一老一不老。

⑧ 誰か識る此の經云々。傳燈十三首山章に曰く、僧問ふ、一切の諸佛皆此の經より出づ、如何なるか是れ此の經。師云く、低聲低聲。僧問ふ、如何か受持せん。師云く、汚染することを得ざれ。

⑨ 見佛。金剛經の文、諸相非相と見ば即ち如來を見る。佛藏經に云く、諸法實相を見るを名けて見佛となす。

① 清淨本來身。大論に云く、清淨とは空の異名、人、空を恐るゝを以ての故に、説いて清淨と名く。

② 法輪常に轉する云々。宗鏡錄二十八、經に云く、一切衆生種々の言語皆悉く如來の法輪を離れず。何を以ての故に、首音の實相即ち法輪なるが故に。是を以て衆生の首音は皆虚空性を出でず、性あらざるなきを以て法輪一切處に偏じて間斷あることなし。

③ 法性。洪州江西馬祖大寂禪師云く、一切衆生無量劫よりこのいた、法性三昧を出でず。長へに法性三昧中に在つて著衣喫飯、言談祇對六根運用、一切施爲、盡く是れ法性。

④ 寶山。佛法に喩ふ。

⑤ 善財百城の友。華嚴入法界品に云く、善財童子驪城の東六塔廟處より五衆と等しく文殊

師子を禮し、善提心を發し已つて漸時に南に行き、一百十城を経て五十三の善知識を見る云々。

⑥ 陀羅尼。名義集五に、大論に秦に能持といふ、種々の善法を集め、散ぜず失はざらしむと云々。又は總持と翻じ、又遮持と翻す。

⑦ 海面塵無うして云々。會元十八、空室智通道人金陵に居し、嘗て浴を保寧に設け、榜を門に掲げて曰く、一物も無し、箇の其塵をか洗はん、穢塵若しあらば何より起り來る。一句子の玄を道取して乃ち大家入浴すべし、乃至盡く道水能く垢を洗ふと。輒輒曰く、知んぬ、水も亦是れ塵なることを。直饒ひ水垢頓に除くも此に到つて亦須らく洗却すべし。

⑧ 山毛。毛は萬里不毛の毛なし。

第五十三、發無上心 木石心を含む。

① 毫端建立す法王刹。便ち自ら老婆心底に成る。葦草拈じ來つて丈六を看る。瓦礫を放開して光明を發たしむ。

第五十四、優曇華 希有希有。

瞿曇の手裡會て芳郁。直に如今に至つて口綿密。甚としてか人天窺ひ得ざる。飲光の微笑是れ何必。

第五十五、如來全身 體中玄。

塵刹時と法輪を轉す。句中に眼を開いて眞身を露す。青山綠水能く知るや否や。大地乾坤箇の人に歸す。

第五十六、虚空 電走り雷轟く。

人天の爲此の法を解説すれば、萬象森羅立地に聞く。般若何を以てか自體と爲る。舊に

くるの因縁、已に前に註す。就いて看よ。

② 如來全身。法華經中の文。

③ 體中玄。臨濟三支中の隨一なり。言中に何等の巧妙なき句にして之に依つて理をあらはすをいふ。安智廣錄五に、體中玄は一切處自然に普徧す。

④ 青山綠水。會元十七洞山言禪師上堂に云く、山は青く水は綠に、桃花は紅に李花は白し、一塵一佛土、一葉一釋迦。

⑤ 虚空。卷中に云く、撫州石鑿慧藏禪師、西堂智藏禪師に問ふ、汝還つて虚空を捉得するを解すや。西堂曰く、捉得することを解す。師云く、爾作麼生か捉ふる。西堂手を以て虚空を撮つ。師云く、汝虚空を捉ふることを解せず。西堂曰く、師見作麼生か捉ふる。師西堂の鼻孔を把つて拽く、西堂忍痛の聲をなして曰く、

依つて長空雲を嫉ます。

第五十七、安居

① 蓮は夏に逢ふて開く。

年々三月窠窟を構ふ。

切に忌む水雲の外邊に遊ぶことを。制を守つて宗風休せざる處。

然。鷺山の大會自ら儼然。

第五十八、出家

功德 珠盤を走る。

出入無難俗と眞と。

太殺人の鼻孔を拽き、直に得たり脱れたることを。師云く、直に須らく恁地に把握して始めて得べし。

② 般若何を以てか云々。傳燈九大悲寶中の章に、趙州問ふ、般若何を以てか體となる。師曰く、般若何を以て體となる。

③ 舊に依つて長空云々。會元五石頭の章に、道吾問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。師曰く、不得不知。吾云く、向上更に轉處ありや無や。師曰く、長空雲を嫉ます。

④ 蓮は夏に逢ふて云々。永平廣錄六に云く、祇だ他に向つて道はん、夏に入つて開く日に向ふ蓮と、云々。

⑤ 鷺山の大會云々。會元二に云く、天台の智者南岳に在り、法華を誦して法華三昧を悟り、旋陀羅尼を得、雲山の一会儼然未散なるを見る。

り、毛は草なり、草木を生ぜざるをいふ。今は草木繁茂す、故に膩といふ。猶ほ膏腴肥厚の處といはんが如し。
② 龍吟。會元十三、曹山章に云く、僧問ふ、如何なるか是れ枯木裏の龍吟。山云く、血脈不斷、乃至。僧曰く、未審し龍吟はれ何の章句ぞ。山云く、也た是れ何の章句かを知らず、聞く者皆喪す。
③ 五音。宮、商、角、徵、羽なり。
④ 引。曲なり。
⑤ 恁地。地は助字、恁處と同じく「斯の如し」の意。

⑥ 幸端建立す云々。帝釋一葦草を拈じて梵刹を建つるの因縁前已に註す。
⑦ 優曇華。今は金婆羅華のこととなせり、釋尊靈前百萬衆前に於て金婆羅華を拈じて瞬目、迦葉破顏微笑して法を菓

⑧ 出家功德。觀軌曰く、卷中分明別に一解を存す。大莊嚴法門經下卷に文殊の言く、菩薩出家は自身剃髮を以て名けて出家となすに非ず。何を以ての故に、若し能く大精進を發して一切衆生の煩惱を除かんとする、之を菩薩の出家と名く。自身染衣を被著するを名けて出家となすにあらず、乃至一切衆生に於て慈悲心を起す、是を名けて出家となす、一切衆生の惡を見ず、亦相を取らず是を名けて出家となす。

⑨ 相逢ふて盡く云々。越人靈徹が詩の三四句に云く、相逢ふて盡く道ふ、官を休して去ると、林下何ぞ曾て一人を見ん。又慈明和尚、桃花悟道を頌するに此の語あり。

⑩ 供養諸佛。下を以て上に薦むるを供といひ、卑を以て尊を資くるを養といふ。十地經論

三に云く、一切供養に三種有り、一には利養供養、謂く、衣服等。二には恭敬供養、謂く、香華等。三には修行供養、謂く、修行信戒行等。

⑪ 大方外なし。大方は氣は太虚といふが如し。

⑫ 超凡越聖。佛説杖擧に違あらす。坐禪儀に云く、超凡越聖も坐脫立亡も此の力に一任す。

⑬ 福田僧。報恩經に曰く、衆生は出三界の福田なり。謂く、比丘戒體を具有す、戒を萬善の根となす、是の故に世人歸信し供養し稱福す。沃壤の田の能く嘉苗を生ずるが故に福田の僧と號す。

⑭ 舊朋。華嚴經卷一世上品に普賢等の二十大士を序し已つて云く、此の諸の菩薩、往昔皆毘盧遮那如來と共に善根を集

雲を穿つ明月疎親を絶す。相逢ふて盡く道ふ官を休して去ると。林下曾て一人に遇はず。

第五十九、^① 供養諸佛 塵々刹々。

一片の香烟 大清を覆ふ。直に千佛の鼻頭を穿つて長し。知らず深夜落花の雨。戸を開けば滿城流水香し。

第六十、^② 歸依三寶 大方外なし。

^③ 超凡越聖 福田僧。法佛袂を連ねて 舊朋を語る。廣く人天の爲に 德惠を施す。柔かなること 水乳の如く、冷きことは水の如し。

めて、菩薩の行を修し、皆如来の善根海より生ずと。

^④ 德惠、徳は得なり、事の宜しきを得るなり。又云く、徳は人心の天に得る所の理、仁義禮智信是れなり、此の五皆之を徳と謂ふと。

義雲和尚略傳

遠孫寶慶住持比丘龍堂撰

師、諱は義雲、^① 建長五年癸丑の臘月を以て洛陽 縉紳の家に産る。^② (近世の僧史、師の傳を載せ、皆「師は太宋國の人、道元和尙の歸朝に隨つて來る」と曰ふ者は非なり。師建長五年に産る。是れ元祖示寂の年にして、歸朝に相後ること殆んど二十有七年なり。況んや隨逐して來ること有らんや。失考知るべし。) 幼にして英奇、常童に異なる。始め洛の教院に投じて雜染、専ら華嚴法華の 疏を習ふ。年、三八に垂々として自ら歎じて云く、「金鱗合に龍と化すべし、曷ぞ煩はしく教綱に拘はらんや」と。奮起して衣を更へ、寂圓和尚に越の薦福に參じて服膺す。圓、常に孤坐淵默、誨勵を屑しとせず、學者其の機に合ふ者有ること無し。師、自ら發願文を製して其の志を圓に告ぐ。其の略に曰く、「伏して惟れば、生死輪廻の間、

^① 建長五年。建長は後深草帝中の曆號、五年は西紀一二五三年。此の年高祖示寂、懷井永平寺に住し、義尹入宋等のことあり。

^② 縉紳。縉は挿なり、紳は帶なり。笏を大帶、革帶等の間に挿むをいふ。轉じて公家のことに用ふ。

^③ 近世の僧史、湛元和尚の諸祖の傳を指す。

^④ 疏。經論の文句を疏通し義理を抉擇するをいふ。垂祐記一に云く、「疏は疏なり決なり、經文を疏通し佛旨を抉擇す、故に疏と曰ふ。」

人間に生るゝこと甚だ難し、佛法流布の代、正法に遇ふこと最も稀なり。^① 浮木も喩へに非ず、曇華争か比べん。然り而して、適々正嫡の室に投じて、直に無上の道を修す。未曾聞を聞き未曾行を行ふ、豈に歡喜せざらんや。是れ小縁に非ず、正に是れ大因縁なり。乃至常啼は東尋し、善財は南訪す。古尙ほ斯の如し、今容易にすべけんや。之を觀すれば斷臂も難きに非ず、之を念すれば燒身も何ぞ辭せん。仰ぎ願はくは、此の誓約朽ちずして、無盡未來際に至らん」と。乃ち左右に侍して採薪汲水、苦行辛修、殆んど二十年、遂に堂奥の密旨を證契す。^② 永仁三年乙未四月二十日入室得法。^③ 正安改元己亥九月十三日圓入寂。師、遺囑を稟けて後席を董す。同年十一月二十一日開堂演法、一住十有六歳、玄侶輻輳す。^④ 正和の初、永平の義演禪師、戡化す。祖燈漸く微にして、叢規荒涼たり。大檀那雲州の太守藤の通貞、師を請じて補せしむ。乃ち請に應じて進山開堂、^⑤ 嗣香、寂圓に供す。實に正和三年甲寅臘月初二日なり。時に師六十有二歳、^⑥ 槌拂の下頗る千衆に減せず。家風峻峻、諸方之を憚る。任住すること十有餘年、大いに頹廢を興し、鴻業を潤色す。時に稱して永平の中興と爲

① 浮木。涅槃經二十三に云く、「清淨の法實、見聞を得ること難し、我今已に聞く、猶ほ首龜、浮木の孔に値ふが如し。」其の他圓覺經、稱揚諸佛功德經中に説けり。
② 曇華。優曇花のこと。法華妙莊嚴王品に云く、「佛値ふこと得難し、優曇波羅華の如し。」
③ 常啼。菩薩の名、梵に薩陀波倫といふ。智度論九十六に云く、「古人云く、此の菩薩佛道を求むるが故に、憂愁啼哭すること七日七夜なり。是の故に天龍鬼神號して常啼といふ。」東尋のこと大般若經三百九十八に出づ。
④ 燒身。法華藥王品等に出づ。
⑤ 永仁三年。永仁は伏見帝の曆號、三年は西紀一二九五年、師の年四十三歳に當る。
⑥ 正安元年。正安は後伏見帝の曆號、同元年は西紀一二九九年に當る。

す。晩に嗣子曇希に命じて席を譲り、^⑦ 榻を東堂に移して老を頤ふ。^⑧ 正慶二年癸酉十月十二日、疾無うして沐浴、衣を更へ偈を書して云く、「教を毀り禪を誘す、八十一年。天崩れ地裂けて、火理の泉に没す」と、筆を擲つて化す。世壽八十有一、僧臘六十有五、全身を吉祥山に塔す、號して靈梅と曰ふ。師の在日、參徒宗可肖像を描き、之れを持って入宋。靈石の芝、靈隱の朋、共に語を爲つて賛す。師、曾て寶慶に在るの日、山門境致一十六處に掲げて題を安す。所謂、銀椀峯、寶境池、虎頭岩、虹影橋、安禪石、臥龍池、三曲路、萬杉關、紫巖嶺、乘雲峯、長鯨橋、般若嶺、法華峯、假山林、靈鷲峯、蘆菴林是れなり。其の法を嗣ぐ者は只だ曇希一人のみ。

國譯義雲和尚語錄拾遺終

年に當る、此の時師四十七歳なり。

① 正和。花園帝(西紀一三一二—一三一六)の曆號。

② 義演。本貫詳かならず、破著寺の懷鑑に就いて業を受け、四條帝仁治二年(西紀一二四一)道元に永平寺に謁して弟子となり、隨侍すること十餘年、禪師入滅の後懷并に參じその嗣となる。大衆のため永平寺に進院開堂、晩年報恩寺に退き、正和三年十月二十六日圓寂す。

③ 戡化。戡は藏なり、歛なり、遷化と義同じ。

④ 嗣香。嗣承會、又は嗣法拈香ともいふ、開堂の時、師のために拈香し、以て得法の由る所あるを明かにし、法乳の慈恩に報するなり。

⑤ 槌拂の下。槌拂、拂子の意にして會下といふも同じ。

⑥ 東堂。又東菴ともいひ西堂に對す。蓋し東は主位なるが故に前住は東堂に居するなり。

⑦ 正慶二年。正慶は光嚴帝の曆號、同二年は西紀一三三三年に當る。

跋

身心脫落の道を鼓吹して、大雅を永平に和せんと欲する者多からずと爲さず。然も能く其の音響節奏を審かにし、而して和し得て奇絶なるに至つては、則ち惟り靈梅の雲和尚のみ。今古未だ匹儔有ることを見ず、故に其の提唱の發越せる、木人方に歌ひ石女起つて舞ふ。嗚呼、彼の金色の頭陀をして特地に猖狂せしむること、亦胡を獨り乾闥婆王の妙指に在るのみならんや。

正徳乙未 菊月良辰

竹斯肥後沙門 瑞方謹跋

早歲掛冠萬緣俱棄、洞飲木食、水懷藥志、趣向三天、步驟十地道蔭群生、德周品類、赤手起洞上之孤宗、談咲措君臣於五位、若非乘願力而再來、又安得迥然而獨異。
永平住山雲和尚壽像、其徒宗可請贊。
泰定改元歲在甲子春

靈隱山獨孤叟淳明題

①大雅。正傳の佛道を音樂に喩へていふ、鼓吹といひたるに對したるなり。

②靈梅の雲和尚。靈梅は義雲禪師塔の名なり。

③金色の頭陀をして特地に。會元一に曰く、「世尊、因みに乾達婆王樂を獻す。其の時山河大地盡く琴聲を作す。迦葉立つて舞を作す。王問ふ、迦葉は豈に是れ阿羅漢にして諸漏已に盡きざらんや、何ぞ更に餘習有る。佛の言く、實に餘習なし、謗法すること莫れ。王又琴を撫すること三通、迦葉又三度舞を作す。王曰く、迦葉舞を作さず。王曰く、世尊何ぞ妄語することを得る。佛曰く、妄語せず。汝琴を撫して山河大地木石盡く琴聲を作す、豈に是ならざらんや。王曰く、迦葉も亦復た是の如し、故に實に會て舞を作さず。王乃ち信受す。」

④頭陀。杜多ともいひ、洵汰、斗鉢、抖擻、修治等と譯す。煩惱妄想を去つて、佛道修行をなすこと。又種々の苦行をなすが故に苦行とも譯す。

⑤乾達婆。尋香、食香、嗅香と譯す、天帝釋の俗樂神、金剛窟中に居す。

⑥菊月。陰曆九月の異稱。

⑦竹斯。筑紫に同じ。今の九州を指す。

⑧瑞方。面山と號す。肥後三島の人、靈元帝の天和元年（西紀一六八三）に生れ、後櫻町帝明和六年（西紀一七六九）寂す、博學宏識、力を祖風の宣揚に盡し、沱山、天桂、指月等と共に曹洞の中興と謂はる。

義雲和尚語錄序

或云拈華微笑默露真宗面壁立雪密證玄旨言語道斷心行處滅只後之來者不守本分鼓動權唇說禪說道所以真宗玄旨殆將拂地不亦怨乎予云實如所說然未可槩而言夫佛祖宗旨專在妙悟不必拘語默苟及到妙悟田地語也默也同歸性源始無兩般昔者黃面老子演出一大藏教天上人間龍宮海中無處不流通而於末杪頭自告示云我四十餘年未曾說一字又我永平高祖云言語道斷者謂一切言語也心行處滅者謂一切心行也佛佛祖親言親口譬如食蜜中邊皆甜誰一味上妄分濃淡義雲禪師者寂圓嫡子知見高一時道聲轟千古初補寶慶之法席妙續先師脈後坐永平之棠陰能與高祖道當時四方推稱洞上中興可謂傑然老宗匠也二會語錄幸未磨滅我門光輝豈不怡悅寶慶今之住山龍堂和尚遠寄一本乞山僧序以梓行盛意不諷誦我不得而辭開卷目耕不覺終編句句發默露之真宗文吐密證之玄旨古人云佛語心爲宗無門爲法門是獨楞伽云乎漫染秃筆爲之序云

維時正德乙未季夏祥旦

住山老衲欽序于洛北鷹峯之艸堂

義雲和尚語錄

住越州薦福山寶慶禪寺語錄

侍者 圓宗空寂 編

師於正安元年己亥十一月二十一日就當山開堂拈香祝 聖罷

上堂云百川向大海而到了無異名一心隨萬境而轉轉後住本位將鏡鑄像鑑照不得將像鑄鏡光明自新主不出關外招逼身之手接往來賓受用途中活通身之眼鑑今古且道大衆如賓主相對具什麼手眼還會麼覲面難呈向上機家風萬古爲人施

上堂廓爾而靈本光自照寂然而應大用現前木馬嘶風不運今時之步泥牛出海耕破空劫之春諸人相委悉麼玉人招手處復妙在廻途

半夏上堂身似浮雲心如清風眼看無影樹耳聽沒絃琴半夏已過過來底身而今在什麼處兄弟但如墮見聞去則向第二義門作模樣作麼生是第一義諦良久云翡翠踏翻荷葉雨鷺鷥衝破竹林煙

上堂世尊有密語迦葉不覆藏死中有活不被空礙活中有死不被物礙有不是有無不是無芭蕉和尚道爾有拄杖子我與爾拄杖子爾無拄杖子我奪爾拄杖子畢竟作麼生心地含諸

種普雨悉皆生，既悟華情已，菩提果自成。

中秋上堂，開乾坤眼，更無當眼之境。放水天光，終作應物之照。船子垂絲綸，直下釣得載船歸。雲巖擎掃帚，葛頭拈起對空拂。豎起拂子云：而今將來在雲上座手裡，還是拂什麼物。大眾要委悉麼，本來無一物，何處拂塵埃。

開爐上堂，舉永平初祖云：火爐今日大開口，廣說諸經次第文，鍊得寒灰與鐵漢，心心片片目前般。師云：深撥冷灰，看小火，葛頭開示轉真文，點炭添柴似無意，陝府鐵牛鍊得般。

上堂，朝打三千佛，祖不證，暮打八百狸，奴悉知。順行也，達磨西來九年面壁，逆行也，庭前柏樹枝葉成堆。一念萬年，如以鏡鑄像，萬年一念，似以像鑄鏡，爲甚恁麼。大眾還會麼。良久云：丙丁童子來求火，天上斗星廓照空。

佛涅槃上堂，常寂而照，無功中辨位，顯赫而靈，自位中立功，綿密密處，回互傍參，明歷歷時，孤圓絕跡，諸禪德，但如釋迦老子，至今日半夜，入般涅槃，還有出沒應變底道理麼。良久云：唯一堅密身，一切塵中現。

上堂，虛空包容，萬像無潰散，大地突出，一心不覆藏，一隻眼睛，明歷歷於盡十方界，無量寶刹，露堂堂於一微塵裏，本地風光，不曾欠少，非情識計較之所及，所以南嶽磨磚，東平破鏡，可謂無功之時立功，無位之處排位，大眾要會，如是手段麼。良久云：三級浪高魚化龍，癡人猶辱夜塘水。

佛生日上堂，處塵不曾染塵，以水如何洗水，一性本然絕來去，萬德圓成合諸緣，所以現降神

誕生之身，示灌沐清淨之體，七步周行，步步不迷，方天上天下，巍巍獨稱尊，諸禪德作麼生，是我佛降生，灌沐底道理。良久云：摩耶漆桶忽然脫，難陀鼻頭竊地穿。

解夏上堂，一也不住，箇箇圓成，異也無間，法法無礙，把定則凡聖人畜同居，如成一拳，放行則東西南北，分位似豎五指，兄弟孟夏構窟籠，初秋開布袋，中間九句作麼生履踐，還有奇特事麼。良久云：坐臥經行非我事，清風明月自相宜。

上堂，磨磚作鏡，魔則作佛，以鏡鑄像，光歸何處，拈來盡界，坐蒲團上，放下蒲團，掛盡虛空，記得嚴陽尊者問趙州，一物不將來時如何。州云：放下着。尊者曰：一物既不將來，放下箇甚麼。州云：恁麼即擔取去。師曰：要委悉這箇道理麼。佛子住此地，則是佛受用，經行若坐臥，常在於其中。上堂，登山須到其頂，不到不知宇宙之寬，入海須徹其底，不徹不測滄溟之深，諸兄弟入法須辨其通塞，不辨不得脫落之道，記得洞山問僧，什麼處來。僧云：遊山來。山曰：還到頂否。僧云：到。山曰：頂上還有人否。僧云：無人。山曰：恁麼即開梨不到頂。僧云：若不到頂，爭知無人。山曰：開梨何不且住。僧云：某甲不辭住。西天有人不肯。師曰：這箇道理要委悉麼。一片白雲橫谷口，幾多歸鳥盡迷巢。

上堂，永平初祖云：吾佛謂諸弟子曰：吾有四念處，所謂觀身是不淨，觀受是苦，觀心是無常，觀法是無我。永平亦有四念處，觀身是皮袋，觀受是鉢盂，觀心是墻壁瓦礫，觀法是張公喫酒李翁醉。師曰：不同釋迦老子，不同永平師翁。山僧有四念處，且道：大眾作麼生是身念處，盡十方世界真實人體，作麼生是受念處，大海元不辭衆流，作麼生是心念處，山河大地日月星辰，作

麼生是法念處說似一物卽不中不涉諸心數向上一句又作麼生良久云一念無念念不住參。

上堂一毫穿衆穴大地無遮欄古今本無向背縱奪更不休歇或時遊佛土或時入魔宮或時過平坦路上或時臥荆棘林中且道現前大衆而今卓立之處是平坦路麼是荆棘林麼試道看若會得許汝一隻行腳眼若不然者有寒暑促君壽有鬼神妬君福。

上堂隔山見煙知是火隔牆看角知是牛春自百花明明誰疑本來心秋自清風颯颯須悟祖師道虛空是根森羅是境根與境猶如鏡上痕明鏡元無瑕畢竟作麼生體悉良久云萬古碧潭空界月再三撈攪始應知。

閉爐上堂有時開口吐炎熱有時覆頂圖寒灰如世界潤同古鏡量且道大衆而今現成什麼圖良久云夜半穿靴去天明戴帽歸。

上堂槁木之質死灰之心眼睛霹靂鼻孔纒垂把定萬象無象放行全手無手動靜二相了然不生既得怎麼無生爲甚諸人而今上堂立地聽得箇什麼法證契箇什麼心還要委悉麼良久云動容揚古路不墮悄然機。

佛涅槃上堂向上二千餘白花萎風悲直下一念萬年雲慘水咽不傳一路千聖不奈何付囑有在諸人得便宜所以道若道滅度非弟子眷屬謂非滅度非弟子眷屬大衆要與釋迦老子相見麼豎拂子云相見了也畢竟作麼生良久云迦葉曾禮雙足。

結夏上堂九旬繩墨非長短曲直縱橫功業新木馬泥牛混雜處嘶風吼月力耕親諸禪德摩

竭掩室少林面壁有什麼意旨良久云一粒在荒田不耘苗自秀。

上堂無諸聖可慕無己靈可重虛空卽是色大地卻非塵如薰風生林岳梅雨滴蒼頭卻爲色塵耶卻爲虛空耶古人云雨從何來風作何色大衆試斷看若道不得拄杖子代一轉語卓一下云色空而今在什麼處。

謝新舊維那上堂鉗鎚轉掌握中惟有摧無佛祖來舉唱處作模作樣朝打三千進前成功暮打八百退後就位雖然怎麼新舊絕待前後際斷爲甚有箇通路良久云偏正不曾離本位無生那涉語因緣。

上堂松自直棘自曲日暖銷霜月冷結露一靈常住性於什麼處見得是法平等無有高下是心一齊有何曲直諸禪德要委悉者箇道理麼良久云深山大小石頭滑綠水白雲流不流。

上堂心非覺知蕩蕩乎如大虛法離見聞巍巍乎無倫匹高而不可窮深而難到雖然怎麼把則不出掌握中放則遍於塵刹外大衆要體悉者箇道理麼良久云無影樹下合同船瑠璃殿上無知識。

冬至上堂浮虛境上唇運推移枯木岩前龍吟忽起陽曲初報蟄類密動雖然如是實際理地不受一塵建化門頭作模作樣畢竟如何體取良久云死中得活。

因雪上堂踏斷千差岐路方得直下承當瞞他一點不得遊踐自己家鄉當怎麼時法法不離位步步不迷方彼此同開傑迦羅眼自他等具知見香既得到怎麼田地還有同見同般底證據也否良久云莫謂吾家無寶具滿床盡撒雪珍珠。

佛成道上堂舉古德云。瞿曇打失眠時。雪裡梅花只一枝。而今到處成荆棘。卻笑春風綠亂吹。師云。梅樹歲寒自有時。芳心偷綻舊年枝。先春漏泄陽春曲。黃面自橫鐵笛吹。歲旦上堂舉宏智禪師云。歲朝坐禪。萬事自然。心心絕待。佛佛現前。清白十分。江上雪。謝郎滿意釣魚船。師云。年朝會禪。褫子泰然。萬物有慶。十方目前。山上同看梅與雪。江邊載月謝郎船。謝新舊兩班上堂。尋常用一面古鏡。胡漢現來。曾不妨。賓主舊新無異轍。驀頭相見各承當。上堂。青皇令極綠陰花尚香。赤帝位新薰風氣。含火時節不言。恁麼代謝。且問大衆。空劫已前公案子。恁麼改轉也。無。莫向聲色邊著眼。豈不見風穴和尚因念真二上座。俱詣方丈。穴問真曰。如何是世尊不說說。真云。鶉鳩樹頭鳴。穴曰。汝作許多癡福何用。乃願念曰。云何。念云。動容揚古路。不墮悄然機。穴謂真曰。聞渠語乎。師云。大衆要會。首山契風穴底意旨麼。良久云。廊中雖有隱形術。爭似全身入帝鄉。

結夏上堂。我住則汝同住。我行亦汝共行。打得諸佛要機。而結制。拈提祖師心印。而護生。山高不礙雲倚。如父如子。谷虛有應聲響。爲弟爲兄。既得恁麼和同。還有什麼行履。良久云。瓊樹寸寸寶。梅檀片片馨。

上堂。父母非我親。諸佛非我道。要識箇中意。父少而子老。記得南泉云。王老師十八上解作活計。趙州云。老僧十八上解。破家散宅。師曰。父子二老解處如何。辨取南泉臂長衫袖短。被鬼神覷見。趙州身貧心儉。無卓錫處。薦福不然。十八上已前發心發足。十八上已後。大悟放行。正當十八上解一切智智。且問大衆。古人解處。薦福悟處。是同是別。試斷看。拈弄拂子云。如今薦福

手裡有一箭。欲向諸人十八上發。還要的當麼。豎起拂子。又擲下云。射虎未了。便射石。

上堂。萬機休罷。千聖不携。一言相契。古今一揆。暗中著眼。明裡藏身。借位明功。體在用處。借功明位。用在體處。所以道。君臨臣位。猶帶凝然。子就父時。尚存孝養。玉關未透。正迷一色。寶印全提。露那文彩。還要委悉麼。傍觀者。晒。當局者迷。

上堂。衆流投大海。鹹淡味同。四夷歸一朝。君臣道合。所以四種分主賓。五位列偏正。雖然如是。立正則正外無偏。五位俱正中來。立偏則偏外無正。萬物各偏中至。不見道。我逢人。則便不出。出則便爲人。我逢人。則便出。出則便不爲人。良久云。偏正不曾離本位。無生那涉語因緣。

上堂。白雲以山而爲父。明月假水而爲家。未審衲僧以何而爲父。假何而爲家。不見道。從佛口生。從法化生。既得恁麼。爲甚麼道。返本還源。事轉差。本來無住。不名家。畢竟如何。十二時中。不依倚一物。

上堂。感應道交。山呼谷響。因果絕待。果熟花開。菩提本無樹。明鏡亦非臺。每常行異類。又且好輪迴。不見古德道。煩惱海中爲雨露。無明山上作雲雷。於此薦得。鑊湯爐炭。吹教滅。劍樹刀山。喝令摧。

上堂。春來弄薔薇之花。冬至吟銀碗之雪。古德云。心隨萬境轉。轉處實能幽。隨流認得性。無喜亦無憂。入山不畏虎兇獵。夫之勇。入水不避蛟龍漁者之勇。白刃臨前。見死如生。將軍之勇。如何是衲僧之勇。寒時寒殺。閻梨熱時熱殺。閻梨還有遊戲自在處也。無。百尺竿頭。進一步。一步。

上堂十五日已前月吞卻萬像，琢成一顆寶珠。十五日已後月吐卻萬像，鑄得幾多明鏡。古德道：心月孤圓，光吞萬像，光非照境，境亦非存。光境俱忘，復是何物？師曰：大眾當光境俱忘時，如何領略？淨智圓明，智外無冥智之境，心境絕待，境外無照境之智，又不見道。賓主存時，全是妄。君臣合處，正中邪。還要委悉麼？木馬嘶秦山頂，泥牛耕海上田參。

當山初祖三十三回忌陞座。師此時在永平，赴齋當山。拈香云：此一瓣香，從胸襟拈出，欲酬恩。恩還如怨，欲報怨，怨亦似恩，超恩越怨，是一本分。上爲日月星辰，作光彩，下爲萬木百草，作靈根。熟向爐中，供獻先師。當山初祖，用酬法乳之恩，就座。乃云：萬機休罷，一物長靈。太虛寂爾，霹靂轟轟，未審先師平生，是甚麼心行，使吉祥孤雲嶺之風月，排薦福深岳林之巖扉。此風隨西來三周棹，而滿此月，逐南海一葦船，而來。正恁麼時，不涉去來路，阿誰敢拾遺。舉先師曾在永平時，問二祖云：如何是師子吼一音？祖曰：更不外出。師云：爲甚不出？祖曰：百獸腦裂。師云：恁麼太似無益。祖曰：無一人不承恩。師云：某甲會得。百獸皆作師子吼。祖曰：如何恁麼會？師云：萬曲是一聲。祖印曰：汝能達觀音入理門。師作禮拂袖而嘯去。頌云：師子吼時衆獸喪，死中得活。卻和同一聲奏出新豐曲，觀自在門從此通。

上堂：心心無異心，一心一切法。念念非異念，一念是萬年。

住吉祥山永平禪寺語錄

侍者 曇 希 編

師於正和三年甲寅十二月初二日入院。

山門金鷄報曉，解脫門開，依然引步，腳下風雷。

佛殿世尊有密語，長舌不離唇，迦葉不覆藏，家國從茲富，安樂兜率，左方右邊。

據室一丈水，一丈波，於中能唱巴歌，勘破毘耶小神通了，如許閑座，今在什麼，縱橫不容擬議，亦是葛藤舊窠。

陞座祝 聖罷，又拈香云：此香穿鑿佛鼻孔，通混沌未分之靈薰，包容祖祖髓皮，全兒孫繁茂之根蒂。熟向爐中，供養薦福，開山圓和，尚大禪師，用酬法乳之恩。

提綱（問答不錄）半路作新豐吟，蒜頭轉空劫身，谷舍應聲之響，山屬愛寂之人，腦後繼踵溫故，目前亡對，知新孤輪高耀，寰中不夜，五葉不凋，劫外逢春，若又於此薦取，懷甕之恩，非是外枯槁之巧，不必親動容，不出本來地，誰向清空拂客塵。祖祖於此作大佛事，佛佛於此轉大法輪。山僧於此開堂演法，作麼生與佛祖相見，明月滿空，天水淨，弟兄俱在，合同船，復舉百丈因僧問：如何是奇特事？丈云：獨坐大雄峰，天童淨和尚拈曰：大眾不動著，且教坐殺者漢。今日忽有人問淨上座，如何是奇特事？只向他道：有甚奇特，畢竟如何？淨慈鉢孟移過天童喫飯。師曰：即今有人問山僧奇特事，對他道：一枝藤打人有功，一瓶水受用無窮。

上堂十方無壁落從來絕遮欄四面亦無門這裡是入處瞎卻眼睛而與七佛諸祖相見分明言理而與燈籠露柱談論當恁麼時頑石點頭草木現瑞不見僧問仰山曰法身還解說法也無山云我說不得別人說得僧曰說得底人在甚處山乃推出枕头瀉山聞乃云寂子用劍及上事且道永平門下還恁麼說得恁麼聞得麼良久云越山日暮少林客應聽子規深夜啼上堂當山初祖示衆云向上一路玲瓏八面當陽要機全身擔來是乃金輪難掩非乃玉石俱焚擬議不進盡界粉碎總不恁麼又且如何良久云是非不掛娘生口自有傍觀論短長大衆要會初祖道處麼一條拄杖拄天地更使阿誰論短長

上堂一物長靈萬戶俱透百草本明明祖意自了了天普覆今人人頂相圓地普載今箇箇腳跟平於此薦得一也不是二也不成向什麼處敲唇皮還會麼良久云風月寒清古渡頭夜船撥轉瑠璃地復舉雲門示衆云爾若未得箇入處三世諸佛在汝腳跟下一代藏教在汝舌頭上且向葛藤處會取師曰詔陽老漢雖恁麼道未免認奴爲郎永平門下有者活路在爾若實未得箇入處更買草鞋行腳好

上堂舉曹山因僧問眉與目還相識也無山云不相識僧曰爲甚不相識山云爲同在一處僧曰恁麼即不分也山云眉且不是目僧曰如何是目山云端的去僧曰如何是眉山云曹山卻疑僧曰和尚爲什麼卻疑山云若不疑即端的去也師頌曰弟兄本是一家兒著眼青睞展兩眉誰識曹山端的處經行坐臥不相疑

上堂目前機肘後印曾無間隔即今分明雖然恁麼揚眉眊目則被眉目熱瞞談玄說妙亦被

玄妙汚染若又住寂寂還縛通身解空空自作窠窟大衆作麼生行履得不墮恁麼偏坑去還會麼良久云動容揚古路不墮悄然機復舉曹山因僧問時節恁麼熱向什麼處迴避山云鑊湯爐炭裡迴避僧曰鑊湯爐炭裡如何得迴避山云衆苦不能到師曰曹山雖恁麼道未免向外馳走若有人問永平時節恁麼熱向什麼處迴避對他道須向日下迴避又問炎炎日下如何得迴避良久云時節若至佛性現前

上堂真說不對機真機不待說所以大人具大用大機具大智且道諸禪德畢竟作麼生是大人大機底作略還委恁麼靈羊掛角絕跡亡蹤復舉當山初祖曰古人拈起扇子云任爾千般巧終無兩樣風山僧即不然任爾千般巧更看萬樣風師曰雲上座欲加半句補古人虧闕處任爾千般巧終無兩樣風招涼兼翫月只在一輪中

結夏上堂盡乾坤大法界是我一箇身便能禁足遍塵刹諸有情是我真箇漢方解護生禁足也步步不妄移護生也心心不妄動所以道以大圓覺爲我伽藍身心安居平等性智佛佛到此同歸人人住此法爾還要委恁麼一輪皎月大圓覺利海三千鐵一團步步點空無朕跡人人喚爲我伽藍

上堂途中相過傾蓋直下回頭阻關向去從茲普請去卻來自此悉來端拈拄杖劃一劃云過去諸如來此門已成就現在諸菩薩今覺入圓明未來衆學人當依如是法所以道湘之南潭之北中有黃金充一國無影樹下合同船瑠璃殿上無知識復舉世尊一日與阿難行次見一塔廟便作禮阿難問曰是何人塔廟佛言是過去諸佛塔廟阿難曰過去諸佛是誰弟子佛言

過去諸佛是我弟子，阿難曰：應當如是侍從便行。師云：逢佛則拜，佛騎牛更覓牛，還委悉麼？過橋村酒美，隔岸野花香，水向竹邊綠，月當松頂涼。上堂：鶴自長，截之非鶴；鳧自短，續之非鳧。須信十方佛土中，唯有一乘法。若復擬議，是法住法位，世間相常住。

上堂：性海澄澄澈澈底，一波纔動萬波隨。龍魚活路更無外，裏許不曾宿死屍。謝監寺上堂：如虛空無邊際，覆大方似日月轉光明。分日夜，只是觸事無私，何更有物不辨。進致將軍太平，退解師子返擲。玄則丙丁因緣，楊岐挾路相見，亦是非分外。良久云：金繩拽轉泥牛鼻，半夜馳來海上耕。

上堂：虛空不自知，虛空邊量大地不自測。大地廣狹，自己三昧非是自己之所覺，他人靈性豈落他人之心機。雖然恁麼，魚在水得命，鳥遊空保身。且問：大衆衲僧在什麼處保持身心去？良久云：百尺竿頭，一進一退。

上堂：本際智非是隱顯，空劫身不屬因緣。雖然恁麼，有時爲一頭兩角水牯牛，有時作八臂三目上天子，青點點處穿靴去，明歷歷時戴帽來。恁麼消息未免往來機，作麼生是本來一段光明。良久云：鳥棲無影樹，花發不萌枝。復舉：玄沙因僧問：三乘十二分教則不要，如何是祖師西來意？沙云：三乘十二分教總不要。師曰：且問：大衆這一則公案，作麼生領略？若就三乘十二分教內覓，金屑雖貴，落眼成翳。若向三乘十二分教外求，野鹿臨渴逐陽炎。走有人問：永平三乘十二分教則不要，如何是祖師西來意？對他道：祇這三乘十二分教，總非三乘十二分教。

正旦上堂：乾坤出入，衲僧鼻孔而平穩。日月扶出佛祖眼睛而清明，所以道：天地與我同根，萬物與我一體。億萬斯年於今日成，百千國土在是處現。釋迦老子於此說：一乘法，達磨大師於此敷：五葉春，諸人還看麼？元正啓祚萬物咸新。

上堂：記得臥龍因問了院主，先師云：盡十方世界是箇真實人體，備還見僧堂麼？主曰：和尚莫眼花。龍云：先師遷化肉猶煖在，永平聊向第二義門下註脚。先師道：盡十方世界是箇真實人體，還見僧堂麼？豎拂子云：這箇是永平拂子，那箇是真實體。和尚莫眼花，眼裡無筋一世貧。先師遷化肉猶煖在，水自竹邊流出綠，風從花裡過來香。

上堂：舉青原謂石頭云：人人盡道曹溪有消息，頭曰：有人不道曹溪有消息。原云：大藏小藏從何得來？頭曰：盡從這裡去。諸事總不關。師曰：青原只知大家日月照，不覺自己眼晴明。石頭雖見家裏寶貝貴，爭識崑崙靈玉多。大底大小底小者，裡是什麼處在？說闕說不闕。良久云：一夜落花雨，滿城流水香。

上堂：舉僧問首山：一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法，皆從此經出。如何是此經？山云：低聲低聲。僧曰：如何受持？山云：莫染污。宏智禪師拈曰：來問此經，低聲低聲。大千卷自塵中出，三世佛從口裡生。天得一以清，地得一以寧。空無依兮谷不盈，摩訶般若波羅蜜。落日漁樵歌。太平師曰：永平不借二老舌頭，欲重宣此義。良久云：舌相廣大轉此經，近聞溪澗水無聲。百千妙義許誰解，風入梧桐秋始成。

上堂：處天地之間，而先天生地，是什麼物？稟佛祖之氣，而超佛越祖，是什麼人？插一杖子，建寶

王利坐一微塵轉大法輪當恁麼時微塵是非小大千不是大所以教中云是法平等無有高下大衆還會麼堅起拂子云是什麼法

上堂本性一靈之光明與時發起通身回互之手眼觸處相宜眼處聞聲而明歷歷耳處見色而淨裸裸石人似汝今能唱巴歌汝似石人兮須和雪曲塵塵發清淨智處處入普門境諸人要委悉這箇道理麼古渡風清一片秋月色江光冷相照

三月旦上堂召大衆云時有常催人人豈虛度時或水中亡軀或火裡失命及刀割腸箭鋒透骨病患不擇老少閻王寧問貴賤剛質微纖罪犯供以鐵牀洋銅依宿生善種得箇人身答般若良因投祖師門下今日若空過幾劫又相逢寒氣已去熱時未來辨道時最宜莫空度光陰上堂舉僧問九峰祖祖相傳當得何事峰云釋迦慳迦葉富僧曰如何是釋迦慳峰云無物與人僧曰如何是迦葉富峰云國內孟嘗君僧曰未審相傳底事如何峰云百歲老兒分夜燈師曰妙明田地纖塵難點鬧市門頭不妨相逢暗裡轉身平坦路明中覆頂等閑人大衆還體悉麼泥融飛燕子沙暖睡鴛鴦

解夏上堂縛解不到處大解脫門開從聽炎暑去誰礙冷風來未曾存軌則何更用安排於此薦取木馬奔迭石牛懷胎還委悉麼轉身透出竹竿路開眼掀翻甕裡天

謝知事上堂執叢林輔弼之柄樹大家平穩之功事事圓通觀自在尊把手行門門不隔香積如來送供到雖然如是未假楊岐挾路相見何用毘耶城野狐通還要委悉麼良久云廬陵米價高

中秋上堂蒲團功就起三昧大用現前照世間夜半正明望之被光礙天曉不露戲之被眼瞞直得開沙門一雙眼睛子活神境通徹大機關到恁麼田地還有奇特麼良久云鯨吞海水盡露出珊瑚枝

九月朔上堂明歷歷處匿跡穩密密間轉身天不言而日往月運地不言而山高海深衲僧不言而超凡越聖拄杖不言而與奪縱橫只如樹凋葉落體露金風是言不言良久云橋流水不流

上堂舉僧問雪峰聲聞人見性如夜見月菩薩人見性如晝見日未審和尚見性如何峰打三下其僧後問巖頭頭打三掌雪竇拈云應病設藥且與三下若據令而行合打幾多師曰永平見性不同聲聞不同菩薩不同三大老漢諸人著眼見取卓拄杖三下乃下座

臘月旦上堂乾坤之內宇宙之間中有一寶秘在形山肇法師雖然恁麼道只解話月指月未能指話俱忘永平不然乾坤宇宙一拶拶破教具眼人無疑猜卓拄杖一下云還見麼梅花與白雪同色不同香

上堂是法非計較所到吾心不被淨穢礙細而無間隙大而絕方隅毫釐差之不應律呂直下承當本無奴婢但知有故狸奴白牯進修行地以不知有三世諸佛迷法王城若於此論勝負萬里望崖洲正當恁麼時如何著手去良久云聊將拄杖攪滄溟令魚龍知水爲命

小參

寶慶冬至小參，陰也無去處，陽也沒來由，不涉短長時劫，豈拘始終羅籠，爾莫怪於我，風凜凜破竹，吾無隱乎，爾雪皚皚壓松，所以道時節若至，其理自彰，豎起拂子云：者箇是三祇劫之本際，一刹那之中央，其或擬議隔劫在，畢竟如何，良久云：夜半烏兒頭戴雪，天明啞子抱頭歸。除夜小參，廓爾而靈，本來光明自照，寂然而應，特地大用現前，向去底泥牛入海，沒消息，卻來底木鷄鳴曉發元樞，前後際斷兮，古今住無諍三昧，來去無蹤兮，風煙橫古渡，頭邊如殘臘已極，新歲未到，中間如何措足，還委悉麼，千光不照空王殿，夜半烏鷄帶雪飛，復舉趙州因僧問兩鏡相向，那箇最明，州云：汝眼皮蓋須彌山，當山初祖拈曰：或有人問永平兩鏡相向，那箇最明，爲他拈拄杖道：者箇是拄杖子，他又道：此是長連床上學得底，佛祖向上道什麼，擲下拄杖下座，師曰：今夜問山僧兩鏡相向，那箇最明，卽道一段光明照古今。永平入院小參，法隨法而行，法隨隨處建，一出六出藥山師子，異類同類青原麒麟，拈提自家鑰子，打開向上玄關，當恁麼時，祖宗爐鑪鍊魔鍊佛兮，鑊湯消融，本分鉗鎚，鍛自鍛他兮，面目儼爾，既得恁麼手段，作麼生的當，莫道鯢鯨無羽翼，今日親從鳥道回，復舉藥山因僧問：祖師未到，此土此土有祖師意也，否，山云：有，僧曰：已有祖師意，又來作什麼，山云：爲有所以來，師頌曰：劫前消息屬誰人，五葉聯芳芬馥新，要識少林真妙訣，一聲鐵笛奏陽春。

結夏小參，擊破虛空構九旬窠窟，打開圓覺，接大地有情，驅馬牛而耕自己一片田地，會凡聖而張空劫已前規綱，所以道十方同聚會，箇箇學無爲，此是選佛場，心空及第歸，且問龐老者，理不立階梯，及第底是什麼，若又不證心地本來空，爭安居平等性智，於此薦得，許爾及第，雖然如是，同共一法中，何更作揀擇，還委悉麼，爭之不足，讓之有餘，記得當山初祖結夏小參，舉慈航禪師道：參禪人第一鼻孔端正，次眼目清明，其後貴宗說俱到，祖云：大衆要會鼻孔端正之道理麼，若也會得穿破鼻孔了也，要會眼目清明麼，便是被傍觀人換卻木楔子了也，要會宗說俱到麼，以拂子擊禪床一下云：宗也到，說也到，向上又有方便在，慈航又云：九十長期明日始，莫將繩墨外邊行，草鞋拄杖都盧脫，但愛瞿曇活眼睛，師曰：山僧續尊韻而重宣此義，祖宗機要正分明，繩墨爲規，只麼行，雲倚青山子歸父，豁開鐵眼與銅睛。解夏小參，大功轉處，解縛去黏，三期滿時，擔起拄杖，不從人傳，教誰慕千聖，非是自得，何更重己靈，一葉飄空，林岳體露，大洋涵月，珊瑚映光，正恁麼時，九十日飯錢還了也，未若未還了，奪爾拄杖子，若又還了，與爾本分草料，恁麼相應得，時不虛度，觸處自由，還體悉麼，滿頭白髮，離岩谷，半夜穿雲入市，鄰復舉歸宗因僧辭，宗云：向什麼處去，僧曰：諸方學五味禪去，宗云：吾者裡只有一味禪，僧曰：如何是和尙一味禪，宗便打，師曰：這箇一槩子如何透得去，打凡打聖，家風顯示，一片打成禪本無味。

法語

示禪人

受生於佛法流布處聽法於祖師單傳門廣大劫際最稀也此生不可空過是法豈不開明耶就中坐禪一行三昧中王三昧也祖師西來不務餘事面壁打坐而已爾直須亡回光返照底之智驪迷頭認影底之愚始得不見道三級浪高魚化龍癡人猶辱夜塘水於此薦取不愛世人愛處不望諸聖證階不混塵中舉威音世外之步超越凡聖弄從上祖宗之風焉勉旃勉旃

同

吾胸中宛如虛碧更無語句可與人逢飯喫飯逢粥喫粥困來合眼健則經行其或要文字如如文字顯露萬象上其或求心要祖祖心要全在爾動靜既在那邊擔荷恁麼事卻來這裡履踐恁麼道者也名也不得狀也不得所以道從來共住不知名任運相將只麼行自古上賢猶不識造次凡流豈可明聖諦尚不爲何況世諦耶洞山示衆云在千人萬人中不向一人不肯一人底是什麼人雲居出衆云某甲參堂去此則吾家家珍勿謾拋卻朝往西天而參取去暮歸東土而問著來問來參去月深年久卻來者裡須得相逢洞山雲居去若又不得相逢長連床上三二十年著心於墻壁辨取矣

佛祖贊

觀音

隨流點腳踏斷幾煙雲海島碧岩裡快占入理門童子莫艱百城步大千春在箇花園瓶中蓮蓮底水涅不染攪不渾

布袋

烏藤擔起大千界行則同行休共休兜率法音成噴地這邊那畔放優遊

永平初祖

捷俊奇相博大心量吸盡曹溪淵源而湛性海奪取太白拄杖而返扶桑鼻孔端有衝天氣眼瞳重具射人光一花五葉春日暖嶺月洞風秋夜涼

永平二祖

肝膽彰眉目乾坤斂寸心湛洞水派兮眼睛如碧海繼吉祥踵兮頂毛似雪林若寶鑑含萬象同虛空不掛鍼閃電威光舒又卷儼居貌座震雷音

寶慶初祖

全相之妙通身之照奪得洞山頂上眼睛透徹吉祥堂奧心要據於塵塵三昧座床暢於刹刹常說曲調拈弄拂柄兮殃及兒孫打雲打水兮好一場笑

自贊

聖也不慕，凡也不疎，曲柔倚身，未涉箇言路。龜毛橫握，能質卦爻圖。衣薄洞峰，風徹骨。年邁嵩岳，雪侵顛。堪攀鐵樹，注紅血。倦處天堂，受妙娛。朝三千暮八百，喫粥了洗鉢盂。

同

面容醜受彼欺瞞，一世貧無物與人。拂子毫頭，眼睛綻。佛魔驗了絕齊隣，吉祥峰月孤耀。蘆花林花累春。

小佛事

戒善大姊起龜

離有離無，以戒爲心地。非男非女，以善爲莊嚴。既離有無，越男女。其間有生滅也，無生與大地共來。死與虛空同去，所以道。生也不道，死也不道。爲甚恁麼，從來生死不相干。而今向什麼處去，足下雲生。

戒智大姊下火

無相大戒爲皮肉，不思量智爲心肝。本是一如何，涉內外。六十七年夕電收影，一靈真性老蚌含珠。要趣向那邊，真常門去。先須相見丙丁童子了，相見底道理作麼生。忽地本無第二人，盡

空俱是煙雲跡。

思達上座下火

思付絕時，達寂滅之本路。根塵脫處，開圓通之妙樓。風吹花自飄，水涵月自流。杳杳借路鳥道，緊緊轉身裡頭。以火打圓相云：者裡是好便宜，祖佛不曾回避。不回避底事，又作麼生。塵塵入箇性火三昧。

慈元侍者下火

慈門廣大，開閉有時。虛空大地，是爲本元。所以道：萬法歸一，一歸何處。某人夢中受生，夢中歸滅。脫卻平生閑皮袋，撞入涅槃一路門。與諸佛把臂而行，與列祖連袂而去。要見恁麼行履處，變以火打圓相云：未脫得這箇火聚了，須看優鉢羅華開敷。擲下火云：開敷了也。

寬海塔主下火

天闊絕涯畔，海枯看底難。珊瑚撐著月，波浪拍天翻。生也全生，花開滿樹紅。死也全死，花落樹還空。且道：本分性命在什麼處。以火打圓相云：只在這裡。擲下火云：涅槃路通。

長樂開山圓機和尚下火

超凡越聖，箇中人。入佛入魔，絕疎親。百骸俱潰散，一靈鎮常真。著破襦衫，回途移步。脫娘生袴，本路飄身。快便難逢丙丁童子，爲半途錢。以火打圓相云：火中芬馥一莖蓮。

祥榮侍者入骨

曉風拂拂，春榮還是空華。從地生，欲買無門什麼價。紅爐百鍊見金精，某人保凌雪經霜歲。

寒操修碎身粉骨堅密行，玄機一撥曾來此際。大命俄零已歸無生，無生一路如何履踐。塵塵一齊入金剛定。

偈頌

山居二首

吉祥峰頭不入間，莫作四時遷變看。兀坐寥寥無對待，青山深處白雲閑。林下幽閑一世貧，無由向外問疎親。清風白月賓兼主，去就平常不誑人。

水

寒風吹結千江浪，識得元來水不流。兩岸相連鐵橋滑，行人顛倒起還休。

和雪韻

一夜換來世界新，山河大地絕埃塵。無陰陽地轉身看，花發少林千古春。

佛涅槃

瞿曇半夜賊身露，天曉追來駟巨追。蹤跡至今無覓處，黃鶯聲滑綠楊枝。

送宗規西堂歸關西

結夏來兮解夏歸，結來解去似雲飛。道無方所到家看，西北一天月一規。

送僧

同氣相通玄牝門，毫端不隔一乾坤。任他萬里回途步，足下無雲月吐痕。

師正慶二年癸酉十月十二日辭世頌曰

毀教謗禪八十年，天崩地裂沒火裏泉。

義雲和尚語錄終

時

延文丁酉受菩薩戒弟子寶慶大檀那野州太守藤原朝臣知冬發願開版矣所集鴻福上報
四恩下資三有者

助緣奉行比丘	瑞雄維那
刊字奉行比丘	等理藏主
洛陽永興比丘	宏心書字
住持永平兼寶慶法嗣比丘	曇希校勘

跋

雲禪師霹靂乎千古未發之道於句後聲前而頓俾盡大地蘇息一番焉宜哉當時盛乎永平
中興之道譽矣今日此錄再行于世國之運也人之幸也雖然若欲向卷中相見猶隔山之在
呵呵

正德第五龍次乙未種九月旦

城州窮谷小衲愚中拜撰

義雲和尚語錄拾遺序

自非宗眼懸日月而豁妙辯傾江河而瀉者安能晃燭乎長夜而津潤乎枯焦哉惟夫雲叢祖幼掀翻教海長挑起宗燈智光烜赫慧澤森茫暨其當祖庭衰晚之日奮然出董永平者實俾積闇頓朗乾叢忽蘇可謂回復祖道策勳於百代焉芝靈石贊師影謂闡洞上宗風得寶慶密意振逸格機弘大法施是爲中興永平之第一世者亦不敢誣也然其語錄先彫不存後學憾焉今逢鷹峰老和尚爲序重刊誰不感喜哉仍搜我山之室內又拾其遺篇輯爲一卷同壽梓焉是時節因緣之所以現成也希冀與前錄交輝而照臨同源而流通

惟時正德第五歲在乙未孟秋穀旦遠孫嗣祖比丘龍堂叟即門盥沐焚香九拜撰題于越前州寶慶練若之含光室中

義雲和尚語錄拾遺

永平禪寺語錄

遠孫寶慶住持比丘龍堂輯

歲朝上堂青天得一以清白日得一以明年得一以稔月得一以盈人得一康樂國得一太平以何爲驗雨舍一味潤土吐萬物榮復舉宏智古佛歲朝上堂師續韻曰擊破三千二儀廓然春舍浩劫古今在前蜂舞不萌枝上藥人歌無影樹頭船

上元上堂我家有箇無盡燈亘古騰今非增減不假定光尊授記豈從飲光佛處分靈山拈花胸目少室得髓安心黃梅夜半密傳石頭住山斧子皆是一燈下風流而已不見道盡十方世界在自己光明裏還要知恁麼光明麼良久云韶風新雪自爲祥一片彤霞和發光古佛誰言過去久然燈半夜挑朝陽

涅槃會上堂澹怕內無搖廓然外不亂黃閣樓前簾垂樞掩紫羅帳裏斂氣飲聲本明不隱如大虛月寂照有靈似空谷神影轉體前白雲就青山之父光分頂後新雪作枯木之英四十九年一字不說末後句義有誰論量藏山澤藏舟壑釋迦老子何處藏身良久云刹刹塵塵頌云半夜鐘聲轉咽霜倏然雙樹變春榮白毫輪裏自休歇遺蔭崢嶸柳絮馨

由西堂遺書到上堂，汲派投源斯道翁，離亭折柳約春風，遺書藏及愁腸斷，閃電捲光沒碧空，鳥道無涯飛騰杳杳，雲程不定來去縱橫，碧潭徹底清，浮沫更無外，大衆卻來底事則不礙，向去底人向什麼處去，還委悉麼，花落風猶馥，鳥啼山更幽。

上堂拈拄杖云，拈來拄天拄地，黑漫漫放下化龍關，聒聒一枝花綻，靈山胸目綿綿，五葉芳聯少室，髓皮密密，本性湛圓，心地瑞光發耀，六根互用通身，手眼隨宜，直得眼處聞聲悟道，耳處見色明心，所以道石人似汝，解唱巴歌，汝似石人，須和雪曲，於此薦取，毘盧揖立下風，舜若窺不見頂，畢竟無依，獨脫時如何，卓拄杖一下下座。

爲由西堂上堂，春風飄拂，奪老梅榮去，隴月依稀，和嶺頭雪投，玄玄去而無去跡，密密來而絕來由，橫身曠古空處，借伴十字街頭，撥轉也，長潮乘疾風激雲外，休罷也，怒濤沈洪海，飲衆流，其或未然，日自照，晝月自含秋，復舉乾峰和尚云，十方薄伽梵，一路涅槃門，未審路頭在什麼處，以拄杖劃一劃云，在這裏，師云，雖然如是，乾峰老漢，既被拄杖，豈永平門下還有不被護底麼，拈拄杖卓一下下座。

上堂，非色聚受箇身，上天下地，離識知有本智，超暗越明，若又論此事，如明珠在掌，胡來胡現，十萬八千，漢來漢現，一念萬年，薦則恁麼薦，如朝日影，退則恁麼退，似水月光，遮莫嶽高四面，雪消緩，只看雨下一庭，艸自青，勾芒德振萬國，際東帝改成一朵花，正與麼時如何，辨道中事，良久云，龍吟枯木，雲起半天。

上堂，當山初祖舉，梁武帝問達磨，如何是聖諦第一義，磨曰，廓然無聖，帝云，對朕者誰，磨曰，不識，祖曰，要知達磨不識麼，廓然無聖不識，汝得皮肉骨髓，有人更問如何，教伊三拜依位，山僧有一頌，少林消息無人識，殘雪和風稍入髓，胡漢何間古鏡中，依前偏正在當位。

暉首座遺書到上堂，絕消息處，倏忽通消息，當舉揚時，冷淡懶舉揚，月落分明，暉徹潭底，風行今虛碧，沒蹤方半座，巍巍倚緇林大位，全身堂堂入如幻三昧，正與麼時，還有入理深談分麼，良久云，泥牛吼水，月木馬嘶春風。

上堂，山應四運，現不動身，水到大洋，飲衆流響，事事虛通，不涉緣，心心絕待，見佛性，宗本絕去，來路門未障，出入人，大衆就是入門人，諸人須知，諸聖雖俱從萬行門得入，佛佛祖祖親所面授，坐禪是正門，所以達磨西來不務餘行，不講經論，只在少林九年面壁而已，實知坐禪則正法眼藏，涅槃妙心，又是傳法救迷情之直路，兄弟須惜光陰，坐禪辨道，古人云，如人駕車，車若不行，打車即是，打牛即是，大衆如何受持，良久云，如是如是。

爲暉首座上堂，吉祥雲白山林爲瑞，洞水派分性海收瀾，東關叢席座頭唱大，北陸戲場合穀筵寒，玉兔懷胎走碧空，驢馬追不及，金烏抱卵落潭底，俊鷹覷不看，石女拋杼拭淚，木人失友迷肝，暉座元已收腳，足行腳，還踏斷生死關也未，欲向那邊避影，影彌露擬來這裏，窺體體還虛，不見道，藏身處沒蹤跡，沒蹤跡處莫藏身，沒蹤跡處且致，如何是莫藏身處，良久云，雪覆四山，雲斯一抹。

閉爐上堂，桃花開時與靈雲合頭赤心片片，火爐閉處箇裏無高下行地平平，亘古騰今桃紅柳綠，諸人見處與靈雲是同是別，若道同直至如今，更不疑若道別，幾回葉落又抽枝，於此明

得生死根源便坐得斷本來家業正現在前還委悉麼主山高峻嶮案山翠青青上堂雨灑四山春色媚黃鶯啼斷綠楊枝爲憐歲月蹉跎去難復壯年改老衰諸仁者直須與道仔細相應不可虛度時光此生莫強愛惜轉一息則來生況又相逢佛祖正法稀於優曇花開須救頭然辨道應知坐禪一門便直指人心見性成佛之西來意也勸君尋常坐蒲團上身心脫落兄弟須知外道二乘營坐禪在雖然與佛祖之單傳天地懸隔外道以我所執故有邪見著味之過二乘以自調自度故有涅槃擇滅之病所以道盡屬情所計六十二見本爲甚折伏二乘外道趣向佛祖正路不見六祖云一切善惡都莫思量自然得入清淨心體坦然常寂妙用恒沙還委悉麼良久云利劍不截死漢

上堂七佛宗風今猶未息向上關棧誰敢打開快便難空過隨處建法輪有時孤峰頂上盤結艸庵呵佛罵祖有時荒村里中放身游逸合水和泥上之不登虛空界下之不沈塵泥底所以道於一毫端建寶王刹坐微塵裏轉大法輪爲甚麼過橋村酒美隔岸野華香佛生會上堂賊既指點賊身露宇宙稱尊還自瞞一杓熱湯蔞頭灑矜誇滌盡見芳顏韶陽老棒頭迅雷狂狗逐土塊遵布衲杓中香水櫻兒在玉盤且問布衲浴得者箇則且致把將什麼物來良久云不因一事無達一智結夏上堂應時號令難回避曠古規繩成大方不許行雲遊嶺外珠轉金盤發靈光百川駛駛同派大海洋洋涵天三月護生行無生道十虛教誰禁神足通箇中履踐畢竟如何莫行難上岸鳥飛不出空

上堂混沌未分早有此土三世諸佛於此降魔軍成正覺於大千界轉妙法輪諸代祖師於此領不陰陽地坐無影樹頭開千聖不傳底向上一門演諸佛未說底祕要大義所以道吾本來茲土傳法救迷情傳法救迷情且致什麼處是茲土以拄杖劃一劃云於此擬議十萬八千如何是向上一門卓拄杖云者杖子跳上築著帝釋鼻孔還要聽祕要大義麼卓拄杖一下云莫逢人舉似

上堂尺璧非財抱璞楚庭荆足寸塊不賤供沙金輪得臺昨日說定法天豁達地安寧今朝說不定法風鳴條雨破塊拈拄杖卓一下云這裏是什麼處在說定說不定者一杖子半拄天半拄地既有兩頭分付一分奉地下釋迦一分奉天上彌勒且現前大衆以什麼奉獻良久云腳下是黃金

上堂胡種族道木人把劫前印印泥水印虛空石女分肘後符護賊軍護家子一人化大開恩澤萬國妥帖歌太平於此蹉過聲前會肯猶滯顧鑑之端言下契宗未出情識之際只是夢中說夢記得舍利弗問須菩提夢中說六波羅密與覺時是同是別須菩提云此義幽深我不能解此會在彌勒大士汝往問彼雪竇拈云當時若不放過隨後與一箇誰名彌勒誰是彌勒者便見水消瓦解大衆雪竇雖有恁麼伎倆未免隨他腳跟後永平不然當舍利弗問夢中說六波羅密與覺時是同是別代須菩提道可憐去日顏如玉卻歎歸時髮似霜須菩提爲甚道此義幽深我不能解此會在彌勒大士汝往問彼索短不構深泉絲長便垂巨浸畢竟作麼生爭之不足讓之有餘

上堂非獅子兒不能獅子窟遊戲非虛空者爭得與虛空對談地平擎千峰千巒之泰山石魯舍無等無價之寶玉古人爲甚要磨磚爲鏡是古鏡耶是明鏡耶若道兩鏡相照於中無一點塵何用措磨手段諸人試斷看若不得斷坐經三生六十劫只是小伎野狐精當兀坐時碧眼胡僧於汝掌中藏身開眼在慚愧慚愧

端午上堂梅雨霖霖斯一味甘露治然生萬叢翳病除差眼裏空花何瞞目瞳外都無鬼魅之怪家誰用白澤之圖雖然如是拈一莖藥草分生殺與七尺鐵棒驅佛魔還有不費莖草不假棒力底對治麼良久云看怪不怪其怪自除

上堂道若虛空無內外雖無遮障到人稀裏頭更不用彈指樓閣風推月啓扉記得當山初祖云昔唐虞有人犯法僅畫其衣服耳然無人犯法所以重法也後來雖行五刑辛法而多人犯法是所以不重法也我儻幸遇不可比唐虞之佛正法縱不畫衣服豈犯法者乎若又犯之不重佛法也苦哉復舉南泉問黃檗什麼處去檗云擇菜去泉曰將什麼擇檗豎起刀子泉曰只解作客不解作主祖拈云若大佛當黃檗豎起刀子時代南泉道我王庫內無如是刀大佛門下又且如何劍去久矣莫敢刻船師曰爲甚如是道良久曰陶壁靈梭起雲吐霧

上堂舉曹山因僧問真佛出世也否山曰不出世僧云爭奈真佛何山曰瑠璃瓶子口僧無語宏智古佛拈曰通身及盡徹底無依撒手與來隨處得用還識曹山老漢麼當戶無影迹徧界不曾藏師拈曰者僧看煙怪火曹山只解藏身不覺露角宏智恐猶涉多岐永平分上又且如何周體清虛不涉緣元來心月自孤圓誰臻這裏論存沒色聚頭邊看普賢

上堂長劍高揮驚龍蛇陣獅子一吼伏象虎橋不見達磨大師踢倒六宗關鎖大通正路抽開五葉瑞英永興祖林直得龍吟雲起虎嘯風隨記得臨濟云夫出家人見解真正辨佛辨魔辨凡辨聖辨真辨僞辨正辨邪佛魔未辨邪正未辨出一家人一家喚作造業衆生不是真出家諸人已離父母家鄉得入佛祖屋裏豈還可成造業衆生乎但是因貪利耽名愛生憎死是自非他而已生死事大無常迅速古責在之面前一團子莫虛令落地爲甚如是良久曰正理人無曲斷

上堂具十方通徹眼底人不能針眼裏藏身揚四域照輝光底月未免深淵水沈沒一出一入半合半開龍泉與鐵斧同鐵利鈍懸殊駝驢與驛驢一途遲速大別爲甚如是先行不到末後太過雖然恁麼我者裏不然良久曰行時同步臥時一床

中夏上堂法王令下許還作莫半路追陽燄休有意氣時添意氣不風流處也風流記得珊瑚云奇哉十方佛元是眼中花欲識眼中花元是十方佛欲識十方佛不是眼中花欲識眼中花不是十方佛於此明得過在十方佛若不明得聲聞作舞緣覺臨粧大衆要委悉恁麼道理麼水自朝東星皆拱北

上堂炎炎火景布橫縱忽地爲警一葉風始信熱寒不臻處蘆花帶雪玉玲瓏巴猿叫月露涵虛碧老鶴舞陰離出銀籠爲甚道上無攀仰下絕已躬仰之彌高梵主不窺得佛頂相聞之稍遠目連終無窮梵音聲爲甚如是不入虎窟爭得虎子大衆要看佛頂相麼豎起拂子云螺髮右旋要聞梵音聲麼以拂柄擊禪床云舌不出口

上堂丙丁童子來自求火盡地蒸砂天際蒸雲須彌外鐵圍內爐鑪宛然發開諸佛及衆生練得也未調達處中樂三禪天其或未然一柄扇子動容作秋復舉麻谷搖扇次僧便問風性常住無處不周爲甚和尚更搖扇谷曰汝只知風性常住不知無處不周僧云如何是無處不周

底道理谷乃搖扇師曰大衆還要體悉搖扇底道理麼任教千般巧但憐一樣風上堂虎嘯懸巖風動山也動人過橋上橋流水不流海大無讓滴水爲甚底不宿死屍山高不厭塵泥爲甚頂難置雨水心萬法根犀翫月紋成角境一心作珠承色更無痕根塵不到處還有人合頭麼記得枯木示衆云知有佛祖向上事方有說話分諸禪德且道作麼生是佛祖向上事有箇人家兒子六根不具七識不全是大闢提無佛種性逢佛殺佛逢祖殺祖天堂收不得地獄接無門大衆還知是人麼良久云對面不仙陀睡多饒寐語大衆要看是人麼拈出拄杖云高著眼要聽這漢寐語麼卓拄杖一下云夢中說夢

上堂五嶽不是高須彌自入芥子微塵非是小涓滴能吞月宮應盡大千證無相毘盧正體宣一句子開八萬陀羅尼門當恁麼時塵刹說虛空說有情說無情說更令生滅說終無間斷舉當山初祖云夫佛祖向上參學先須觀無常迅速莫敢以忘若忘無常生滅者職由常顛倒也三世十方諸佛諸祖之法元不在凡夫之常顛倒中也兄弟須知生生死死輪迴之迹無窮卓卓的的參學之機不昧白雲倚山而以山爲父箇中之功至無功明月栖水而以水爲家直下之住無所住離見聞覺知而有智非生滅之心離地水火風而有身非和合之相所以道四大性自復如子得其母兄弟作麼生得恁麼會良久曰霜天月落夜將半誰與澄潭照影寒師曰

大衆初祖開示如何領會頌曰嶺松老帶歲寒色天月零洋流水漪遮莫青山常運步拋梭石女夜生兒

解夏上堂林蟬葉底作清吟聚散有時嶺上雲可惜三期殘影少蠟人屢誠入精魂時光疾於箭賊過勿張弓露命難繁風花落何望朶莫眼花莫眼花

上堂吉祥峰頂不入人間笑月一聲何作關青葉鬢春樓至晚家林曇曇自斑斑瑞鳳娟娟常棲梧竹明珠轉轉稍轉金盤莫動著動著辜負先聖勿休止休止喪我兒孫爲什麼道逼塞太虛空赤心常片片片底是什麼荷葉團團團似鏡菱角尖尖尖似錐還委悉麼良久曰水泄不通

上堂紛擾擾中住那伽定安閑閑處遊化戲場十字街頭更多知己佛祖屋裏是甚怨讎一拶拶破野狐妖怪大方漏泄從上祖風不見道若立一塵家國喪亡不立一塵野老妥帖於此見得徹動靜二相了然不生復舉玄沙因僧問承和尚有言盡十方世界是一顆明珠學人如何會得沙云盡十方世界是一顆明珠用會作麼沙來日還問其僧盡十方世界是一顆明珠汝作麼生會僧曰盡十方世界是一顆明珠用會作麼沙云知汝向黑山鬼窟裏作活計師頌曰石含皓玉本無類泥水染蓮蓮卻鮮莫怪黑山鬼窟計鷄鳴鳴谷日輪圓

上堂佛祖兒孫專須勘辨道邪正乘大小認楚鷄爲丹鳳握燕石爲玉珍底是多一度落在邪坑小岐歷劫難出西天竺國正像法時猶有解脫堅固禪定堅固圓淨堅固況於像季末法耶又況於邊地遠島耶雖然如是進則得到退則彌遠佛言上上因緣故生於南洲既受上上人

身幸值的的祖道，不可虛度。光陰就中當山初祖，遙航萬里曠海，親見天童淨和尚，倒卻讓曠身心脫落。佛祖宗風，始通扶桑國，國之運也。人之幸也。其恩如山，其德如海，欲酬其恩德，不可漏失。祖師家業，然則當門弟子，莫以那裏閒消息，亂自家古風流。善星比丘，今在阿鼻底，不可忘者。歟！復舉僧問文殊，達磨是祖也，不殊曰：不是祖。僧云：既不祖，何用西來？殊曰：爲汝不薦。祖僧云：薦後如何？殊曰：方知不是祖。師曰：喚爲祖，則觸；喚不爲祖，則背。超觸越背，如何商量？頌曰：佛佛命根藤倚樹，人人心地月開池。春過百鳥不來處，風馥殘梅微笑枝。

開爐上堂，火起地坑，焰徧天方。金佛不曾經過處，木佛是爲涅槃道場。貧舍利，丹霞令人屬。煖落眉鬚院，主教自招殃。既有得失，還有不落，是非底麼？四大性自復，如子得其母。復舉雪峰示衆云：世界濶一丈，古鏡濶一丈，玄沙指火爐云：火爐濶多少？峰云：如古鏡濶。師曰：這爐邊事，如何商量？頌曰：寒風吹火著爐中，猛焰亘天遍界紅。箇裏縱橫如古鏡，勿疑星向紫微宮。

上堂，雪布大地，銀擎千峰，枯林呈浩春之瑞，人物迷一色之功。可謂彌勒下生之先兆，普賢發機之道路。既得八面玲瓏，誰滯千差歧路。畢竟作麼生，復舉長髯上曹溪禮祖塔，廻鑿石頭頭問：什麼處來？髯云：嶺南來。頭曰：嶺南一鋪功德成就也未？髯云：成就久矣，但缺點眼在。頭曰：汝莫要點眼麼？髯云：便請頭垂一足，髯便禮拜。頭曰：汝見什麼道理禮拜？髯云：據某甲所見，如洪爐上一點雪。師曰：者一段因緣，如何透得？頌曰：洪爐一點雪，臘月水心蓮。雙手承垂足，懽迎羅眼圓。

上堂，拈拄杖云：拈來渾身卓立，黑漫漫放下分外抽枝。蒙鬱鬱三世諸佛歷代祖師，借者杖子

薰力，出世度生現身說法。大地有情，草木國土，承者杖子處分，各在自位現瑞放光。卓拄杖一下云：恁麼也得，不恁麼也得。又卓一下云：恁麼也不得，不恁麼也不得。諸人杖子歸者，杖子用在體處。老僧杖子混諸人杖子，體在用處。雖然與麼，諸人杖子撞牆撞壁，許多有力。老僧杖子周體鈍置，不直半文。

上堂，一蹊平坦無差路，踟躕又還滯半途。莫向龍門恠三級，月蟾不覺上珊瑚。慈航和尚云：參禪人第一鼻孔端正，次眼目清明，其後要宗說俱通。誠夫鼻孔若不端，爭辨它香臭，獵犬何知靈羊蹤跡。眼目若不明，爭得見色明心，誰知靈雲見桃花悟道，若宗說不俱通，爭得爲人垂手。拄杖拂子亦難携，如何是鼻孔端正底，鼻與臍對，不背前後，不傾左右，出息入息不短不長，如何是眼目清明底，目須對見鼻頭，不閉不瞬，不張不微，如何是宗說俱通底，以拂子打圓相，又擊禪床右邊云：此宗本自非促延，一句了然超百億。

冬至上堂，天關掀動日月相從，地軸撥旋海山共轉。陰陽頭尾雪埋路，長短交量線不藏。文彩未彰，文彩還顯，買賣貴賤，賤買貴賣，一任汝斗量達磨杓，白釋迦畢竟如何，皓玉不瑕，珠磨顯德。頌曰：寒風和雪扣松堂，石女點頭舒線芒。萬類翻身蟄龍動，梅唇潛笑大方香。

上堂，禪心心地耕犁，如虛空無內外，雷鳴電走一點沒痕。天地不爲一人覆載，日月非爲一人發明，人人自有分，忽地須薦取。復舉趙州問僧：什麼處來？僧云：雪峰來。州云：雪峰近日有何言句？僧云：雪峰道：盡大地是沙門一隻眼。諸人向什麼處。州云：汝若過嶺，箇鐵子去，雪竇云：者僧不從雪峰來，可惜趙州鐵子。師曰：三大祖師雖有出格商量，永平欲質之，雪峰是則是眼。

裏生翳，趙州老婆應病施藥，雪竇忘客貧處，妬它施物，永平分上，又且如何，遮莫雲和明月白，只看松竹雪中青。

臘八上堂，三祇非是長遠，打成一片，剎那執言短促，直須萬年，大功無待賞，兔徑象何遊，眉間蛛網繫得何物，頂上鵲巢啾啄同時，不登山爭逢猛虎，入水便能見長人，耐耐明星瞎，卻罷曇老正法眼，爲甚情非情與釋迦老子同參，要會麼，豎起拂子曰，者毫頭建寶王剎，若涉疑著，試舉看，僧問忠國師，教中只見有情作佛，未見無情授記，賢劫千佛，就是無情佛耶，師曰，如皇太子未卽位時，但一身耳，卽位後，國土山河盡皆屬王，有情受記作佛時，無情作佛，何有無情別得受記，宏智古佛拈云，剎中之佛處處現身，佛中之剎塵塵皆爾，又云，六國自清紛擾事，一人獨恣太平基，永平門下，又且如何，一輪自轉十虛明，破鏡無臺重不照，今朝成道底，又作麼生，頌云，兀兀靜中鼻息高，風刀快斷葛藤巢，曉星落失眼睛裏，忽地出頭舒白毫。

斷臂上堂，順行三千，泥龍吟潭，玉馬步雪，逆行八百，烏龜向火，水老皺眉，達磨不來，東土面壁九年，二祖不往，西天得髓三拜，波瀾起平地，勢高滔碧天，舉震旦第二祖，昨夜立埋腰，寒雪今朝逢，斷臂快刀，當看庭雪痛切，斷腸味，且初祖問汝，久立雪中，當求何事，二祖云，願和尚開甘露門，廣度群品，初祖云，諸佛妙道，曠劫精勤，難行苦行，非忍能忍，豈以小德小智，慢心癡心，欲求真乘，徒勞勤苦，爾時二祖潛把利刀，斷左臂，置于初祖前，初祖知是法器，便許入室，改名曰慧可，可便問某甲，心未安，乞和尚與安，初祖云，將心來，與汝安，可思惟云，覓心了不可得，初祖云，與汝安了，大衆須知，相逢真善知識，古之難今之難，稟受無上大乘，實火裏冰，臘月蓮也，縱

使初祖航海西來，二祖不斷臂得髓，佛正法爭得傳，今日其恩如山，兒孫可報謝者歟，古人酬法恩，或捨國城妻子，或捨頭目髓腦，但約衲僧門下，著手心頭，辨道點足實地行李，是則報謝本分，還要委悉麼，頌曰，雪試嶺頭松，梅娟雪裏容，定乾坤底眼，坐斷六門蹤。

上堂，賊智勝君子，三更過鐵門，忠言還截舌，好事不如無，若又了達自心本際，何有瞞自瞞他，羅葛倚松千尋外，吐丹腹明月印，水九折底，涵碧天，既得徹頂徹底，何更關是關非，諸兄弟此日如矢，命亦難留，魚迫少水，人曷放遊，年光自極，新春自萌，白髮老人，誰復壯年，於此退步，子細看，白雲自靜，長空何煩，四山運轉，還相應履踐麼，莫怪當初沒腰雪，至今梅葉自娟娟。

上堂，學道如大虛清廓，不得邊量，似大地堅牢，生長萬物，上山須到嶽頂，不到不識宇宙寬荒，入海須究沙底，不究爭測滄溟深廣，到與不到，只是由猛烈與鈍滯，然則諸人，莫強愛惜浮世之身命，須百尺竿頭進一步，不可求覓空花之佛果，金屑雖貴，落眼成翳，於此薦取，有什麼難，入山不畏虎兇，獵者勇，入水不避蛟龍，漁夫勇，白刃臨前見死如生，將軍勇，作麼生是衲僧勇，良久曰，曉天喫粥，午時喫飯。

上堂，脩竹不知帶銜天綠，矮松何悟有凌雪操，塞壑填溝，是法無高下，穿嶺夷嶽，大道方坦然，復舉，調達以逆墮獄，因佛令阿難傳說，汝在地獄安否，達云，雖在地獄，如三禪樂，佛又令問，汝欲出否，達云，待佛入來，我便可出，阿難云，佛是三界慈父，豈有入地獄分，達云，佛無入獄分，我豈有出獄分，師頌曰，杲日未零地，落花難上枝，珊瑚撐著月，香餌引魚龜。

上堂，清白傳家，啓窓山月朗，功業施外，隔岸野花香，雖然如是，差之毫釐，天地懸隔，於此薦取，

徧界不曾藏舉，仰山到東寺，寺問什麼處來，仰云：廣南來。寺曰：承聞廣南有鎮海明珠，是否？仰云：是。寺曰：作何形段？仰云：白月則隱，黑月則現。寺曰：還將得來？仰云：將得來。寺曰：何不呈示？老僧仰云：昨到瀉山，被索此珠，直得無言可對，無理可伸。寺曰：真師子兒，大獅子吼。當山初祖拈曰：這箇因緣，叢林喚爲呈珠話，作麼生是珠？以拂子打一圓相云：不是這箇麼？這箇且致，那裏是呈珠處？乃云：飯足粥足，諸人日用著力處，直饒索到珠在處，大佛與備三十拄杖，師曰：初祖提唱是則是，猶用拂子力，借拄杖功在。山僧欲對諸人，頌出明珠，曰：圓如皓月，點清虛，非是缺，還無有餘，罔象端然進前處，元來黃帝不遺珠。

小參

結夏小參，九旬守制，自安閑，雲白月明，照碧巒圓，覺一輪非廣狹，十方通會我伽藍，以法爲界，何限涯畔，是爲本分道場，以道爲心，豈涉思量，是名平等性智，摩竭正令，猶如披沙揀金，毗耶默然，只似守株待免，於此薦取，驅陝府牛，不陰陽地耕種，與謝三郎無影樹頭同船，還委麼？行到水窟處，坐看雲起時，兄弟成麼？事但在時節因緣，雖然，麼是非促延，三月安居儀則，千佛處護念也，以古佛道爲今人心，以今人心通古佛道，所以道，道無心合人，人無心合道，要識箇中意，一老一不老，道與心既相合，老與不老，如何甄窮，白雲倚青山，爲父爲子，家業不可

失墜，松風拂明月，爲主爲賓，相見威儀，須親僧問古德，洞山有三路學，如何是鳥道？德云：應處無蹤跡，絲毫不礙身，問：如何是玄路？云：圓同大虛，無缺無餘，問：如何是展手？云：當機的的，用的的，用當機，永平老漢如何拈頰，飛騰有路，足下無絲，未著邊際，阿誰敢窺，即是鳥道，十方無壁落，四面絕門闔，上未作攀仰，下亦絕已躬，即是玄路，拈來也，徧身手眼，不曾當放下也，手眼通身，又多許，是法住法位，世間相常然，即是展手，還有不涉三路，向上一路麼？仰之高讚之堅，珍重。

冬夜小參，塵塵悉三昧門，何動何靜，法法是一心性，越境越人，外不見黑闇女，家誰用白澤圖，陰極而非去留，月面佛表裏，僉照陽生而無來論，日面佛應節舒光，於此薦得，日驅石牛耕一片不陰陽地，還植鐵樹，看少室五葉花春，進前移步，底作麼生，不許夜行，復云：林下禪衲子，先須鼻孔端直，若得恁麼端直，終不敢欺誑於人，方知直下非兩段，所以道：不涉二邊，更無向背，又道：在千人萬人中，不向一人，不背一人，又道：說阿羅漢有三毒，不說如來有二種語，諸佛與衆生，元來同性，爲甚成諸佛，爲甚作衆生，觸處不曾誑人，言端語直，故曰：諸佛逐物自誑，落有落無，故曰：衆生以何爲同性，地是堅牢，鑽之彌堅，所以道：盡大地是一箇解脫門，水自濕冷，攪之不渾，所以道：水清月不現，火方熾熱，鍊鐵鍛金，所以道：三世諸佛，在火焰裏，轉大法輪，風常動搖，胃之不繫，故云：風性常住，無處不周，諸佛與此性相應，諸人不會，缺此性，玄沙曰：釋迦老子與我同參，諸仁者，今夜六陰已極，來朝一陽來復，闔國人合力推，也今夜不可到來朝，千鐵牛同身牽，也來朝不可來，今夜是知陰也，實不去，陽也，實不來，名之爲如來，亦名觀自在，譬如

滄溟上客，泛蘭舟於月渚，煙波隨情放曠，記得藥山一夜無燈燭，示衆云：我有一句子，待特牛生兒，便向汝道。于時有僧出云：特牛生兒也，自是和尙不道。山曰：把燈來，其僧便歸。衆曰：藥山曩祖心燈已明，爲什麼更索燈？者僧未把燈來，爲甚便歸？衆明中有暗，勿以暗相逢，暗中有明，勿以明相覩，明暗各相對，比如前後步，超明越暗，如何運步？良久云：步步不迷方，夜深久立珍重。

除夜小參，萬機休罷，千聖不携，雲橫谷口，歸鳥迷棲，年窮歲盡，虛空老倒，月迫影收，玉兔懷胎，雲中木馬嘶風去，夜半烏鷄帶雪飛，當恁麼究盡時，條條無盡，無盡條條，年也無盡，太歲在癸亥，月也無盡，端月是甲寅，日也無盡，朔旦三朝，還委悉麼？宗非促延，一念萬年，無在不在，十方目前，箇裏家訓，是甚消息？佛言：欲知佛性義，當觀時節因緣，時節若至，其理自彰，過去已去，未來未至，現在不住，觀箇什麼時節？只惜寸陰分陰，不虛度時光，是則時節當觀也。十世古今，不出當念，今時則空劫本基，然則面前一著子，勿亂放捨，一時不浪蹉過，十二時中不虛過，一年始終十二月既過，臘月小盡二十九則窮，舊年既往，新歲未來，頭尾未分時，如何措足？欲向黑帝問，庭際雪消沒跡，欲向青皇問，簷外梅笑流芳，是知前後際絕，古今無間，不見古人云：十二時中不依倚一物，然則物物不依倚底一物，超長超短，非色非空，時時不依倚底一時，非晝非夜，超陰越陽，三世諸佛住此一時，轉八萬藏之法，諸代祖師將是一物，與五葉花之春，是非人天識智之所及，況又利名榮辱之所關乎？船子和尙屬夾山云：莫住城邑聚落，於深山裏鑊頭邊，接得一箇半箇，嗣續我道，是則避名利於山谷裏，植道種於鑊頭邊，底謂歟？僧問雲居，僧家

畢竟如何？居云：居山好，僧禮拜起，居云：爾作麼生會？僧云：僧家畢竟居山，於善惡生死逆順境界，其心如山不動，居打一棒云：辜負先聖，喪吾兒孫，居又問傍僧：汝作麼生會？其僧云：僧家畢竟居山，眼不見玄黃色，耳不聞絲竹聲，居又打一棒云：辜負先聖，喪吾兒孫，拈云：二僧見處已辜負，永平門下如何相應行履？居山好，居山好，從上祖宗皆一樣，誰識丁丁伐木聲？青原斧子振深奧，夜深久立珍重。

雲居膺和尚贊

郁芳驚嶺，拈華瑞，端的新豐珍曲吟，渡河會水波曾不濕，燒庵母一法措，習襟獨坐經年而天供更無缺日，得旨以後而通眼窺不容針，性潔茂如碧潭秋月，腳尖踏斷盡地黃金，知見俱忘滅，命脈連于今。

謝監寺偈

胡亂已來通是事，不虧鹽醬幾餘香，任他夢裏語刀子，庫內一靈雪上霜。

永平禪寺鐘銘并序

夫永平者，佛法東漸之曆號，扶桑創建之祖蹤，鷲嶽之一枝，於是密密少林之五葉，至今芬芬薤草以降，年序幾乎一百，棟莖粗列，樓鐘空乎，大家勸誘宏道者，林禪人去歲孟夏，發化方以遠，近緇素助力，今秋酉月成矣，開山和尚在日，鐘聲許多鳴山，與今夏結制後朝，梵鐘忽爾響嶺頭，先兆冥符可貴者乎？昔青葉髻於竺土，造青石大鐘，化佛逐日放光，今二禪人在吉祥，鑄青銅寶器，祖宗與時護念者也，往時與今日，函蓋乾坤，不疑洪韻，繼劫前劫後，作銘曰：

此吉祥山方外深巒，帝都雲隔峻嶺雪寒，受曹源派湛洞水潭，殿堂年舊樓臺未安，以他化功，得箇梵鐘，槌發有則，聲揚無窮，千佛同風，一音是從，前後際斷，緊漫相交，迎臨欄月，送度林風，債魚業淨，化蝶夢回，邪定牀幹，燒煮鑊摧，寶珠輝頂，長鯨吼胎，神諾空谷，響及當來。

永平正法眼藏品目頌并序

正法眼藏，密傳密付，古之與今，嫡佛嫡祖，永平元祖，入宋穿鑿五葉之根蒂，歸朝能爲一天之蔭涼，忒煞婆心，以和字柔漢語，奇妙善巧，令人不累文言，如石含玉，似地擎山，聊綴卑語，述其大旨耳，後昆此八字，不打開，妙心源未通徹，一大藏教，少林妙訣，夢也未見在矣，嘉曆四年中夏，曾孫義雲和南拜書。

第一現成公案 是什麼

面前一著莫蹉過，空劫春容此早梅，一字入公門內了，九牛盡力挽無廻。

第二摩訶般若 照了綿密

智燈照徹解陰空，什麼處人居暗室，徧界不藏誰敢疑，摩訶般若波羅蜜。

第三佛性 達彼達此

威音世界非幽遠，直至今其理自彰，本分性光莫疑怪，大千界日出扶桑。

第四身心學道 翻巾斗

玄豹霧融毛彩變，靈犀月朗角紋成，朝參暮請甚階級，曠古風流非缺盈。

第五卽心是佛 將錯就錯

江西直說透波心，從此大梅卜絕岑，三十年來人不識，香風馥馥在而今。

第六行佛威儀 佛眼難窺

了了無靈知可了，左旋右轉是風流，腳跟點處沒蹤跡，何向佛邊得逗留。

第七一顆明珠 不染不磷

圓陀陀八面玲瓏，轉轉轉不留朕蹤，耐競頭馳赤水，進前罔象叶皇風。

第八三時業 雨過雲一抹

現生後報誰疑著，猶若夜輪浮水中，照用靈靈絕三際，爲憐松竹引清風。

第九古佛心 撞牆撞壁

山河大地星辰宿，空劫已前自己心，一念僅萌瑕作鏡，無爲道人在溪林。

第十大悟 徧界不藏

世尊密語無人會，迦葉當初不覆藏，山嶽連天常吐綠，溪深和月轉流光。

第十一坐禪儀 枯木花開

兀兀寥寥倚蒲團，龍吟雲起黑漫漫，箇中消息絕思議，剎海三千祇一般。

第十二法華轉法華 被月照翫月

明月一輪吞萬象，卻還萬象發蟾華，任他順逆迷悟類，祇是法華轉法華。

頭尾不相諍，龍蛇互契科，虛空與萬象，法華轉法華。

第十三海印三昧 波波絕待

重淵游泳得三昧，龜印印破徹底清。萬派湛潮沒增減，前波未到後波盟。

第十四空華 死水裏龍吟。

虛空樹上瑞華發，恁地起風飛亂零。莫語眼中著金屑，少林五葉至今靈。

第十五光明 明暗不倒。

明明照用敢誰藏，日自熱焉月自涼。亘古輝今絕疑怪，山門佛殿及僧堂。

第十六七行持 超佛越祖。

順轉未休逆行臻，道先規矩與時新。覺雄斫額煙村外，十地三賢非比隣。

第十八觀音 六耳不同謀。

偏身斯手臂，通身是眼睛。更無物當著，何更待精明。趨倒天堂與寶刹，劍樹刀山是都城。到處
亡知所入門，不犯名。

第十九古鏡 呼則易遣則難。

觀面孤圓絕點埃，任他胡漢現形來。雪峰曾背彌猴脊，箇箇眼睛於此開。

第二十有時 昨日定今日不定。

時節因緣誰愛憎，春松秋菊任騰騰。高甌巍巍嶺頭月，逗挑深深海底燈。腳邊雲霧瀉，溪澗水
澄澄。

第二十一授記 與誓隨時。

虛空授記森羅受，大地有情綻眼皮。於此保持劫前事，空王佛裏是令嗣。

第二十二都機 明中隱暗裏顯。

圓前圓後吞兼吐，本分靈明非缺盈。影印千江秋自普，一輪光裏地天清。

第二十三全機 機先事作麼生。

盡乾坤裏露全身，人物會通方乃親。不動萬機一機穩，箇中阿誰著根塵。

第二十四畫餅 饑不擇食。

甘辛苦澁不關舌，王膳畫成何息飢。詩客不飽風月味，數經便路拾於遺。

第二十五溪聲山色 超見越聞。

廣長舌滑碧溪中，螺髮翠濃山頂松。八萬法蘊甚章句，文言絕待超宗風。

第二十六佛向上 千聖不携。

仰之高矣鑽之堅，佛祖依前曾不傳。滴水非涓納天月，大千界外幾三千。

第二十七夢中說夢 睡多饒語語。

黑漫漫明歷歷，睡裏諸夢睡裏成。胡蝶逍遙齊物事，王庫刀子是何形。

第二十八攝法 錦上添花。

大施門啓九天宮，口絕愛憎是法輪。利物同風千里外，無根樹上四時春。

第二十九恁麼 直趣。

我如是汝亦如是，此土西天雲與水。鷲嶺月光少林葉，恁麼人作恁麼事。

第三十看經 遮眼。